



# 花散里の手帳



舞夜じよんぬ

誰も信じないかもしれないけれど。と前置きして、  
「私もね、小学校の頃はもてもてだったんだからね、ほら、すい君、そこで信じられないって顔、しないで」

彰子はぼんぼんと、水口くんの頭を軽く撫でながら続けた。

「どのクラスに入ってもそうだったんだから。給食の時もちゃんと、私の分だけ多めに給食よそってくれたりしたし、たまにはあげパンを半分もらったりね。遊びに行く時も、男子ばかりのグループに私だけ入れてもらったりしたんだから。いろんなところ連れてってもらったよ。山の中で昆虫集めに行くのも一緒だったしね。すっごく、得してたんだよ」

「それが今では、全然だよ。奈良岡のねーさん」

きょとんとした顔で、口を尖らせて言うのは水口くんだった。制服を着ているからまだ、青大附中の二年生だと分かるけれども、たぶん小学生の群れに放置したら気付かないだろう。きちんとマシュマロカットに切りそろえているのは、親の趣味だろう。そりゃそうだ。水口くんの家は個人病院だと聞いている。絵に描いたようなお坊ちゃまなのだ。

「そうなのよ、なんでだろうね。あ、でも給食の時はたまにプリンもらったりしてるから、おあいこかな」

他の子だったらむかつくらしいけれど、彰子からしたら水口くんを始めとする男子の言葉は軽く、ぼんぼん跳ね返して気持ちいい。一部の女子ならば、「なんてこと言うの、ガキのくせに！」とヒステリーを起こすかもしれない。そういう感覚が彰子にはないらしかった。めんこいめんこいと、撫でてあげるしかない。

「それにさあ、男子がしてくれることって、給食のことしかないのかなあ。ますますぽちゃぽちゃになっちゃうじゃないか」

「痛いところつきますね、すい君。女子にそんなこと言ったら、もっと嫌われちゃうぞ」 いい表現だ。ぽちゃぽちゃ、か。まあ仕方ないかな、と思いつつむっとしそうなのに許せてしまう。

「だって、他の奴だって言ってるじゃないか。ビール瓶って」

否定はしない。彰子はちろっとすい君のほそっこい、それでいておつむの肥えていそうな顔を見つめ、思いついた言葉を口にした。

「私がビール瓶だったら、すい君はドリンク剤の瓶だね。すっごく頭がいいくせに、こーんなにちっちゃいんだもの。もっと、たくさん食べなくちゃ大きくなれないよ」

「ドリンク剤？」

「そうだよ。すい君なんて、難しい問題をたくさん解いて、今月だってテストトップだったでしょ。なのに、こーんなにちっちゃいんだもの。将来体力がないと大変だよ。お医者さんになるんだったらさ」

「奈良岡のねーさんみたいに、ぽちゃぽちゃでないと、医者になれないなんてことないだろ。医学部に行ければ」

天井を見上げて思い切り彰子は笑いこけた。めんこい奴だと、もう一度思う。

「お医者さんはね、手術で何時間も立ちっぱなしだし、真夜中に患者さんの様態が急変したりしたらすぐ起きなくちゃいけないんだからね。患者さんがふにゃふにゃなのに、お医者さんがダウンしてたらまずいでしょ。まずは、体力だよ」

「そりゃ知ってるよ。うちの父さん、すごく疲れてるもん」

「すい君だって将来はお医者さんになりたいんでしょう。知ってるぞ」

なぜ、最近になって水口くんが彰子にべったりするようになったのか、見当はつく。もともと人見知りする子ではあったけれども、話し掛けると素直だし嘘がつけない性格だったし、けっこうめんこい。彰子が保健委員になった理由などを知るやいなや悔しがり、

「僕も保健委員になればよかったあ」

とすね始めた。

「だって、保健委員で、そんなお医者さん関係の話してもらえるなんて、僕知らなかったもの。僕、医学部行くつもりなのに、もっと、解剖とかいろいろ覚えたかったんだ」

「すい君にはね、早いうちからお医者さんの勉強するよりも、もっと遊びなよって、どっかの神さまが導いてくれたんでしょうよ。ほらほら、私とくっついてると、ぽちゃぽちゃ菌がつくって言われるぞ」

彰子は向こう側で男子同士、カードゲームをしているグループを指差した。二年D組の男子グループはおおまかに三チームに分かれている。だいぶ子どもっぽい遊びをしているのが水口くんのいる場所だった。

「はあい。じゃあね、ビール瓶ねーさん」

「ありがとう、ドリンク瓶の君」

戸口にもたれかかって、別のグループ男子二人が小さい声で何かを話している。手にはLPレコードの入ったビニール袋をぶら下げている。たぶん貸し借りしているのだろう。

「ねえねえ、何のレコードかなあ」

ふたりに聞こえないようにささやきあうのは古川こずえちゃんだった。一緒にいるのが清坂美里（きよさかみさと）ちゃん。前髪をなんとか摘み上げながらきっぱり、答えていた。「立村（りつむら）くん、洋楽好きだからね」

「さすが、よく観察してるよね。相手の南雲（なぐも）の方はどうなのさ」

「さあ、どうなんだろう。南雲くんもロックとかそういうの好きそうだもんね。でも」

「まあ、立村がそういう壊れたタイプの曲を好きだとは、私も思えないけどね。ねえねえ、羽飛はどうなんだろう羽飛（はとば）は」

思わず彰子は耳をそばだてた。

「こずえ知ってるでしょ。貴史はロリコンで面食いだから、鈴蘭優（すずらんゆう）のおっかけに専念よ。もちろんね、立村くんの影響で多少は洋楽とかそういうの聴いているみたいだけどね」

——鈴蘭優かあ。

ため息がこぼれる。残念ながら彰子とは似ても似つかぬかわい子ちゃんタイプのアイドルだ。

気付かれてしまったらしい。こずえちゃんが彰子の方に近寄ってきた。耳もとあたりでやわらかくそいだショートカットが似合っている。部活にも委員会にも所属していないのがもったいない。バレ一部に入ったらきっと、人気出ただろうに。こっくり彰子は頷いた。

「彰子ちゃん、やっぱりさあ、羽飛はアイドル系でないと無理なのかなあ」

こずえちゃんはすごい。入学当初からずっと羽飛くんのことを好きだと公言してはばからないとこだ。

「羽飛くんねえ、可愛い子が好きってタイプみたいね」

「そうなんだよなあ。鈴蘭優って感じだと、思いっきり髪が長くて、耳にお団子にできるような感じで、もっとくりくりとした目をしてて」

「こずえちゃんだって目は大きいじゃない」

あまりいい慰めにはなっていないけれど、もともとこずえちゃんは男の子っぽい可愛さがあると思う。きっと将来は、美人さんになるのではないだろうか。

「そうかなあ。でも、ギョロ目だと言われるだけかも。あーあ」

こずえちゃんが大げさに、ため息をつく。すぐに美里ちゃんに話し掛けた。

「ま、いっか。美里。それよりさあ」

美里ちゃんがちろちろと戸口の男子ふたりを眺めては、軽くうつむいてノートを開く。数学の問題集を開いて、ちらっと彰子の方に寄ってきた。

「彰子ちゃん、この問題なんだけど、空間図形の問題、どうしてこういう答えになるのかわかんないの。教えて」

「簡単な解き方の解説、写してきたから見る？」

言うのもなんだが、彰子は数学がお得意なのだ。

「うん、ありがとう。いいよね、彰子ちゃんは数学とか理科とか得意だもんね。私、どうしてもわかんないところあるから困っちゃう」

隣りで聞いていたこずえちゃんがまぜっかえす。

「なに言ってるの、あんたのダーリンに比べたらまだまだ」

言いかけたところでぽこんと叩かれていた。

「こずえ！ やめなさいよ！ なんもないんだからね、もう」

心なしか美里ちゃんは真っ赤だ。うつむいて問題を写していた。

「ほおら、赤くなってる。奴に気付かれたら、どうするって」

——美里ちゃんはどうして羽飛くんじゃないんだろう。

彰子は席後ろ側に陣取っている羽飛くんを探した。後ろ側の席で花札を広げてはしゃいでいる。目鼻くっきりした、いかにも裏表ないよって顔が気持ちいい。一年生の女子たちが騒ぐのも無理はない、と彰子と思う。ブレザーに最近は、飛行機のピンバッチらしいものをつけている。校章でないことは明らかなので、よく先生に呼び出しをくらっているらしいが、その辺はお調子ものでうまく乗り切っているらしい。そうこずえちゃんから聞いた。髪の毛もだんだんつつん立ってきていて、微妙に整髪料独特の艶がある。

——羽飛くんは、面食いなんだもんね。

わかっているけれど、やっぱりため息が出る。こずえちゃんに気付かれないよう、彰子はもう一度、唇だけで吐息をふきだした。

最近、水口くんが彰子になつき出したのにはわけがあった。

もちろん入学当時から、赤ちゃん赤ちゃんしていた水口くんに、「ほら一緒に遊んでもらいなよ」と、保母さんみたなことをしていたけれど。でも、他の女子だってみなしていたことだった。彰子だけが目立ったわけではない。現在彰子が所属している二年D組は、裏でいろいろあるにせよ、仲間はずれにしたりするような奴はいなかった。

二年に上がってから、クラスの道德の時間で、「将来の夢」を発表させられた時、「将来は医学部に行って、お医者さんになりたいんです。だから保健委員になったんです。今のうちから医学関係のこと勉強できるから」

と言い放ち、クラスを爆笑の渦に巻き込んだ。馬鹿にされたとは思わない。彰子も笑ったから。

次の瞬間、あの水口くんが手をひょいと挙げて発言したではないか。

「僕も、うちの病院を継ぐために、医学部に行きます！」と。

あの、

「見た目小学生」

「でも頭はいいけれど」

「頼むからいきなり泣きじゃくって物を投げるのはやめてくれ」

の水口くんが、医者を目指しているなんて、想像する方が難しい。

あきれかえった爆笑と囁し声にもめげなかった。その時に限っては水口くん、本気だったらしくがんとして笑わなかった。

「だったら、どうすればいいのかな、奈良岡」

担任の菱本先生がからかうように彰子へ声をかけた。

「やっぱり、解剖になれるため、お魚やお肉を捌く練習をしたほうがいいと思います。終わったら料理して食べられるしね」

水口くんに、あえて笑顔で話し掛けた。なんとなくだけど、水口くんは彰子の言葉に釣られたから言い出したのではなく、どうしてもいつかは宣言したかったんじゃないか、そう思えてならなかった。やっぱりそういうところが、「すい君」めんこいと思う次第だ。母に勧められた勉強方法だった。クラスがさらなる爆笑状態に陥ったにも関わらず、水口くんはまったく笑わなかった。ちょっと冗談がきつすぎたかも、とは思ったけれど、本当のことなのだから仕方ない。

たぶんそれまでは一度も、自分の夢を口にしたことがなかったのかもしれない。ばかにされるからがまんしなくちゃいけないと思ったのかもしれない。でも彰子が同じ夢を追いかけっていると知って、「女子の中でも特別なお友だち」と水口くんは認識してくれたらしい。

「奈良岡のねーさん、ビール瓶のねーさん」

二番目の呼び名はちょっと、女子について失礼だと思わなくもない。

当然のことながら、彰子は水口くんにお返しの呼び名を贈呈した。

「なあによ、ドリンク瓶の君」

頭の栄養は満点なのに、瓶は小さいし硬い。いつもひょろひょろしていて小柄だけど、学校の成績は非常によろしい。そんな水口くんにはぴったりだ。自画自賛してしまう。

にははは、と素直に喜んでいいる水口くんと遊びながら、彰子は思う。

——本当に、小学校の頃はこういう男子ばかりだったんだけどなあ。

——私の『黄金時代』は、早いうちに過ぎちゃった。

——ま、いっか。あとで父さんに、中学の連中たちがどうしてるか聞いておこうと。

家に帰ってから家で料理に専念した。毎度毎度「解剖学習」するわけにはいかないので、シチューの素にたっぷりさいころ牛肉を入れて煮込むだけにした。五月だからまだまだあったかいものでも平気。父はそろそろ戻ってくる頃だし、母が遅くてもフリーザーに入れておけば大喜びで食べてくれる。確か、今日は病院の当直だと聞いていた。

「もう料理できたかな」

穏やかに、足を忍ばせて帰って来たのが父だった。めがねをかけている。細い。骨が浮き上がっている。一時期彰子は、「父さんってもしかして人体模型から生まれたんじゃないだろうか」と思ったことがある。どうして自分のような「ぼちゃぼちゃ」系の子どもが生まれたのか謎だった。たぶん母にまるごと似てしまったのはわかるが。

「父さん、ほらほら、食べないと体力もたないよ」

「彰子さんのお肉を少しほしいなあ」

全く男性は彰子の乙女心を逆なでするようなことを平気でいう。でも、「ま、いっか」で流せるからそんな腹も立たない。仕方ない。

「今日は父さん、学校で何かあったの？ 疲れてるね。ここ最近」

「いや、なんでもないよ」

そういう言葉の力なさに、彰子は思う。

絶対何かがあったはずだ。

学区内の公立中学で社会科教師をしている父は毎日のように、疲れきって帰ってくる。教師が父親というと、やたらめったら規則に厳しいとか、勉強についてはうるさいとか、先入観を持って見られることが多い。だが彰子からすれば、それぞほんとの「先入観」だった。家に帰れば「頼りないけどやさしいお父さん」のまま。そりゃ多少は勉強のことも話をするけれども。

「ま、いいじゃない」とこっちで流せばそれですむ。

「ならさあ、お父さん、最近、そっちの学校の連中元気なの？ 私も最近、青大附中の方の友達としか遊ばなくて気になってたんだけど。ほら、時也とか元気なの？ あいつもあまりしゃべらなくなったって、この前和子ちゃんから聞いて気になってたんだけど」

「ああ、時也か」

皿に盛ったシチューを口に運びながら、ほおとつづく父。

「どうしたんだろうね。クラスで何かあったのかな。父さん、聞いてないの」

「いやな」

口ごもるようす。口にまだ食べ物が残っているわけではなさそうだ。

「この前、時也（ときや）のうちに家庭訪問に行ったんだけどな」

「うんうん」

「……彰子さん、今度、小学校時代のみなどと、飯盒炊爨やろうか？」

飯盒炊爨といえば、青潟河川口と呼ばれる河原で石を積み上げ、カレーライスや焼肉をこしらえて、食べて騒ごうって奴だ。もろ手を挙げて賛成したいところだけど、話が飛んでしまうと彰子も答えに困る。

そりゃあまあ、いくら担任しているクラスの生徒が、彰子の友だちとはいえ、露骨に内容を話すわけにはいかないだろう。

「でも、時也がどうしたの」

「うん、まあな。でも彰子さんの友達は何にもたくさんいるから、全部集めてばあっと騒ごう。母さんの非番の日にでもな」

「今週は厳しいんじゃないの？ 母さん、研修会があると言ってたよ」

「それじゃ、彰子さんだけでもいいか」

父の言う言葉は取り留めなかった。

「日曜は、今のところ予定ないよ。わかった。じゃあ他の子に連絡取っておくね。そうだ、時也のこと心配だったら、私が連絡しておこうか？ お父さんだったらやっぱり、先生だし。それに家庭訪問したばかりでしょ。ちょっと、要注意人物って思われているかもと、時也のことだから悩んでしまうかもよ」

何かを言おうとする父を押しとどめ、彰子は受話器を取った。

「ああら、彰子ちゃん、お久しぶり」

名倉時也（なぐらときや）への電話番号は、ちゃんと二年一組連絡網の中にプリントされている。電話口に張られている。すでに黒くにじんでいる。使用しまくっているのは父だ。彰子ももちろん愛用させていただいている。

「こんにちは。時也、いますか」

時也のお母さんは、てきぱきなんでも片付けるタイプの人で、ぼおっとしている時也がどうして生まれたのか謎な存在だ。親子遠足の時などもそうだ。何もしないで空を見つめている時也のそばで、お母さんはあっという間に荷物を出したり片付けたりお菓子をくばったりと、捌きが早かった。「過保護」と陰口を叩かれないわけではなかったけれども、いつもお母さんと行動しているわけではないのだから。からかう男子たちには彰子の方からきちんと、「あんまりやりすぎたら、今度のクリスマス会、私の手作りクッキー、あげないよ」と脅してあげることにしていた。結構、効果的な注意方法である。

「お父さんから聞いたの？」

「いいえ、今度、みんなで一緒に遊ぼうって企画立てたんで、時也もどうかなあって思ったんです」

「まあ、彰子ちゃん、勉強忙しいんでしょう。青大附中って大変なんですよ」

みなそう言う。大変でないとは言わないけれど、そんなみんなが騒ぐほど怖いところでもないのに。第一、彰子がいつも遅く帰るのは決して塾に行っているわけでも勉強しているわけでもなく、保健委員会の関係で残っているくらいだ。保健室は勉強もできるし、おしゃべりの場もある。彰子にとっては庭だった。

「みんなに会えないからすっごく、淋しいです」

これ以上突っ込まれるのは面倒だ。早く時也に代わってほしかった。一秒、空白が流れ、おそらくそれでお母さんも気付いたのだろう。

「ときや、彰子ちゃんから電話よ」

と、遠めに響く声がある。確か時也の部屋は二階のはずだった。受話器を取ったらしく、鼻息らしき雑音が聞こえる。でも答えない。全く、返事くらいしてほしいものだと思いつつも、この辺が時也らしいとも再認識する。

「もういるんでしょ、時也、元気？」

返事がない。ただ、唇がふるえた程度で、うっすらと空気の揺れる音が聞こえる。あいつなりに答えてはいるのだろう。彰子は続けた。

「最近、元気ないって聞いてたからね、どうしたのかなって電話してみたんだ。ううん、父さんとは関係ないよ。私も最近、小学校の時のみんなと遊んでなかったからね、せっかくだしみんなでどこか行こうかと思ったわけ。飯盒炊爨なんてどうかなあ。青潟河川口の河原で、カレー作ったりして遊ぶの。火を使うから大人を連れてかなくちゃんないけど、うちの父さんだったら大丈夫でしょ。大人を利用するのも手だよ。ほら、聞いている？」

一気にまくし立ててみたけれど、返事はない。

聞き取れなかったのかもしれない。時也は少々鈍いところがある。話を変えてみた。

「そうだ、時也、ちょっと気になったんだけどさ。今クラスで、意地悪されてるとかそういうことはないの？ あんたおとなしいからね。ちょっと嫌なことされても、ずっと黙ってること多いでしょう。言わなきゃだめだよ。やられることあったら絶対やだって」

相変わらず吐息のみの返事だ。

「もしなんかあるんだったら、相談に乗るからね。ま、私なんかだったらあまり役立たないかもしれないけどね。でもさ、同じ学校じゃないから返っていろいろ話できるところあるよ。あ、それとも、私の言い方、うっとおしかった？」

男子によっては彰子のように話しかけられるのを嫌がる奴もいる。青大附中に来てから驚かされたことのひとつだ。あまり干渉されたくないということで、彰子を見捨てる男子が多い。

「そんなことない」

やっと、一言だけ聞こえた。完全にひび割れた声だった。男になったねえ、とひとりごちる。「ああ、よかった。いやね、私も小学校の黄金時代からすっかり引きずり下ろされてる始末だからさ。たまには、気持ちよく誉めてほしいってのもあったのよね。ありがと。じゃあ、もう少し私と父さんで相談して、決まったら連絡するね」

「奈良岡、おい」



電話を切ろうとした手が止まった。時也が何か受話器の向こうで言っている。聞き取りづらい

。

「この前、聞かれた」

短いセンテンスで話すのが時也のくせだった。

「青大附中のブレザー来た奴に、聞かれた」

「まるでスパイじゃない、何よ、何」

時也の声が、そばにいるらしいお母さんのことを気にするように低く小さくなった。

「奈良岡と、付き合っている奴いるのかって」

一点凝視。目の前の連絡網をひとりひとり追っていった。

——付き合ってる奴いるのかって？

——青大附中のブレザー来た奴にとって？

「わあ、嘘でしょ。時也、これって説得力ない冗談だよ」

「嘘じゃねえ」

まぜっかえしたかったのに、時也の答えは冗談が混じらない様子。困った。答えるにも、真面目に答えればいいのか、ギャグにすればいいのか、その判断が難しい。そばには父もいる。下手なことを言えない。

水口くんと一緒に、真面目な声を出している時也には彰子も精一杯きちんと相槌を打たなくちゃ、と思う。

「あのねえ、時也。噂にも聞いていると思うけど、私が青大附中でどう言われてるか知ってる？

『ビール瓶』よ、『ビール瓶』。見るからに私は不細工この上ない証明だよ。でさ、青大附中の男子って言ったらなんだけど、面食いが多いんだわ。私なんて相手にしてもらってないもんね。こうやって、今でも私に電話くれたりかけて話してくれるってのは、時也、あんたを始めとしてうちの小学校時代の連中ばかりだよ。みいんな、いい奴ばかりなんだもん。まあ、青大附中の男子がいやな奴とは思ったことないけど、でも、まかり間違っても私と付き合ってるかどうかで気をもむ奴、いないと思うなあ」

「いるんだからしょうがないだろ」

時也の答えは相変わらずぶっきらぼうだった。

「ま、いっか。ごめんごめん。教えてくれてありがとう。時也、その男子ってどんな奴だった？知り合い？」

「知らない奴。きざっぽい顔した奴」

——羽飛くんじゃないか。

ちらっと浮かぶ、羽飛くんの顔。どうもきざとは程遠い。やんちゃな表情だ。

「どういうシュチュエーションなわけ。例えばさ、学校帰りにゲームセンターで呼び止められて」

「耳鼻科」

単語で答える時也に、彰子はどんどんつなげていった。

「耳鼻科って、病院のこと？ 待合室で？」

「そう」

「そこで、青大附中のブレザー来た男子に声をかけられたの」

「そう」

「いきなり、私の相手がいるかどうかを聞かれたの」

「うん」

わかりやすい。時也と会話するのは慣れると簡単だ。

——どうしてうちの父さんは悩むんだろうなあ。絶対、変よ。

「たまたま、隣の席に座っていたとか」

「向こうから寄ってきた」

なるほど、でもわかる。時也の通っている中学の制服は、ふつうの学生服なのだけど、カフスと学ランの裾に白線が太く入っている。バッチを確認しなくてもすぐにわかるという、目立つ制服だった。

「ふうん、じゃあ私の出身小学校がどこかって、ことがわかってる人だよな。うちのクラスの男子かなあ。それで、なんて聞いてきたの」

二秒くらい、間があった。

「時也、電話長いわよ」

声が聞こえる。お母さんだ。

「『奈良岡さんに、付き合っている奴いるんですか』だけ」

いきなり電話が切れた。たぶん、お母さんに怒られたのだろう。

——これは、私の方からあやまっておいたほういいかもしれないな。

もう一度掛けなおした。

お母さんが出た。何度も呼び出すのは申しわけないので、彰子は大急ぎ、お詫びと説明を伝言することにした。

「ごめんなさい、奈良岡です。さっき時也にも話したんですけど、私の、たぶん同じクラスの男子だと思うんですけど、時也に変なこと言って、迷惑かけたみたいなんです。ごめんなさい。だから、時也に伝えてもらえませんか？ みんなでまた面白いことして遊ぼうって。うちの父さん連れて、今度どこかみんなで行こうって。本当に、本当に、いやな思いさせちゃって、ごめんなさいって」

「まあ、そうだったの。ごめんね。彰子ちゃんこそ、うちの時也に気を遣ってくれて。わかったわ。伝えておくからね。お父さんによろしくね」

お母さんは怒ってない様子だ。よかったよかった。父が担任だったというのが、かなりのプラス材料だったのだろう。テーブルに向かって不安そうに見つめている父にピースサインを送り、受話器を置いた。

洗い物は彰子がする時もあれば、父がやってくれる時もある。

なんだか頭を冷やしたかったらしく、今日は父が全部、食器洗い機に詰め込んでくれた。「父

さん、無理しないでよ。まだまだ私がお金稼ぐのは時間かかりそうなんだからね。この細い腕が折れちゃったら大変なんだから」

力弱く笑う父に、それ以上追求できず、彰子は部屋を出た。

時也の様子は電話口でも伝わってくる。やはりいつもより落ち込んでいるのを感じる。もともとクラスではおとなしい子だったし、真面目ではあったけれども、お母さんに押しつぶされそうな感じで心配ではあった。父の担任クラスに入ったと聞いて、他の子たちの方からもいろいろ、男子たちとの軋轢を耳にしていた。あまり父のクラスは、明るい雰囲気ではないらしい。ただ、父は基本として、家でクラスのごたごたについて話をしない。彰子に対しても、母に対しても。誰かが万引きして捕まったということがあっても、黙って出かけていき、静かに戻ってくる。気にはなっていたけれど、口には出さないようにしていた。

臨時家庭訪問するくらいなのだから、そうとう事態は切迫しているに違いない。

ただ、彰子には何が起きているのかつかめない部分の方が多かった。小学校時代一緒だった男子たちからは今でも、しょっちゅう電話がかかってくる。遊ぼうといわれることもあるし、誕生日にプレゼントということで、ガチャガチャのおもちゃがポストの中に入っていたりした。

少なくとも彰子の受ける印象では、連中が時也をいじめるとは思えなかった。

別の問題もある。

気になるのは青大附中の誰かが、時也に話し掛けてきたという事実だった。

制服が目立つというだけで、たまたま彰子と同じ中学だったということで、わざわざ時也に近づいてきて、

「奈良岡さんに付き合っている相手がいるんですか」

と尋ねてきたのはなぜなんだろう。時也の口調からすると、丁寧語を使った相手らしい。

誰だろう。羽飛くんではなさそうだ。

——羽飛くんでないなら、まあ、誰でもいいか。

一気に気持ちが軽くなった。

——昔は私ももてたのよ、なんて言ったから、みんな本気にしちゃったのかもな。なんか、笑っちゃう。

——でも、時也には悪いこと、したな。関係ないのに。よおし、明日、うちのクラスの男子連中にきっちり釘をさしておこうと。でもまた大受けするだろうなあ。また水口くん「わあ、ビール瓶のねーさんの相手なんてだーれなんだろう」とか言われて大笑いされるかも。ま、いっか。私も一緒に笑っちゃうしね。

別にいいのだ。小学校の時みたいにお姫さま扱いされなくたって。

すい君みたいに「ビール瓶」と叫ばれようが、「うるさいなあ」と嫌がられようが。基本はひとつ、いい奴ばかりだと思えれば、それでいい。

脳天気だと思われようが、それこそ奈良岡彰子としてのモットーだった。

——だって、私の周りにはいい人ばかり集まるんだもん。小学校の男子も女子も、青大附中の

男子も女子も。みんな、いい奴ばかりだから。

階段を上がり、母の部屋をのぞく。当然、真っ暗だった。電気をつけて「月刊メディカルイン」の包みを探した。母が毎月購読している医学雑誌だった。すでに封を切っているが、まだ封筒の中に納まっている。無断借用は母とのお約束だ。早速借りていくことにした。ピンクのカーテンに花模様の壁紙。真っ白い椅子と机。たぶんここを見た限り、母が眼科医であることを想像するのは難しいだろう。本棚の医学書、「白内障」「失明」などなどの言葉を見出さなければ。

小さい頃から彰子は母と遊んでもらう時に、絵本代わりとして医学書をめくって喜んでいたものだった。図工の時間中に、「目の拡大図」を書いては大笑いされた。彰子も笑った。充血した目のひび割れを線で描くのが面白かったことを覚えている。

仕事柄、どうしても家にいることが少ない母。

人はみな、

「淋しいでしょう」

「ただでさえ一人っ子なのに彰子ちゃんはけなげね」

と同情する。でも、彰子は極端に淋しいと思ったことはなかった。何かがあれば父がいたし、もっというなら母だってすぐ駆けつけてくれるとわかっている。もし来てくれなかったとしたら、それはどうしてもお医者さんとしての義務があるからであって、彰子のことをないがしろにしてるわけではないとわかっている。たぶん、家族は気持ち悪いくらい仲がいいと思う。

「絵に描いたような幸せ」という言葉がある。

父は中学教師、母は眼科医。

医師令嬢、深層のお嬢様、門限厳禁、勝手な想像なんて、とんでもない。

三人揃えばひたすら、漫才ネタをかましあい、時には学校関係の問題について「学校現場」からの意見を求められたりもしている。小学校時代の男子女子、その他父の教え子たちはしょっちゅう遊びに来てくれるから、そんな誤解なんて一切しないのだけど、それ以外の人たちにはどんなに説明してもわかってもらえない。残念だ。

父曰く、

「彰子さんは我が家のカウンセラーだなあ。なあ、彰子さん、教師っていうのも、いい仕事なんだぞ」

母曰く、

「あんたみたいな子が看護婦さんでいたら、すっごく助かるんだけど。ねえ、彰子、どうしても、医者でないとだめなの？」

小学校の頃までは、全く疑ったこともなかったのに。

どうしてだろう。青大附中に入学してからだった。彰子の周りがだんだん、違う視線の色に染まっていく。父も、母も、小学校の友だちも、みな今までと同じ仲良しなのに。男子たちも相変わらず彰子に電話してきて父をやきもきさせているっていうのに。

とにかく、明日、「だあれ、私の友だちに『奈良岡のねーさんがめちゃくちゃもてていた説』

を確認した奴って。もう、やだなあ！」とかましてあげよう、そう決めた。そして時也に「なあんだ、うちのクラスの男子だったんだけどね、あんまり私が過去の栄光を自慢したから、からかいたかったみたいなんだよ！」と明るく教えてあげよう。そうしたら、時也も笑ってくれるだろう。

彰子が、小学校時代の仲良し男子たちにしてあげられるのは、まずはこれだから。

——ま、いっか。私は楽しいんだから。

いつものように本を無断借用し、彰子は部屋に戻った。「月刊メディカルイン」には毎週、女医さんの有名な人にインタビューするコーナーが設けられている。

夢見のために読んではにこにこしてしまう、お気に入りの連載だった。

保健室に寄ってから教室に戻ると、水口くんが待ち構えていた。

「ねーさん、ねーさん、昨日さ、僕、解剖したんだよ」

「解剖って、何々？ 蛙を捕まえたりなんかしたの？」

いきなり問われた。以前理科の授業中に蛙の解剖が行われていたとは聞いていたけれども。

「ううん、にわとりなんだけどさあ」

よく話を聞いてみると、水口くんの家で七面鳥を手に入れたらしく丸ごと焼くのを手伝わされたとのことだ。よくアメリカのドラマで見かけるクリスマス料理用七面鳥。彰子の家では見たことがない。

「なにかドラマチックなことでもあったの？ すい君」

「うん、僕の誕生日だったから、作ってくれたんだ。注文してもらったんだ」

そばで聞きつけた羽飛くんがにやりと覗き込んだ。

「水口、お前、五月が誕生日なのかよ、まじで」

「そうだよ、ほんとだよ」

「おおい、立村。水口の方がお前よりも四ヶ月、年上だってさ」

真ん中あたりの席でふたり話をしている立村くんが、振り返って答えた。

「悪かったな、どうせ俺は九月生まれさ」

一応五月生まれの彰子にとっては衝撃的事実ではあるけれども、まあ頭の出来からしたら当然かもしれないと思い直した。

「じゃあ、こんどから、『お兄ちゃん』って呼んであげようかな。すい君」

「僕、本当にお兄ちゃんなんだぞ。弟が二人もいるんだよ。双子だよ」

男子の間では当然知られているらしいが彰子は初めて聞いた。たぶん女子連中も初耳の子が多いだろう。朝の自習課題プリントをいじりながら、

「うっそでしょお」

と、つぶやく声がしきりに聞こえた。

こんな和やかな連中の中にまさか悪意持って

「奈良岡さんに付き合っている奴いるのか」

という質問をかます奴はいないだろう。彰子は確信した。

人を簡単に信じやすいというのが彰子のよくないところだという人もいる。けど、疑うよりも信じた方が何倍も楽しいし、楽だと思う。仮に裏切られたって、その人がずうっと裏切ったままとは限らない。いつでもいい人になって戻ってくるのを待てばいい。

——どの辺でかまかしてみようかなあ。

水口くんのお兄ちゃん発言で盛り上がる男子集団を横目に、彰子は近くの女子たちとテレビアニメの感想を語り合っていた。「砂のマレイ2」の続きがどうだとか、新しい美少年キャラクターが登場したらしいとか。美里ちゃんとこずえちゃんが熱く盛り上がっている。原作ファンだ

けに、年季が入っている。

事件が起こると身体が砂として解けてしまい、一体化するという三人の男子中学生が主人公の、SF学園アニメだった。話そのものは単純なのだけど、登場人物がかなり、ふたりの好みにぴたりと合ってしまったらしい。キャラクター名を呼びながらきゃあきゃあ騒いでいる。聞き流しているとふられた。

「ねえ、彰子ちゃんはその中では誰が好き？」

「私はやっぱりマレイくんかなあ」

こずえちゃんもあっさりと頷く。

「だよねだよね、やっぱりマレイが一番何考えてるかわかるからいいよね。ほら美里、あんたくらいだよ。キーンが好きだって言ってるの。あんな何を考えてるかわからない、神経質なだけの奴のどこがいいのよ。顔はいいかもしれないけどさ！」

「いいじゃない。私には私の好みがあるんだから」

彰子にはわからない何か、共通する意味があるらしい。

にやにやしたままこずえちゃんが美里ちゃんを見下ろす。

「ふうん、そうだもんね。美里ってそういう趣味だもんね。男好み」

「やらしい言い方しないでよ！ なにさ、知らないうちに物壊して、大騒ぎして、それで怒られてるマレイよりもずっといいじゃない！ キーンの方がずうっと真面目だし、見えないところで一生懸命努力してるってところが、私好きなんだもん」

「そうっか。美里ってそうなんだよねえ。実際のところも」

男子グループに目を向けてすぐに逸らした。どこかと辿ってみたら、羽飛くん、立村くんのふたりが窓辺でシャープをつき合わせながらしゃべっている。こずえちゃんはどちらとも仲がいい。羽飛くんに対しては恋する乙女そのものの行動だけど、立村くんにはかなりの「下ネタ」をかましては相手を赤面させることに情熱を燃やしている。隣りの席の相手だからなおさら、らしい。

「こずえいったい何が言いたいなのよ！ ぎゃあぎゃあ騒いで馬鹿丸出しで、センスない格好して歩いているタイプは合わないの！」

「私も、いわゆるうちの弟みたいなタイプは、彼氏としておよびじゃないけどね。美里と違って」

「こずえ！」

余裕たっぷりのこずえちゃんに対し、美里ちゃんの方は今にも泣き出しそう。頭を激しく振りながら、口を一字にして、ぱっと言葉をはじき出す。

クラスの評議委員二年目で、言いたいことはすばすば言うし、男子たちにもひけをとらない。それでいてあどけない瞳とおしゃれのセンスが抜群なところ。ひそかに男子たちから人気があるっていうのもわかる。もてるだろう。

ただ、女子たちからは一部、

「なんか清坂さんって自分のやりたいことばかり自分で引っ張っていくって感じで、ちょっとむかつく」

声も聞かれる。

やきもちだろう。羽飛くんとは小さい頃からの仲良しで、いつも「貴史、貴史」と呼び捨てにしている。入学式当時からそうだったことを、彰子は覚えていた。

羽飛、清坂の人気最強コンビが揃えば、そりゃあ、やっかみも出てくるだろう。いわゆる「羽飛命」のこずえちゃんが、そういう美里ちゃんと仲良しだというのが不思議だけど、でも女子同士の仲良しってというのはそういうもんだらう。

「ほらほら、こずえちゃん、この辺でやめておきなさいよ。私もマレイ派だけど、キーンも嫌いじゃないからね。表向きは何もできない振りしてるけれども、いざという時はきっちりと勝負をかけるところって、私も嫌いじゃないしね。美里ちゃん」

あまりテレビアニメの登場人物に感情移入しないタイプの彰子である。

——物語の登場人物だもの、そんなに本気になってどうするの。

「だよな、彰子ちゃん、キーンいいよね」

美里ちゃんが手を握り締めて、何度も頷き返した。やっぱり、熱い。

女子たちの言い合いが落ち着いたところで、もう一度水口くんの席に近寄った。どこぞの誰かに、わざと聞こえるように何気なく話しておくつもりだった。

「すい君、昨日ね、私が話したこと信じてなかったでしょう」

「何？」

自慢話を連ねていたところに腰を折った形となり、ちょっとふくれている様子。

「ほら、私がね、昔すっごくもてもてだったってことを話したでしょ」

「だって、信じられないよ。だって今、もててないのに」

なんて単純。なんて素直。思いっきりなでなでしてあげたくなる。

さすがに教室でそんなことすると、

「奈良岡のねーさんは男子の頭を撫でまわすのが趣味だ」

と誤解される恐れがあるので、やめておく。

「しょうがないよね。そうだよ。すい君は素直に信じているからま、いっかなんだけど。でもね」

この辺り、じっくり聞かせるように話をする。女子の声だけが響いているけれども、男子グループはおとなしい。羽飛くんは無関心、立村くんを相手にしゃべっているのが見えるだけ。

「昨日、私の友達に言われたんだ。『奈良岡さんに彼氏いるんですか』って質問されちゃったって。青大附中の男子に聞かれたって。もう、思いっきり笑っちゃったよ。きっと私のもてもて伝説が嘘だと思っているからなんだろうなあ。前から話していたことだし、まあいいんだけどね」

「うわあ、ほんとほんと」

身を乗り出してくる水口くん。もっと大きい声で続けた。

「そこで、誰かわかんないけど、ここでお答えしときます。私は確かにね、小学校の頃男子と仲良しだったんだけど、でも、『お付き合い』なんてとんでもないんだからねって。ご安心くだ



さい。いつでも彼氏募集中ってところかな」

「あ、でも変だよ。それ。もてもてだったら、選り取りみどりだろ？」

話が混乱してしまったらしい。一部の教室空間内で冷たく耳を澄ませている気配を感じた。反応しているらしい。

自信もって彰子はほっぺたをやわらかくして笑った。。

「あのねえ、男子と仲がいいってことイコール、『お付き合い』じゃないんだからね。すい君、バレンタインデーの時、女子からチョコとかもらわなかったの？」

「いっぱいもらったよ。お菓子ほしいっていったら、女子が机に置いてくれたんだ」

明らかに、いわゆる「バレンタインデー」の意味とは異なる。

思うに、水口くんはクラスの「マスコット」だったのだろう。

紐をつけてぶら下げてやりたい、そんな可愛さを持つ子だったのだろう。

さすがに中学入学後は、紐も切れそうな男子っぽさが強くなってきたけれども、性格はそれほど変わっていないように見える。彰子の経験と、共通するものがある。

「そうそう、私もおんなじよ。私も小学校の時、誕生日、なんかわかんないけど机にたくさん、ガチャポンのケシゴムとか、蛇の置物とか、『ダイエット中の貴女にも大丈夫なチョコレート』とかたくさん置いてあったもん。みんなよく見てるなあって思ったよ。今でも男子が誕生日にくれるものって、やたらと動物の模型おまけとかが多いんだよね。なあんだ、すい君、私と一緒にじゃない。もてもてだったんじゃない！」

ちょっとまずかった。水口くん、すねた。

「違うよ。ねーさんと違って僕の方はずっと、愛されてたんだよ」

愛と「もてもて」の差の違い。

まあ、いっかってことだ。

「わかったわかった。すい君は本当に女子に人気があったけど、私はただ、仲良しだっただけ。もう、これでどこぞの誰かに誤解されないですむかな？ 聞いているかなあ？」 ぐるっと見渡してみる。にやにやしながら数人、男子と女子がふたりを眺めている。中には羽飛くんもいた。立村くんが無表情で席についたまま朝自習のプリントに向かっている。「別に犯人探しする気はないから、これでこの話はおしまい！ 私もがんばって、彼氏募集しちゃうかなあ。すい君、一緒にがんばろうね！ お医者さんになるのも、彼氏彼女作るのも！」

ぽんと背中を叩いて自分の席に戻った。カ一杯たたくと、背骨が折れちゃうかもしれない。彰子からしたら、軽く撫でた程度だ。でも机にうつぶして、

「痛いよう、ねーさんに叩かれたよう」

と情けない声を出すのはやめてほしい。体格の差で、いじめたみたいに見えたらいやだ。

数学の時間中、いきなりの抜き打ちテストが行われた。たまったもんじゃない。みなぶつぶつ言いながら、席をあいうえお順に並び替えて座った。ふだんは二列ずつ、机をくっつけているのだけど試験の時はカンニング防止のために半分、離す。彰子の苗字は「ならおか」だから、窓際の真ん中あたりだった。後ろには古川こずえちゃんがいる。隣りは南雲秋世（なぐもしゅうせい）くん。残念ながら羽飛くんはそのふたつ後ろだった。どういう顔して問題を解いているか見

たかったのに。「は」行以降の女子がうらやましい。

「あのさあのさ、奈良岡さん」

「どうしたの、あきよくん」

「消しゴム、半分分けてほしいんだけどなあ、いいっすか」

襟を半分あけたまま、前髪は軽く膨らませる感じで今はやりの狼カットにしているところ。おしゃれだ。ちょっと髪の毛が赤茶けているのはドライヤーの熱だろう。いや、染めているかもしれない。

「はいな。半分といわず、一個余ってるから全部あげちゃおう」

テスト中に消しゴムがないというのは辛い問題だ。金魚のプリントが入った、においつき消しゴムをプレゼントしてあげた。

「サンキュー、助かったあ」

「女子っぽい消しゴムでごめんね。恥ずかしいかも」

「そんなことございませんって。数学完璧なねーさんのことですからお守りになるかもなあって、思ったりします」

——顔に似合わず、めんこい性格した子だよな、あきよくん。

本名は「しゅうせい」と呼ぶのだが、彰子は入学当時から「あきよくん」と呼んでいた。きっかけは単なる読み間違いだったのだけど、南雲くん当人から、

「いいよ、俺、あきよって呼ばれること多かったし」

とあっさりOKしてくれた。呼びやすい方がよろしい、ということで周りの視線を気にせず、彰子は「あきよくん」と呼びつづけている。一年半近く。

だが、最近になって気がついたのだけど、そう呼んでいるのは彰子ひとりだけだったらしい。

「あのさあ、奈良岡のねーさん」

「なあに、何でも貸し出ししますよ。分けられるもんだったらね」

まだテストが配られる寸前に、手を伸ばしてつんつんと呼ぶ南雲くん。

「今度さ、うちに遊びに来ない？」

「それはそれは、いきなりどうしたの。あきよくん」

軽く流す。同じ学年では南雲くんファンの女子たちがかなり存在していて、現在その一人とお付き合いしているらしいことも知っている。そりゃあもてるだろう。彰子のいう「もてもて」とは異なる。正真正銘の「好き」だ。アイドルグループ「パール・シティ」のボーカルにそっくりだということで、入学当時から人気爆発。そういう話題にうとい彰子ですらも、「こいつは人気あるわ」と思うくらいなのだから、なおさらだろう。

「うちの父さん母さんがさあ、最近うちに帰ってこないんだ。事務所にずうっと泊りきりでさ。うちにはばあちゃんと俺だけ。気兼ねないでお茶飲めるし、ねーさん、どうです、今度」「やだなあ、あきよくん。あんたがお誘いする女子は別でしょ。私みたいなおかちめんこがのこのこ行ったら大変だよ。あんたのファンに恨まれちゃうよ」

軽く流した。南雲くんに対していつでもすることだ。

まかりまちがっても彰子を誘いたいと思っているわけではないだろう。南雲くんの、女子に対

する気遣いが実にこまやかかってことを、彰子はよくわかっている。クラスであきらかに「もてない」系統の彰子にすらこういった誘いをかけるのだ。たぶん美里ちゃんやこずえちゃんタイプの「ちょっと可愛い」感じの子たちにも、いやいや自分の彼女にはもっと丁寧に接しているんだろう

——顔に似合わず、気遣い上手なところが偉いよ。あきよくんは。だからみんなにもてるんだね。まあ、羽飛くんとはうまくいってないみたいだけど、それもしょうがないか。

「俺、そんなにファンなんていないよ」

ぼそっとつぶやく南雲くんの言葉が、妙に真面目に聞こえて、彰子は吹き出した。

「なあに言ってるの。この前だって大変だったんだよ。私とこの前図書館で話してたでしょ。すぐC組の女子が近づいてきて『南雲くんと何話してたの何々』て、すっごく聞かれちゃったんだから。別にさ、『清潔週間』のプリントづくりについての打ち合わせだけだったのに、もうみんな、何考えてるんだろうね。私の顔見ればわかるでしょ、って言うておいたよ」「ねーさん、何て答えたっすか」

「二年D組の王子さまと、愛嬌で生きる私と、どうつりあうって言うのって。大丈夫、ちゃん、自分の彼女を大切にしなさいよ。他の女子たちに申しわけないっていうのはわかるけれどもね」

さすがに、水口くんとは違って簡単に背中を叩けない。

「うん、わかった」

風船の空気が抜けたような声で、南雲くんはつぶやいていた。聞こえたのはここまでで、さらに何か口にしていたのかもしれないが、彰子はあっさりとは無視していた。

さっさと解き終えて、窓の外を眺めていた。連休から一週間、感覚がだいぶ二年の教室になじんできた。視線が真向かいの校舎と窓にぶつかるのも、やたらとすずめが飛んでいるのも、小テストだしたいしたことはなかった。でも他の連中はまだ時間がかかりそうな感じだった。みなが背中を丸めて、グレイのジャケットを羽織ったままうつむいている。向かい側に反射する光がまぶしい。避けるように頬杖をついた。

昨夜父と話した通り、飯盒炊爨でもいいかと思う。ただどうも時也の電話口調がひっかかっていた。

もともとしゃべらない子だ。彰子はそんなに時也がだんまりだとは思わないけれど、男子たちからするとかなり、問題があるらしい。

お母さんがうるさくて大変だというのが共通見解だ。

——時也は過保護だもんね。

女子たちが陰口を叩いていたのも知っている。

——修学旅行の夜にさ、時也のお母さんが電話してきたんだよ。心配だから声を聞かせてって。

——ふつうしないよね。やだなあ。それでさ、帰りも一目散に走ってきて、べたべた触ったり

服直したりして、手をつないで連れて帰っちゃったんだよ。わあ気持ち悪い。

でもまあ、他の男子たちが面倒を見てやってようだし、中学に入ってから担任の父がそれなりに気遣いしていたらしいので、いじめられてはいないようだった。

もともと父の担当しているクラスは一年から三年までの持ち上がりだと決まっている。違う小学校の生徒が三校分、入学してくるということで、顔がわからない子もかなりいると聞く。その中の何人かは家に遊びに来てくれた。遠足写真などで彰子も顔と名前を把握している。でも、小学校時代の友だち以外とはそれほど、付き合いがあるわけではない。

——小学校時代の、友だちかあ。

——そういえば。

——そっか、ナッキーに聞いてみるかな。

夏木宗（なつき・そう）の顔が浮かんだ。

小学校五、六年の時に同じクラスだった。近所でよくサバイバルゲームごっこをした仲である。

。

彰子の誕生日およびホワイトデーには、かならずピンク怪獣のビニールフィギュアをプレゼントしてくれた奴だ。

この前も玄関ポストに、きらきら光る七色怪獣カード入りの封筒が入っていた。切手はなし。ちゃんと「夏木 宗」と記名されていた。即、感謝感激の電話を入れたら、

「名刺代わりにしろよな」

とけらけら、笑っていた。いい奴だ。

——ナッキーだったら、たぶん時也がどういう状態なのかもっとわかるはずだよ。父さんもナッキーのことは気に入ってるみたいだしね。ただ、父さんには知られないように聞きたいんだけど。ま、いっか。ナッキーならその辺は、お見通しだよな。

ひとりで頷き、もう一度彰子は隣の男子列をざざっと見た。

隣の南雲くんは、彰子のあげた消しゴムを握り締めながら、ごりごりとシャープペンシルを握り締めている。たまにシャープのお尻についている消しゴムをひっくり返し、ちゃっちゃと使う。

——せっかく消しゴム渡したんだから、使えばいいのにね。

親指の間にちろちろ見える赤い色は、絶対に彰子の金魚消しゴムだ。

横目でさらに後ろを見る。羽飛くんが鼻をシャープの先でつつきながら、真面目な顔してうつむいている。近くだったら教えてあげられるのにな。心でつぶやいた。

——羽飛くんは面食いなんだもんなあ。鈴蘭優だもんね。およびじゃないか。ま、しょうがないかな。

自分がお世辞にも「見られるタイプの顔」を持っていないことはよくわかっている。小さい頃から、「ブス」「デブ」の二大悪口を言われても仕方ないとは思っていた。自分が一番自覚している。でも、なぜか小学校時代はそのことで揶揄されたことはない。どうしてかわからない。今

だにナッキーや時也を始め、他の男子たちが彰子に電話してきたり、プレゼントしてくれたりする理由がわからない。

——お母さんにも言われてたもんなあ、私は愛嬌で世の中渡っていけるタイプの人間だって。小学校の頃まではそうだって思ったけど、やっぱり青大附中は違うんだよね。せめて美里ちゃんやこずえちゃんのように、すっきりした格好してて可愛かったら、きっと違っていただろう。今だって男子たちとは仲がいいと思うけれども、小学校黄金時代とは違う。

なにせビール瓶のねーさんなんだから。

いわゆる「もてもて」の対象外だということはよくわかっている。

別にそれでもいい、いいのだが。

——羽飛くんは美里ちゃんみたいな子が好きなんだもんなあ。ま、いっか。おしゃべりさせてもらえるだけ、まだましかな。

六時間目の授業が終り、保健室に寄って石鹸のチェックを行った後、彰子は職員室の前にある赤電話の受話器を取った。手帳にはかつての男子友達、一同の連絡先が記入されている。夏木宗の番号を探す。

「もしもし、ナッキー、奈良岡ですよお！」

「わっ！ 花散里の君」

大げさに驚いている。不意を突かれて彰子も絶句だった。

「何その、花散るなんとかって」

「お前のこと、なら先生がそう呼んでるんだぜ。もううちのクラスで彰子のこと知らない奴いないんだぞ。名前は知らなくても『うちの花散里がさ』っていつつ、余談しゃべってるぜ」

——父さん、あんたって人は。

うちで教室の不毛について悩んでいるからいろいろ手伝ってやったのに、自分の娘をネタにしているってわけか。頭が痛い。

「うちの父さんが何しゃべってたっていうのよ」

「お前がさ、青大附中で『ビール瓶のねーさん』って呼ばれてるってこと」

——わああ、とんでもないことになってるよ。もう私の輝けり時代は壊滅ってことだわ。やだなあ。

事実なのだから、彰子としては認めるしかない。

「帰ったら父さんに、ギャラもらうわ。出演料ね」

ぎゃははと笑う受話器の向こう。受けてくれたらしい。彰子は続けた。

「それより、ナッキーにお願いがあるのです。私」

男子にお願いする時は、必ず敬語を使うのが彰子流だ。

「おうおう、なんだよ。なんでも言ってみな！」

どおんと受け止めてやるぜ、といわんばかり。

ナッキーにはしばらく会っていない。父にめちゃくちゃなついていることは知っているけれど。新学期が始まってから全然、遊んでない。

——どうだろう、私より背、伸びたかな。ナッキーの奴。

「今度、そっちのクラスと一緒に飯盒炊爨やろうって案が、某先生から出てるの。あんたの担任ね。面白そうだなとは、思うんだけど、ナッキーは？」

「無理だぜそれは」

あっさり却下された。やはり、と彰子もさらに手繰ってみた。

「のりがよくないクラスだとは聞いているけどね。やっぱり無理かな」

「女子、むかつく」

短い言葉に全てが集約されている。

「女子がなんかしたの？」

「ありゃあひでえよな。なら先生も怒るけど、全然効果なしだもん。ああ、だからさあどうして彰子、こっちの中学に来なかったんだよ。お前だったらあの汚ねえ女たちを黙らせることできただろうになあ」

「あんた想像できる？ もし自分の親が担任になっちゃったら、こっちの方が大変よ。うっかり宿題も忘れられないよ」

あまりにもしょうもない話が続く。ひっぱるのはナッキーだ。家の中だったらこの調子で長電話し、両親に叱られるのが目に見えている。この調子だとナッキーもたぶん暇だろう。ナッキーの家は青大附中のすぐそばだ。彰子の家とは道路一本隔てた距離。

「お願いします、もうひとつ！」

さらに敬語攻撃をかます彰子。

「ほいな、何でも来い」

受けるナッキー、変わってない。

「私を、青大附中の校門まで迎えに来てほしいのだ！」

声がない。くくくと、しばらく息を押し殺したような声が聞こえたかと思うと、一気にはあはあと荒い息遣いが。

「やだ？ 目立つから？」

「いや、違う」

ナッキーらしい答えだった。

「ジージャンにバンダナだったら、青大附中の前で目立つかなあ」

ナッキーには派手にペインティングした自転車に乗って「チャリンコ暴走族」を気取る趣味があった。確かに、青大附中の校門で見られたら目立つだろう。いや、目立ちたいだろう。校門の前で、ナッキーのようにどう見ても中学生に見えない奴が派手に決めても、先生には怒られないだろう。言われたら言い返してやろう。私の友だちなんです。いい奴なんですよって。

「ナッキーらしく決めてきてよね。もちろん、校門前で待ってるね！」

受話器を置いて、すぐに玄関へ走った。

途中菱本先生や、委員会活動に出かける同級生たちと顔を合わせたけれども、手を振っただけにとどめた。

——とにかく、現在うちの父さんと、クラスの女子たちが何でうまくいってないのかをナッキーから聞き出さなくちゃ。

——あとあれよ、時也のことも、やっぱり男子だったらもっとわかるだろうしね。

——頼りはナッキー、君だけだってことよ。

スニーカーに急いで履き替えると、玄関の柱にもたれている男子の影を発見。ブレザーを羽織ったまま、気取った風に髪の毛をかき上げている。

髪の毛が光に輝いている、一目で分かる野郎が一人。

二年D組の男子規律委員様だ。南雲くん。ネクタイを緩めて、襟のボタンを外している。さっさと学校から出て、堂々と校則違反の格好をしたいんだろう。「規律委員」という言葉がもっとも似合わない委員だろう。別の委員会にすればいいのにね、本人にたまに言ってあげたりもする。

「あきよくん、お先に！」

きっと彼女を待っているのだろう。いつもC組の女子と帰るのが習慣だと聞いている。南雲くんはちらっと彰子を見て、首の辺りで小さく手を振ってくれた。笑顔がないのが気になるけれど、彼女に待ちぼうけだったらそりゃあ、そうだろう。今日は規律委員会ないのだろうか。

生徒玄関を一步出たとたん、ちょっとだけ冷たい風としゃらりと擦れる木々のざわめき、最後に油の切らした自転車の悲鳴。ベルまで派手に鳴らしている。砂利道まで突っ込んでこようとするきらめく自転車が視界に入った。

——来たよ来た来た。ナッキーのご登場。

赤いバンダナにかりあげた頭、すい君と同じくらいの背丈だ。どんぐり眼。真っ黒な顔。アフリカ系の濃い顔立ち。どれを取っても青大附中にはいないタイプだった。あえていえば羽飛くんが近い、といえは近いけれども、ナッキーよりもはるかに背が高い。声もかすかに太く聞こえる。

「お待たせしやした、花散里の君」

やっぱりナッキーはまだ、声変わりしていない。顔がふにゃふにゃになりそう。ナッキーの顔を見ると、いつもそうなる。

「二人乗りだけはかんべんだぜ」

「私も、貴重なナッキーの自転車、壊すのやだもんね。じゃあ、自転車置き場まで付き合っって」  
金銀まだらに塗り分けた、ナッキーオリジナル。さすがにこういう系統の自転車で通う奴は、青大附中で見たことない。

もう一度、柱で黙って見ている南雲くんに振り返り、手を振った。

「あきよくん、じゃあね！」

返事がなかったのはたぶん、ナッキーの格好に退いたからだろう。

規律委員様にはやはり、許し難い格好だったのかもしれない。あとで呼び出し食らうかも。ちょこっとだけ気になったけれど、ま、いっかと切り替えた。

——明日、噂かもしれないけど、ひとつくらい、浮いた噂あってもいいよね。もてもて族のあ

きよくんなら、見逃してくれるよね！



母が昨日の夜勤で疲れて寝ている。しいっと人差し指を立てて、ナッキーに合図した。「やきん」と、大きく口を動かした。

「なら先生は？」

「まだいないみたいだよ。応接間を使おうか」

父が戻ってくるのは六時近くだろう。ナッキーだって、「大好き」な先生とはいえ放課後まで顔を合わせたくはないだろう。彰子も制服のままですぐはお菓子を用意した。母の趣味で部屋の中は小花模様の嵐。男子たちには非常に評判が悪い。なぜか男の子好みの超合金ロボットや、時代遅れの怪獣モビールが転がっていた。もちろん自分が使うのではない。ナッキー、時也を始め、しょっちゅう遊びにくる男子たちのために提供するものである。お付き合いで彰子も組み立てやいろいろな遊び方を教えてもらったけれども、さすがに中学二年となった今は使うこともない。母がこしらえた花柄のおもちゃ箱の中に投げ入れられていた。

「いやあしっかしさあ、すげえ怖い目つきした奴だったぜ、あいつ」

「あいつって誰？」

「ほら、玄関で彰子が声かけていた奴」

南雲くんのことだろう。納得だ。

「あの子は大丈夫。立場的に規律委員だからちょっとだけ明日注意されるかもしれないけどね」

「ああ、なんかあいつの顔むかつくぜ」

「顔が良すぎるから？」

からかってみたくなった。覗き込んでみた。ナッキーの浅黒い顔と唇がとんがっていた。「人間は顔じゃないよ、ナッキー。確かにあの子は『パール・シティー』のボーカルに似てると思うけど、やっぱり人間を顔で決めちゃあいけないよ」

「なんだよ彰子、やたらかばうよな」

笑ってくれない。落ち着かない。機嫌を取り結んでみる。彰子としては思いっきり笑いこけたいのにな。

「だってさ、私がそんなこといえるご面相だと思う？」

答えないのは納得しているってこと。ケーキを手づかみで口にほおりこんでいる。口の周りは白いクリームでひげ状態だ。口が利けないのをいいことに、彰子は話を続けた。

「それよりも、本日ナッキーに相談したいことってのはね」

自分のお菓子は、母の厳命でしようせんべいのみ。ナッキーがうらやましい。手でぱちんと二つに割った。

「時也、もしかしてクラスでいじめられてるかなにかしてない？」

咽を詰まらせそうになり、咳き込むナッキー。素直だ、時也もそうだけど、ナッキーも考えていることが素直にわかる。こういうところが彰子は大好きだ。なんも考えないで、いいことばかり話ができるから。

「うちの父さんも全然、そういうこと話さないよ。でもね、なんか時也に電話してみたら、な

んか、ね」

言葉を濁して反応を待つ。グラスをかじるようにくわえる。ナッキーが上目遣いに見つめてくる。

「さらに、いきなりの飯盒炊爨計画でしょう。うちの父さん、そういうの得意じゃないからね。気になってはいたの」

「そりゃあ、切れるよな」

バンダナが少し額に下がってきている。ぐいっと上げて、口を手首でぬぐった。

「時也ももう少しちり紙を机の中に詰め込むのはやめろよなって言いたい」

「ちり紙？」

「ほら、あいつ、鼻たれてるだろ。いつもさ。鼻水すすってはちり紙でかんで、使い終わったのを全部、ポケットや机に詰め込むんだ。捨てれ、って俺も言ったりするんだけどなあ」

言いたいことはだいたいわかる。彰子も番茶の冷えたものを飲みながら答える。

「風邪引いてることが多いのかなあ」

「あいつ年がら年じゅう鼻たらししてるだろ。彰子も知ってるだろ」

ひまあるとティッシュの使い捨てで机の中に山をこしらえていた、時也のことを思い出す。そうだ、面倒をみてやっていたのが、同じ「な」行の苗字を持っていたナッキーだった。

「うーん、でも、時也の場合はしかたないよ。鼻が悪いんだって、時也のお母さんが話してたらしいもん」

耳鼻科にまだ通っているというのが証明だ。いつも鼻詰まりしないように、プッシュ型の小さな薬を鼻の穴に突っ込むように言われていたのも見たことがある。

「俺とか、まあ小学校で一緒だった奴だったらまだその辺もわかるぜ。ただな、問題は他の学校の連中がそんなこと知らねえ状態だってことだ。汚い以外、なあんも思わない奴らってことだ」

だんだん彰子にも流れが見えてきた。ナッキーの方にレースのケースに入ったティッシュを押し出した。口の周りが真っ白だ。

「汚くないとは言わないけど、でも、時也だって自分でしたくてしてるわけじゃないのになあ。また『鼻垂れ小僧』とか言ってからかわれるの？」

ぶんぶんと首を振るナッキー。口を拭かないで大急ぎで飲み込むだけ。

「いや、それはねえ。俺とか小学校からの持ち上がり連中が黙っちゃいねえってこと、わかってるだろ。野郎連中については問題ねえ。ただな、女子だけ問題は」

「女子？」

「だから彰子、どうしてお前こっちに来なかったんだよ」

いつも話はそこに行き着く。答えるのに困る質問はあっさり食べ物でごまかすことにする。

「もう一個、ケーキをあげようか？ それともなんか飴とかにする？」

母からの厳命

「あんたは決して不細工じゃないけれど、でももう少し体重を減らさないと成人病の恐れがあるんだからね」

で、クリームたっぷり入ったお菓子類は厳禁なのだ。未練たっぷりだけどしかたない。ナッキ

一の血と肉になっていただこう。チョコレートケーキを冷蔵庫から取り出した。

時也が相当、クラスで追い詰められていたことはだいたいナッキーの話でよくわかった。

確かに小学校の頃から、青い鼻をたらして「きたねー」とさんざん揶揄されていた。小学校中学年くらいまで、上手に鼻がかめなかったというのも問題だったのだろう。時也が「過保護野郎」と馬鹿にされていたのも、その辺に理由がある。ただ、男気たっぷりのナッキーを始め、一部の男子連中が時也のことを仲間に入れてやるようになってから、だいぶ状況は変わったように思う。「なつき」と「なぐら」。ふたりとも同じ「な」行で始まる苗字だ。五年のクラス替えでたまたま近くの席になって、今までの態度があまりにもあんまりだと憤ったナッキーが、時也のことを面倒みるようになった。体格的には圧倒的にナッキーの方がちっちゃいけれども、誰も格下だなんて思いやしない。

五年、六年の時はそれでうまく乗り切っていた。中学に入ってから父のクラスに、ナッキーと時也と一緒にあったと聞いた時は、時也のためにもほっとしたものだった。今でも、ある程度プラスには働いているのだろう。しかし、誰もが小学時代と同じく、ナッキーに頭を下げるとは限らない。「時也をいじめな」とか言っても、「はい」と頷く連中ばかりではないだろう。父が懸命にかばったとしても、素直に納得する連中でないことは彰子も想像がつく。

「と、いうわけで、はっきり言っちゃおうと、俺はクラス飯盒炊爨なんかやったって意味ねえよってこと」

「女子もそうとうなの？」

「問題は女子だけ。ったく、時也がたまたま通ってぶつかったくらいで、『いやーん、きたない』なんて良く言えるよなあ。お前ら、鼻かんだことねえのかって俺は言いたいぜ」

ここだ。

彰子はじっくり聞こうと決めた。

「女子が、なの？」

「時也も黙って引っ込みじまうから悪いんだ。もっと堂々と、ああそうだ、なにが汚ねえんだっていえばもっとあの女どもも退くだろうになあ」

「言えないよね、時也には。結局代わりにナッキーが？」

頭を掻いて、さっそく次のケーキに取り掛かる。白と茶色のクリームが口の周りにひっついて、微妙なマーブル模様を描いている。笑える。早くティッシュを使えばいいのに。彰子は言いたいけど黙っていた。

「けどさ、俺の言い方がいじめてるように見えるとか、女子を馬鹿にしてるように思われるとか、さんざんで、結局つるしにあうのは俺の方。なんだよ時也だって好きで鼻たらしてるわけじゃねえよな。気にしてるから、いつもティッシュを丸めてポケットに隠してるんだよな」

「わかった。ナッキー。とりあえず、父さんに飯盒炊爨ツアーはやめとくよう言っとくわ。だって、飯盒炊爨となったらカレーとか焼肉とか現地でやるわけでしょ。時也が料理の手伝いするとなると、またみんなばい菌扱いするに決まってるよ。ナッキーだっていつもいつも、時也の

めんどろを見るわけいかないもんね」

五年生当時のナッキーは、人気も絶大ならば面倒見もいい、身体は小さいけれどけんかも強い。お調子ものに見えるけれど、人を差別する奴には容赦しない。時也を「漬垂れ小僧」だからという理由でいじめる奴には、男女問わず鉄拳制裁を加える。それが裏返って、「ナッキーは暴力的な奴」と思われているきらいもないわけではない。幸い、なら先生こと彰子の父は、ナッキーの小さい頃から現在にいたるまですみずみまで知っているから大丈夫なのだが。父や彰子にとってナッキーが「非常にいい奴」なのに対して、女子たちの間では「夏木くんって怖い。寄りたくない」という差が明らかに存在している。

——そうだよ。ナッキーとしゃべることができる女子が少ないっていうのも問題なんだよね。

——こういう時、私も公立行けばよかったって思うな。

——でもでも、父さんが担任で、朝から晩まで気が抜けないっていうのも、辛いよナッキー。

ただ、時也にも問題がないとは言えないだろう。

彰子は医師である母から「病気で身体が汚れたり、出てきたりしたものは、汚いと決して口にしてはいけないよ。みんな、身体をよくしよう、なんとかしようとして、押さえたいのに出てきてしまうんだからね」と言われていた。よくなるためには、出したくないものも出さなくてはならない。出したくないのに出してしまう患者さんが、一番辛いのだ。目やににしてもそうだ。血にしても。自分の感覚に必ずしもぴったり合うとは限らないけれど、気持ちだけは重ねていこう。医者を目指すと決めてから、自分に言い聞かせてきたことだった。

同じ思いをきっと、時也だってしているのだろう。

でも、もし彰子が母に言われてなかったら、女子たちと同じことを感じていなかったとは、限らない。汚い物は汚い、近くに寄るな、と口にしてしまったかもしれない。反省してしまうけれどもしょうがない。

どちらの立場も想像がつくから、いい方法が見つからない。

——まずは、時也に、鼻をかみ終わったティッシュを処分することを覚えてもらう方が先決かなあ。でもそれは、ナッキーがいつも怒鳴り散らしているんだよね。ああ、もし私が耳鼻科のお医者さんだったら、時也に効果的な薬をあげるんだけどなあ。

「ね、そう思うよね」

思いつくまま彰子が話すのを、ナッキーはもぐもぐ口を動かしながら聞いていた。

「でもな、どうして時也、鼻が治らないんだろうなあ」

「そうだよ。うちの母さんが耳鼻科だったらいいんだけど、目だったらちょっとね」

正面で口を動かしつつづけているナッキーの視線が、後ろでぱたっと止まった。こくっと、ひとつ頭を動かした。目がまるく、凍っている。

「あ、おじゃましてます」

「ナッキー、お久しぶりね。お菓子、ゼーんぶ食べてっていいからね！」

母だった。目を覚ましたらしい。真っ赤なふりふりのワンピースに花のコサージュをつけて、す

っぴんのままで戸口に立っていた。

「彰子、またメディカルな話題につきあわせてるの？ ごめんねナッキー。うちのお姫様は色っぽい話にとんとうといのよね」

言葉を発したくとも口がもごもごして何もいえないかわいそうなナッキー。答えに困るだろう。目の前に「お姫様」がいるんだから。一番「お姫様」というイメージに合わない人がいるんだから。

「お母さん、ナッキーが呼吸困難になること言うのやめようよ。私に色っぽい話なんてあるわけないって、お母さんがよおく、わかってるじゃない」

自分で笑いがこらえきれず、彰子は椅子の手すりをたたきながら答えた。ナッキーよりも息が苦しくなりそう。ようやく飲み込んだらしく、ジュースをがぶ飲みし、ナッキーはあらためて頭を下げた。

「ごちそうさまでした」

「いいのよいいのよ。少しお姫様もスレンダーになってもらわないと困るからね。明日香ちゃんに持って行ってもいいのよ」

ナッキーの妹だ。返事を待たずに母は台所に向かってしまった。たぶん包むんだろう。彰子も食べたいなあと思っていたケーキとかクッキーとかチョコレートとかを持っていかせるんだろう。医者の世界とは、上下関係が厳しいとかで、母の後輩からはしょっちゅうお菓子とかがお礼代わりに届くという。届くたびにため息ついているのだけでも、分けてくれないのが淋しいもの。まあ、ナッキーの方がこれからもっと、肥えないとだめだというのは彰子も納得しているから、あきらめる。

「どうしたんだよ彰子、お前も食べばいいのに」

「だから今言われた通り。もっと痩せろってばかりよ。人のこといえるのか、って言いたいよね。あのどふりふりの服を着るのだって、ウエストがゴムだから楽だって、それだけなんだから」

「彰子は着ないのか？」

「だって似合わないもんね。それに私、あまり洋服とかそういうのに関心ないもん。将来は白衣を着るだけなんだから、それでいいかなって」

しばらくナッキーはチョコレートケーキをつつきまわしていたが、軽く腰を上げて伸び上がり、すぐに座りなおした。フォークを彰子向きに置いて、

「あと、全部食え」

押し出した。

「おなか一杯なの？」

「うん、とにかく、お前、食えよ」

背中越しに母の気配がないことを確認し、彰子は両手を合わせた。

「ナッキーありがと！ すごくうれしい！」

ナッキーの分をいただいたなんて母にばれたら怒られるのは必至。口をしっかりとぬぐって、皿

を重ね、台所に持っていった。母はいなかった。ちゃんと包みこんだ花柄のケーキ箱が置いてあった。部屋の中で寝ているか勉強しているか、のどちらかだろう。

「ところでナッキー、前から私が思ったことなんだけどね」

花柄の箱に顔をしかめている。ナッキーの方をじっと見て彰子は尋ねた。

「時也、ずうっと前から鼻の調子が悪いって聞いてたけど、病院ってどこに行ってたんだっけ」

「山乃耳鼻科って聞いてた」

「そうか、山乃さんかあ」

青潟の場合、いい病院悪い病院の情報は結構リアルに伝わってくる。彰子の場合、母が直接聞いてくるというのもあるけれども、医療ミスの問題などは、学校での噂話で流れてきている。大きい声ではいえないけれど、水口くんのお父さんが経営している病院でもいろいろあったと聞いている。ただ、それが正しいかどうかはわからないし、真相にたどり着くにはもっといろいろな事情を聞かなくてはならないだろう。病院だって、患者さんを殺したくて死なせたわけではないのだから。と、彰子はいつも思っている。

「耳鼻科って関係あんのか」

「うーん、難しいとこなんだけどね」

言うべきか言わないべきか。自分のポリシー「悪い人はいない」を貫くために迷った。「あそこの病院、うちのお母さんだったら勧めないって言ってるんだよね。ほら、目と耳と鼻の検診であるよね。それでこの前、ある人がひっかかって、病院に行けって言われたんだ。うちの学校でなんだけど。たまたまうちのお母さんに聞いてみたら、私の友達だしってことで、ある病院に紹介状を書いてくれたんだ。すごくいい病院だからって。そこ、山乃さんではなかったような気、するんだけどなあ」

「早い話、そこ、やぶってことか」

核心を突くナッキー。

答えられない。人を貶すような言い方にはしたくない。彰子は決して山乃耳鼻科なる病院を詳しく知っているわけではないし、単に母の好き嫌いというだけかもしれない。ただ、あまりいい噂を聞いていないのも確かだった。

「時也がずうっと、山乃耳鼻科に通っているってことで、全然よくなるのだったら、私だったらどうするかなって思ったのよ。一度病院を替えてみて、違うところに行った方がいいんじゃないかなって」

「けどさあ、彰子。こういうこと、俺たちから言えるのか？ 時也の母さん、すっげえ怖いじゃねえかよ。よけいなこと言うなって怒られるだけだぜ」

そりゃそうである。でも彰子には勝算があった。続けた。

「だからこういうのは、うちのお母さんに言ってもらうのよ。お父さんだったらまずいけれども、お母さんだったら、まあ友だちって感じで話できるでしょ。あの性格だし。あとは時也が自分で、鼻を直したいと思うかどうかだけどね。時也が自分を何とかしたいと思っているってわかったら、あのお母さんだって駄目だとは言わないと思うよ」

「うわあ、彰子、やること思いっきりプライバシーの侵害って奴だよなあ」

「うん、そう。私も思う。でもね」

たぶんナッキーだったらわかってくれる。だから、続けた。

「今のナッキーの話聞いていて、クラスの女子たちがいくらうちの父さんやナッキーに怒られても、簡単には言うこと聞けないような気、するんだ。時也がおとなしいけど真面目で一生懸命な性格だって、男子たちはわかっているだろうし、だからみんなでかばってあげてるんだと思うんだけど。でも、女子からすると別のところで、ちょっといや、って感じるんじゃないかな」

「なんだよ、ちょっといやって。あいつら人のこと貶せるほど、ご立派な奴なのか」

怒気がこもる。まあまあ、押さえてと手をかざす彰子。

「ナッキーは別だと思うし、だから私もこういうこと言えるんだよ。ね。でも、やっぱり中学に入って思ったのは、人間外見でみな判断されるんだなってことなんだ。私が小学校の時に、あれだけみんなとうまくいってちやほやされてたってのは、私の顔とかがね、どうでもよかったからなんだと思う。前にも話したと思うけど、青大附中ではもう私、ビール瓶のねーさんだもん。みんな私のことがきらいじゃないから、そう言ってからかうってのはわかるけど、でも最初はショックだったなあ」

黙っている。もうほとんどついていないフォークをなめている。笑えない雰囲気を作りたくなくて、彰子はほっぺたをさらにやわらかくしてみた。

「だから、私のできることとしては、クラスのみんなど仲良くして、いつも笑顔でいようってことくらいだったんだ。うちのお母さんにいつもいわれていた「あんたは愛嬌で生きていける」って意味がよくわかったよ。可愛い子とか美人さんとか、たくさんいるクラスだからなおさら、私がそっちで対抗しても勝ち目ないもん。特別に誰かと仲良くなりたいてってわけじゃないけれど、みんな楽しくおしゃべりできればそれで十分だったからね。ナッキー、知らなかったでしょう。私だって青大附中で結構苦労してるんだよ」

どこまで父が「花散里の君」についての情報をクラスで流しているのかわからない。ナッキーが電話で口をすべらせたのを聞いて初めて知った程度だ。たぶん彰子が父と母に、ずっと青大附中のクラスが外見重視で結構大変という話をしたことはばれていないと思う。「だからよ。時也の性格がいいとは頭でわかっているけど、女子としては、鼻をいつもすすって、ポケットにティッシュを溜め込んで、ってというのが不潔に思えてならないんじゃないかなあ。おとなしくて言い返さない子だからなおさら、悪口が飛び交ってしまうんじゃないかなあ」

「けっ、最低な女たちだよな」

「だからまずは、時也が変わらないとどうしようもないって気がする。別に性格を変えろとかそういうことは言わないけど、できればポケットにつっこんだティッシュは定期的に捨てるとか、鼻水をたらしたままにしないとか。でもできないよね。直さないよ。うちのお母さんも話してるけど、病院によってよくなるならないが極端に違うって話してるからね」

しばらくぼんやりとフォークをくわえ、舌をぺろんと出してナッキーは顔を上げた。

「病院の話は全然わからねえけどさ、彰子。時也がもっと女たちに文句言えればいいってことだな」

「鼻垂れ小僧だなんていわせないように、まずは鼻を直そうよっていうのが私の提案なんだ。でもこればかりは、大人の話だし、私が割り込むのもなんだしね。で、相談なんだけど」

ナッキーは身を乗り出した。

「おおさ、言えよ」

「これから時也の家に行こうよ。時也を呼び出して、ちゃんとこの計画を話して、自分からうちの母さんが紹介した病院に行くように説得するの。どんなにいい病院紹介したって、時也がうんと言わなかったらしょうがないもんね。私はこれからお母さんに、時也の家に電話をかけてもらって大人の話してもらおうね」

なんだか腑に落ちない顔をしつつも、ナッキーは立ち上がった。

「ごちそうさま。うまかったあ！　じゃ、彰子行くぜ」

たぶん父から、時也を代表とするクラスの荒れた状況を耳にしてはいたのだろう。

「わかった。どうせ時也くんのお母さんともお買物に行きたかったしね。何気に聞いてみるから。でも、病院がどうのこうのっていうのは人のうちのことなんだから、あまりよけいなこと言わないようにね」

超どふりふり服を買うのが好きな母は、なぜか時也のお母さんと好みがぴったりで、たまにショッピングに出かける。バーゲンの時は、忙しくて出かけられない母の代わりに取りおきなどもしてもらっているという。似合わないんだからいいかげん別の服にしろよと、彰子は思うけれどもしょうがない。人は好みなんだし、お気に入りの服を着ていたらご機嫌もいいんだから。

釘をさされたけれども関係ない。ナッキーの金銀迷彩自転車を追いかけるように、彰子は時也の家に向かった。遠くない。二本通りを隔てた、二階建ての白い家だ。学生さんたちがたむろうアパートの前だ。

「時也の部屋はどこだっけ？」

「一階の、ほら、左側の窓だぜ」

直接玄関に向かってもいいのだけれど、過保護で知られるお母さんに顔を合わせるのには抵抗がある。時也だけを呼びたかった。

ふたりで声を合わせて叫んだ。

「トッキー！　出ておいで！」

トッキーこと時也がのそのそと玄関から顔を出したのは早かった。

「ナッキーと、奈良岡……」

「昨日はいきなり電話してごめんね。ナッキーもいるから、ほら遊ぼうよ」

見た目は柔道選手のように、四角い身体つきと頭。目はしっかりしている。鼻の下が赤く擦れているのは、ティッシュでこすりすぎたせいだろう。彰子は手招きして、向こう側の公園を指差した。シーソーが上下しているのが見える。アカシアの木々が擦れているのが聞こえる。

「ほら、彰子がお前のことすっごい心配してるんだぜ。来いよ。いいかげんポケットの紙くず、捨てろよったら」



ナッキーを手で制した。一番分かっているのは、きっと時也だ。

「飯盒炊爨はやめようかなって思うんだ。それよりね」

まずは座る場所を探し、彰子はナッキー、時也をベンチに呼んだ。自分は向かいの子供用ぞうの置物に腰掛けた。

「と、いうわけなんだ。時也」

黙ったまま、時也は鼻をすすっていた。青っぱなという言葉があるけれどもまさにその通りだ。黄色い鼻水が遠めからも分かった。袖口もてかっている。たぶん潔癖な女子だったら絶対に嫌がるだろう。女子たちが「菌がつく」とおぞけたつのも、否定はできない。いくら父やナッキーがかばったとしても、無理だろう。生理的嫌悪感というのはどうしようもないものだから。

——でも、いい子なんだよ。時也は。

——一生懸命、最後まで残って後片付けするのはいつも時也とナッキーなんだよ。

——いいところを見てあげてほしいんだけどなあ。

ナッキーはやっぱり男子だ。どうしても甘い言葉が出てこない。

「だからお前ばかなんだよ！ 彰子の言い方は女子だからまだ甘いけどな、お前、自分が変わらないとどうしようもないってことだぜ。わかってんのかよ、時也」

きつい。言い返せないのはナッキーだからかもしれないし、本当のことだとわかっているからかもしれない。でも、と彰子は思う。

——どんなに健康に悪いことだってわかってたって、私もケーキやめられないもんなあ。時也だって、自分の鼻水が不潔あつかいされているって、ちっちゃいころから分かっている、でもどうしようもないんだもんなあ。

「ナッキー、やめなよ。それよりもさっきの案なんだけどね」

ゆっくりと繰り返した。

「うちの母さんが、時也のお母さんに、いい病院を紹介するって話してくれると思うんだ。たぶん、今通っているところよりもいいとこね。あんたの鼻がよくなれば、女子たちだって不潔だなんて言わなくなるよ。もし鼻水が止まらなかったとしても、みんなにはっきり『これは病気なんだから、治している最中だ、文句あるか！』と言い返せるじゃない。時也、女子の中にだって、あんたのよさをわかってくれる人が絶対いると思うもん。これほんとだよ」

しばらく黙っていた時也だが、やがてぼそっとつぶやいた。

「痛いこと、されるのか」

ナッキーと顔を見合わせた。

「検査……の、ことなの？」

「おいお前、もしかして、それが怖いのかよ！ 自分のことだろ！」

止める間もなく、ナッキーの鉄拳制裁が入った。こう言う時のナッキーは容赦ない。うつむいて両手で後頭部を撫でているのは時也だ。スポーツ刈りのままだから、じゃりじゃりと音がする。

「こればかりはね、私もわかんないけども、でも、今よりはずっとよくなると思うよ。まあ、

うちのお母さんがどういう話をするかわかんないけれど、とにかく私と言えるのは、時也。あんたはもっと他の人たちに受け入れられていい奴だってことだよ」

下から見上げるようにして、時也が彰子の顔を覗き込む。

「ほら、青大附中って優等生の集団だとみんな思ってるでしょう。私を除いたみんなエリートだってね。入学するまではどんな奴だろうって思ってたよ。でもね、入ってみて驚いたんだ。みんな成績ってできる子もいればひどい子もいる。変わらないんだって思ったんだ」

ひとり思いつく相手がいた。時也と重なる一人のクラスメート。

「うちのクラスで評議委員やっている男の子がいるんだけど。ほら、学級委員と同じもの。その子はね、英語とか国語とかそういう文系科目が天才的にすごいせに、数学がからっきしだめなんだ。いまだに九九の書いてある下敷きを持ち込んでくるくらいだし、複雑な掛け算の問題の時にはすごいことやってるんだよ。真四角に細かく切った消しゴムを筆箱に詰め込んできて、摘み上げては数を重ねて、またひとつひとつ計算してるんだよ。テストの最中にだよ！」

「……そいつ、ばかか」

かすかに聞こえる時也の声。時也も算数関係は得意だったのだ。

「もっとすごいのはね、やっぱりテスト中、空間図形の問題があつてね。たまたまその子の方を見たら、いきなり定規で消しゴムを切り刻んでいるのよどうやら問題に、空間図形の面積を求めるものがあるって、それを解こうとしてみたいなのよ。ずっと、消しゴムでその図形どおりに形を作って、組み合わせたりなんなりしていたみたい」

前で腹を抱えて笑い転げるのがナッキーだ。

「ね、おかしいよね。ナッキー。もちろんその子は一生懸命やっていたんだと思うし、笑っちゃいけないって思うよ。でも不思議だよ。どうして青大附中に受かったんだろうってほんとに思っちゃった。成績だけだったらきっと、時也だって受験してたら受かったと思うし、公立だから頭が悪いなんてこと、絶対はないよ」

なんだかクラスの数学できないある生徒のことを悪口言っちゃったような気がして、落ち着かない。聞かれていないとわかっていてもそうだ。言い訳を付け加えることにした。ごめんねと手を合わせて。

「でも、今話した数学の出来ない子、評議委員やっているって話したでしょ。数学以外のことについてはものすごいんだ。私なんか全然わからないような、生の外人さんの言葉あるでしょ。べらべらってしゃべってる。ほら、ヒアリングっていうあれ」

「はいはいはい、へろーんとか、じすいずあぺんとか、そういうもんだろ」

「そうそうナッキー、分かってるじゃない」

たぶん時也もじっと見返しているところみると、分かるだろう。安心して彰子は微笑んだ。「全然聞き取れないような言葉を黙って聞いて、すぐにノートに書き取って、あっという間に日本語の訳つけてるのよ。びっくりしちゃった。人それぞれ個性があるんだなあって感心したよ。だから時也、あんたをばかにする女子もたくさんいるかもしれないし、あんたが変わらなくちゃいけないところもあるかもね。でも、ずっとずっと時也のやさしいところか、知ってる私たちだっ

てたくさんいるんだよ。それをもっと見せつけてやろうよ。悪口言う女子たちにさ。見返してやろうよ！」

そのために、と彰子は付け加えた。

「ちょっとくらい痛い検査だっていいじゃない。そうだ。もしあれだったら私と一緒にデートに、誘ってよ。病院に行く前にね」

「デート？」

反応したのは時也ではなく、ナッキーだった。ぼけっと背を伸ばしている時也にくらべて前かがみだ。ギョ口目でちょっと怖い。あまりナッキーを相手にそういうことを言ったことなかったから驚いたのだろう。

「私も、時也とは最近話、してなかったしね。もちろんお父さんには話さないよ。私だって花散里の君だなんてさんざんクラスでねたにされるのやだもん」

膝を叩いて笑い転げるのはやめて欲しい。しばらくナッキーがえびぞりせんばかりに笑いこけているのを、彰子はため息交じりで眺めていた。時也もだんだん顔がにやけてきている様子。思い当たる節、あるのだろう。ゆっくり、ぼそっと。

「じゃあ、あのことは内緒か」

「あのことって？」

「奈良岡の付き合い相手のこと」

笑いこけるのは今度、彰子の方だった。ちゃんと処理済ってことを、本当は最初に時也へ話すつもりだったのだから。右、左と揺れながら、

「ああ、あれね、きっとみんな大いなる誤解してるんだよ。ちゃんとクラスのみんなには、そんな相手いないよって言うておいたから、ごめんね時也」

立ち上がり、ぽんぽんと時也の肩を叩いた。唇の端でちょこっと、揺れた笑みがやっぱりめんこい。ちょっとくらい鼻水たらしてたって、言葉がぶっきらぼうだったって、ちゃんとこうやって彰子としゃべってくれる大切な友達だ。時也も、ナッキーも、みんな大好きだ。彰子はあらためて、手のひらに伝わる暖かさを確認した。ついでにナッキーの片腕をひょいと持ち上げた。まだえびぞりしたままにいる。

「時也、いいか、今度そういう質問を受けたならばだ。覚えておけよ」

「なんだナッキー」

一本調子の武士っぽい言葉遣いが時也のお得意だ。

「とりあえず、彰子の相手は俺だって、言っとけ」

彰子は両腕を持ち上げた。軽い。男子と思えない軽さ。

「もうやだなあ。ま、いっか。ナッキーがかまわないなら、名前貸してもらっちゃおうかな。でもちゃんと彼女が出来たら、報告すること。誤解を招かないようにね！」

しばらく三人で、他の連中の噂や漫画の話で盛り上がった後、それぞれ三人分かれて帰った。母が持たせてくれたナッキー用のお土産は、結局三人で半分平らげてしまったことを告白する。心で「明日香ちゃんごめん」と、手を合わせた彰子だった。

家に戻ると、母がにこやかに、Vサインで彰子を迎えた。話し合いあっさり決着がついたらしい。

なんのことはない、要は時也のお母さんと一緒に洋服のセールに行く約束したかったんだろう。大人は大人が話をすると一番うまく行く。すでに母はテーブルに便箋を用意してすらすらと手紙を書いている。手馴れたものだ。小学校の頃からそうだった。なにげなく世話好きな母は、ちょっと様子がおかしい子や親御さんがいると、

「よかったら私の友達の病院紹介しますよ」

と気軽に声を掛けていた。ずっと見てきたから、彰子もそれが当然のことだと思っていた。みんな楽しく、健康でいられたらいい。どんな人もみんないい人で幸せなんだと思いたい。「時也くんも前から病院替えたらいいのに、って思っていたんだけど、なかなかね。我が家のお姫様のおかげで、またひとつ、うちの家族もいいことできたかな。でもね、彰子」

念を押された。わかっている。

「あんたが話を持ち出したなんて、絶対に言っちゃだめよ。あんたはまだ愛嬌で世の中渡っていける子だから大丈夫だけど、世の中、人の善意を悪意だと思う人がたくさんいるからね」母の口癖だった。彰子は愛嬌が武器だと、いつも言われてきた。

次の日、彰子は二年D組の教室で南雲くんの手を振った。

「あきよくん、おはよ。私の友達みて思いっきり退いてたでしょ」

じろっと、笑みのない顔で見返した後、南雲くんはうつむき、つぶやいた。

「俺、別れたんだ、昨日」

「え？」

聞き返す間もなく逃げるように、南雲くんは自分の席についた。教室はまだ揃っていない。ちょっとした声もすっきりと聞こえる。

近くの席にいた立村くんは、はっきりと、

「好きな子ができたんで、別れたんだ」

と、報告しているのははっきりと耳に届いた。

——ああ、そっか。あきよくん、彼女と。

——そりゃ、私になんか笑顔で手なんて振る余裕なんてないよ。

——辛いこと、聞いちゃったな。ごめんね。

みんなが楽しく、幸せでいられるなんてこと、なかなかない。

教科書に五月の陽射しが黄色く落ちている。黒い文字で二次方程式の応用問題が綴られている。光のあたり加減により、黒のインクが鮮やかに見えたりもする。新しい教科書になって二ヶ月、彰子のはまだきれいなままだった。

緑色の黒板前で、時間が止まっている。

いつものことだった。立村くんがチョークを握り締めたまま、ぼんやりと黒板に端正な文字を眺めている。問題そのものはきちんと整った字で書き記しているのだが、それ以降が進まない。めったに立村くんが黒板に出て問題を解くなんてことはない。特に数学担任が狩野先生に代わってからは、一度もなかったはずだ。

——確かに、立村くんだけひいきしているって思われてるかもしれないなあ。

——でも、こういうところを見ると、やはりかわいそうだと思う。

彰子は問題の中身をざざっと見直した。

当たりが悪い。よりによって応用問題だ。せめて教科書の例題に、数字をちょこちょこ入れ替えた程度だったら、立村くんだって曲がりなりに形を作ることができただろう。運が悪い。周りの女子たちがひそひそとつぶやいている。

「やっぱりね、立村くん以下じゃないってことは証明されたかな」

「そこまで落ちたら悲惨だよ。よく青大附中に入れたよね」

くくくと声を殺して笑う人々。男子たちはというと、これぞ「いつものこと」と割り切った視線。

「そりゃああいつは数学ペケだからしょうがないよな。ま、立村の場合は人呼んで『全自動翻訳機』だからなあ」

——なんかな、なんで立村くんは男子に受けがいいのかなあ。妙なくらいに。

翳っている横顔を彰子は遠目から見た。席が離れているので細かくは見えないけれど、何かを考えて、何かしようとしているのだけはわかったような気がする。何度かチョークを黒板に当てるようなしぐさをする。すべらせようとする。が、どうすればいいかわからないようにまた外す。文字だけだったら完璧に問題を解いた後に見えるのだけれども、先に進めないらしい。前髪だけが軽く浮き上がり、そのまま襟足にきちんと伸びているのが見て取れる。唇が薄い。何よりも血管が透けそうな顔。採血検査の時は苦労しそうだと、彰子はひそかに思っている。

立村くんが二年連続評議委員に選ばれた時、女子同士からはブーイングが起きたことを、よく覚えていた。むしろ彰子も、立村くんよりも羽飛くんの方がずっと押しも強いし、明るいし、完璧じゃないかと心積もっていたのだが。男子全員の一括した意見に押し切られてしまった。むしろ羽飛くんの命令に逆らえなかった男子たちの態度が謎だった。何を考えているか分からず、無口だし、英語は得意かもしれないけれども、数字が混じったとたん授業が漫才ねたになってしまう。評議委員が必ずしも成績優秀な必要はないかもしれない。でも、人望は必要だと思う。ひっぱりっていく力は必要だろう。彰子からすると、どうも立村くんにはそのどちらも欠けているような気がしてならない。

——性格は、いい子なんだけどね。男子はなかなか自分からあやまるとかしないけれども、立村くんは男子女子関係なく、すぐに頭を下げてくれるし、気持ち悪いくらい丁寧に接してくれるからね。ホテルのボーイさんみたいな感じかな。でも、本当に何を考えているのかが見えないから、こちらは一線引いておかないとまずそう。こちらが言いたいことをぼんぼん言っても、「ごめんなさい」の一言で逃げられそうな感じだしなあ。なんか、存在感が妙にないのに、どうして男子たちは立村くんを圧倒的に支持するんだろう。今度、ナッキーあたりに意見を聞いてみようかな。

「立村くん、ちょっといいかな」

三分くらい膠着状態が続いたのに痺れを切らしたのか、白衣姿でじっと見守っていたらしい狩野先生が教壇に上がった。この先生も彰子からすれば「何を考えているのかわからない」タイプだ。ひとりひとりに「さん」付けで呼ぶのは、生徒を「紳士淑女」として扱いたいからだとは聞いている。決して声を荒げることもなく、分からない問題は丁寧に黒板で説明してくれる。また、小テストなどもひとりひとり違う内容の問題を手渡してくれる。彰子の場合は数学が得意なので、高校生レベルの死ぬほど難しい問題を渡されて悲鳴をあげている。いい先生なのだろう。でも、今ひとつぴんとこなかった。

——もっと腹が立った時ははっきりと言えればいいんだけどな。去年の石原先生なんてすごかったなあ。今、立村くんがこうやって立っていたら、まず出席簿で思いっきり叩いて、「これはな、基本として解き方がこうなって、ほら、立村聞いているのか。しっかりと目ん玉開いて見てろよ。ほら、手を黒板に当てて、それで考えてみろ」って体で教えていたのにね。ちょっと乱暴かもしれないけれど、わかった時には思いっきり頭なでなでしてくれたし、拍手もしてくれたしなあ。今でも石原先生の所に質問しに行くと、「彰子えらいなあ。医者かあ。じゃあ俺も将来お前の世話になるかもしれないから、がんばって教えなきゃなあ」って燃えてくれるんだけど。どうも、狩野先生って、問題そのものだけを教えてくれるだけで、それ以上の深みがないって感じ。あまり生徒と深くかかわりたくないって感じなんだよなあ。

狩野先生は粉で白くなった指を立てた。手付かずの方程式を押しえるようにして、何かの言葉を発した。

「……」

英語とは違う発音だった。咽を鳴らすような、舌を巻いたような、響きの硬い言葉だった。

立村くんの目がくいと上を向いた。横顔にはありありと戸惑いが見え隠れしている。唇がかすかに動き、自分で何かを言おうとしているのだが、やはりこちらも聞き取れない。「……」

もう一度、ゆっくりと狩野先生は方程式をなぞりながら、立村くんに問い掛けた。

「ねえねえ何言ってるの、狩野先生」

「英語？」

いや、英語じゃないだろう。「ノッホ」だとか「イッヒ」だとか、数回聞き取れない言葉が混じっている。ドイツ語だろうか？ なんとなくそう思ったけれども、断言する自信はない。英語関係の能力が天下一品だとは、立村くんと同じクラスの人ならみなわかっていることだ。でも

、ドイツ語まではわからない。

「……」

小さな声で、うつむいて何かをつぶやく立村くん。やはり「言葉」が「何か」としか、判断できない。

「ヤー、……」

語尾を上げて、次に狩野先生は黒板に問題の答えを綴り始めた。かなり小さい神経質そうな文字だった。

「……？」

プラスとマイナスを重ね、丁寧に同じ部分をなぞりつつ、出てくる言葉はやはり聞き取れないものだった。返す立村くんも、小さく頷きながら滑らかに答えている。内緒話をひそひそするような感じだった。

「おいおい、ここでいきなり英語のヒアリングかよ。やってくれるぜ立村ちゃん」

「てかさあ、なんか立村らしいっていうか、なんというか」

やはり男子たちの反応は好意的だった。一番の仲良しである羽飛くんがにやにやしなながら黒板のふたりを眺めている。

繰り返された異国の言葉のやりとり。十分くらい行きつ戻りつしながら、教室内がしゃべりの嵐に満たされた中、やっと立村くんは席に戻った。隣の古川こずえちゃんが身を乗り出すように、

「ねえねえ、立村、いったい何話してたのさ。なんか、内緒の相談とかしてたんだ？ 英語？」

「違うよ。ドイツ語だって」

短く答えて、すぐにうつむいてノートを開いていた。

——やっぱりそうか。でもどうしてだろう。確かに立村くん、二年に入ってからドイツ語の講習を受けているって聞いたことあるけれど。ま、いっか。人それぞれ、得意なこと、苦手なことってあるもんね。

その後数学の授業は静かに終わった。居眠りの多い授業だった。狩野先生の話す言葉があまりにも細々しているので、みなも騒がない代わりに自分のやりたいことを勝手にやらせてもらっている、という感じだった。授業が終わってからは、時也とお約束の「耳鼻科ヘデート」の予定だった。青大附中よりも授業は早く終わると言っていた。玄関での待ち合わせと、すでに公園で約束済みだった。

公園で三人ケーキを食べまくった後の展開は聞いていない。父にも「飯盒炊爨じゃない方がいいんじゃないの？」とは言えず、委員会関係の用事があるとごまかしてその件はお流れにした。特に残念そうな顔もしていなかったところみると、父なりにかなり無理をしていたのだろう。きっと。

直後の日曜に時也のお母さんと一緒に超どふりふり服を買いあさってきた母に言わせれば、「すぐにお母さんと一緒に病院に行ったんだって」

とのことだった。紹介状であって、診断書じゃないから医者としては気軽に書ける、というの

が言い分だ。とにかく時也の場合は病気をきっちり治して、それからだろうと彰子は思っている。外見の嫌悪感とか不潔感とかをなくしたら、もともと時也はいい子なのだからすぐにもてもてになるだろう。怖いナッキーだっ てついているのだから。寡黙だけれど、頼まれた仕事はきっちりこなすし、荷物を押し付けられた子を見ると、無言で半分以上持ってくれたりもする。

——時也みたいな子はわかりやすいんだよなあ。むしろ、立村くんみたいなタイプって、どうもわからないなあ。男子たちはみんな立村くんを評議委員としてあっさり認めているけれど、そここのところも正直なところ、なぜ？って感じだもん。すれ違っても気づかないっていうのかな。

「どうしたっすか、奈良岡のねーさん」

後ろを振り返ると、南雲くんがにこにこしながら立っていた。腕には銀のアームバンドのようなものをつけている。ブレザーを脱いでいるので、腕がふたつに区切られた感じ。少女めいた袖のラインに見えた。たぶん細いんだろう、うらやましい。

「ううん、別になんでもないよ。それより、あきよくんさあ」

下手なこと口にしたら立村くんへの悪口になりそうで、言葉をくつつけるのが大変だった。「どうして、規律委員になんてなろうって、思ったの。何か似合っていないなあって、いつも思うんだけど」

「そんな俺っていいかげんに見えるかなあ」

目を細めて南雲くんは頭を掻いた。銀色の光がちらっと光り目に入る。彰子も目を細めた。「いやそういうんじゃないよ。ただ、今日もこういう銀色のわっかみたいなの付けてるし。きっとあきよくんは思いっきりおしゃれな格好で決めたいんだろうなあって、想像はつくよ。規律委員の場合だと、厳しい規則がどうたらこうたらって言うのを決めるわけだから、本当にあきよくんのやりたい格好なんて、できないんじゃないかな。それならむしろ、評議委員とかその辺りに立候補したらよかったのにね」

「このクラスで評議に立候補するってことは、自殺行為ですって、ねーさん」

思った通り南雲くんはさらりと答えた。

「立村に勝てるわけないもん。俺だってそのくらいのことわきまえてますって」

「そうかなあ」

ふと表情が変わった。猫が獲物を見つけた時の輝きだろうか。身をかがめてきた。かすかに匂うのは柑橘系のコロンの匂い。こいつ、男子のくせに香水なんてつけてるんだ。あきれる以前に思わず笑ってしまった。

「俺が評議できる器だと、もしかして思ってくれてた？」

もちろん誰にも聞こえないように気を遣ってはいるようだ。立村くんおよび羽飛くんは、廊下に出ていて何かを話している。たぶん聞こえないだろう。

「うーん、難しいところだなあ。あきよくん。でも、あきよくんが評議委員に立候補したら、きっとクラス女子の半数は、賛成の手を挙げてくれたんじゃないかと私は思うよ。立村くんとの決戦投票になっても大丈夫。ただ」

まだまずいことを言ったとは思わなかった。

「羽飛くんだとどうかな、ってそこはあるけれども、あきよくんは人気者だからね。その辺大丈夫



夫だと思うんだ。二年はこのままだろうけれども、もし三年になって考えるところあったら、チャレンジしてみたら？」

素直に口にただけだった。羽飛くんと南雲くんとだったら、人気度からしてたぶんとんとんだろう。どちらも明るいし、考えていることがすかんとわかり、もっと言うならルックスも雰囲気も、女子好みだ。少なくとも立村くんのような、明治時代の書生さんの的雰囲気よりは、ずっと受け入れられると思う。

「わあ、ねーさんに誉められたぜ。まじで。すげえうれしいよ」

笑顔が満開になる寸前、突如唇がとがった。なんか気に障ること口にしたのであるだろうか。言ってくれればいい。すぐにごめんなさいとあやまるから。

「俺は立村には勝てねえよ。羽飛には勝てるかもしれねえけど」

「なあに自信なさげなこと言ってるのよ。ほんっと、実は自信あるくせして！」

はっと気づいた。この前、ナッキーたちと会った日の帰りがけ。

——あきよくん、わあ、そうだよ。とんでもないこと言っちゃった！

「けど、ま、これでエネルギーを注入されたってことで、俺も明るく生きていきますって！」

言い訳、ごめんなさい、悪いこと言っちゃった、口の中でもごもご言っているうちに、南雲くんは両手を組んで伸びをし、自分の席に戻っていった。

——そうだよ、あきよくん、彼女と別れたばかりなんだよね。つい最近。まだ傷口ふさがってないよね。C組の彼女とだよ。きっと慰めてほしかったんだろうなあ。仲のいい女子に。でも私くらいしか手が空いてなかったからなあ。もっと、元気出してって声掛けてあげればよかったよ。ああ、まだ私って人の心を受け止めてなんてないなあ。まあいっか。とにかく、今度はあきよくんに別のことで、気持ちよい話してあげようっと。

なんととっても彰子のモットーは、「私の周りにはいる人はみんな、いい人ばかりなんだもの！」である。今までそれを覆す出来事はひとつもなかった。

特別何事が起こるわけでもなかった。担任の菱本先生は五月の遠足について、やけにのりのりだったし、いつものように司会を務める評議委員の立村くんはあいかわらず冷静にまとめていたし、二D女子一丸の意志「影のリーダー」たる羽飛くんは、

「じゃあ、やっぱりさあ、他のクラスと一緒に集団鬼ごっこやろうぜ。ほら、手つなぎ鬼とかだったら、結構燃えるだろ！」

と、いささか楽しい案を出してくれた。ソフトボールとかドッチボールとか、球技系でないところがみそだ。彰子のように、走るとすぐ息切れしてしまうタイプの人間には非常にありがたい。鬼ごっこだったら、捕まればすぐに手をつないでついていけばいいだけのことだ。思いっきり拍手を送りたかったのだけれども、やっぱり慎重派の立村くんが言い出した。

「でも、手をつなぐのがいやだとか、走ったりするのがいやだとか、そういう人がいるかもしれません。どうでしょうか」

——気を遣いすぎるよね、立村くんは。せっかくみんなで盛り上がりうって話をしているんだから、ここで話の腰を折らないであわせればいいのにな。一生懸命、うちのクラスのためにが

んばってくれてるのは伝わってくるから誰も言わないんだろうなあ。いい子だからなおさら、こんなずれているところが目立ってしまって、損してるんじゃないかなって、思う。

「なあにまたよけいなこと心配してるんだ、立村。ほらほらあっさりと手を挙げて決を取れ。おーいみんな、遠足のゲームは手つなぎ鬼でいいか？」

羽飛くんが立ち上がり、ばんざいしながら手をひらひらさせる。不意に目が合った。照れることもなく、そらすこともなく、にやっと笑ったままだった。

「賛成！」

こずえちゃんの声と同時に男子女子次々に右手が拳がった。中には数本、左手を挙げている人もいる。左利きの子だ。

すぐに教壇の高いところから指差し式で数えているのが美里ちゃんだった。立村くんは数を数えたりするのが非常に苦手だから、こういう時は野鳥を計算するように素早い美里ちゃんの本領発揮となる。しっかりしている。二年連続評議委員。呼吸はぴったりだ。

「あれ、全員じゃない。立村くん、これで決まりね」

「ありがとう。それでは、全員一致で、手つなぎ鬼をすることにします。特別準備も要らないようなので、あとはバスの席順だけを決めることにします」

今日の美里ちゃんはブレザーの襟に細い矢印のブローチをつけていた。濃いグレイ色に溶けて見えないから、たぶん校則違反にはなっていないだろう。こういうところが美里ちゃんの可愛いところだし、「評議委員なのに嫌われない」ところだろう。彰子も美里ちゃんは大好きだ。

教壇から降りて美里ちゃんは羽飛くん小さく何かをつぶやいていた。聞き取れないけれど、指先でつんつんつづく真似をした羽飛くん。からかうか何かしたのだろう。

「もう、やあだあ。貴史ってばあ」

ちっとも媚びている風に見えない。物心ついた頃からの幼なじみとは聞いていたけれど、今だにそんな仲良しこよしでいられること。他の人からすれば珍しいことなのだろうけれども、彰子にとっては目の保養でもある。

——しょうがないよね。美里ちゃんにだったらな。

——羽飛くんはアイドル好きの面食いかもしれないけれど、美里ちゃんだけは別だもんね。やきもち妬いたってしょうがないもん。こずえちゃんには悪いけど、羽飛くんはもうあきらめるしかないってことよね。

「いい子」「やさしい子」と「子」を使うくせのある彰子が、唯一使用しない相手。「人」と呼ぶ相手。

それが、羽飛貴史くんだった。

水口くんが毎日のように見せびらかしにくる、「人体解剖図」を一緒に楽しみ、お互いに、「今夜は、カツオの解剖する予定なんだ！」

「そっか、じゃあ私はあじの解剖をしようっと」

約束しあい教室を出た。心なしか水口くんは、医学部への夢を口にしてからというもの、ちょっとだけ大人びた風に見えた。一年の頃みたく、転んでもすぐに泣きじゃくることが少な

くなった。彰子が、

「お医者さんはね、身体が丈夫でないとできない仕事だから、今のうちにたくさん食べておこなくちゃね」

と話したのがきっかけなのか、給食を全部食べるようになったとか。

菱本先生にも、

「奈良岡のお言葉は偉大だなあ。すい君、お前大人になったなあ」

と双方にお褒めの言葉をいただく始末。水口くんによけいなお世話してしまっただけなのかもしれないけれど、やっぱり明るい顔してくれていたら、青大附中の生活も楽しくなる。エリートだか優等生だかわからないけれど、とりあえずはみんなが笑顔でいてくれる。もう「もてもての小学校黄金時代」が戻ってこなくたって、彰子は十分満足だ。

「奈良岡さん、奈良岡さん」

——あきよくんだな。

放課後直後の一時間は、それぞれの「委員」顔をしているもの。校則違反の嵐少年・南雲くんも同じだった。まがりなりにも規律委員様。何か、チェックされそうなところあったらどうか。言ってくれたら直すし、まあいいか。

「どうしたの、あきよくん。これから委員会？」

「うん、ほら、これさ」

いきなり抱えているこぶりのスケッチブックを差し出した。ローマ字で、「SYUSEI AKIYOKO」と綴られている。ペンのイタリック体でだ。凝っている。さすが二年D組の王子さま。

「今度、青大附中のファッションブック作るんだ。ほら、俺、描いたんだ」

「ファッションブック？」

確か規律委員会は、服装を正しくするための一環として、毎年限定でイラスト入りの規定集を作ると聞いていた。あまり興味がなかったのを見ていなかった。なにせ彰子は、「どふりふり」ものでなければ十分というタイプだ。要はウエストが入るものならなんでもいい。南雲くんは前髪を何度も書き上げた。話している最中に三回くらい。長すぎるから邪魔なんだろう。今度、はさみ持ってきて切ってあげようかとふと思った。

「今年から年四回発行になったんだ。んで、俺が今回イラスト担当で、たくさん描かされてるんだ。でも、委員会の連中ばかりだったら今ひとつぴんとこないから、奈良岡のねーさん、ちょっとだけ見てもらえないかなあ」

「いいなあ、私も見たいな、あきよくんって絵がうまいもんね」

素直に彰子は答えた。せっかくだったらゆっくり観たい。めくりたいと思う。ファッションについてはよくわからないけれど、きれいなものを見るのは好きだ。でも。

「あ、でも今日はだめなんだよね。ごめんね。今度、教室でゆっくりみんなで見たいな」

独り占めするのは、やはり「青大附中内の南雲くんファン」に失礼だろう。

ようやくフリーになって、たぶん水面下では争奪戦が行われているであろうから。彰子が誤解

を招くことをやらかそうものならば、きっと迷惑になるに違いない。

「みんな、って？」

「だから、あきよくんの絵の巧さは私もよくわかってるから、クラスのみんなでじっくり楽しみたいんだよね。あ、できれば、コピーしてほしいな。うちの父さん母さんにも見せたいから。この前話したと思うけど、うちの母さん、レースやフリルがどっさりついた可愛い服が大好きなんだ。よかったら今度、あきよくんに書いてほしいな。もちろん、可愛い女の子の絵でね。まかり間違っても私みたいなおでぶさんじゃなくてね！」

ぽんと、腕のところを叩き、スケッチブックを押し返した。

「今日、これから、だめ？」

「これから予定があるんだ」

「あのさ、もしかして、あの自転車の」

相当強烈な印象だったらしい。ナッキーの金銀まだらのペインティングチャリは。

「いや、違うよ。これからね、友だちが青大附中の校門に迎えにくるんだ。一緒に病院に行くんだ。耳鼻科にデートなんだ！」

もちろんしゃれである。時也にもちゃんと「一緒に病院でデートしよ」と言った言葉そのものだ。これを誤解する人はいないだろう。

「耳鼻科、って？」

「もう、やだなあ。この前私に彼氏いるかいなかったこと聞かれて爆笑もんだって言ったの、覚えてる？ その子なんだ」

「その子って、男子なのか」

心なしか冷たい響きだ。ちょっと機嫌を損ねたきらいあり。

「うん、そうだよ。でもね、彼氏とかそんなんじゃないんだよ。ちょっといろいろあって、私が母さんにいい病院を紹介してもらったんだ。早く病気が治って、その子が元気になれるようになって。卒業してから離れ離れだけど、やっぱり大好きな友達にはいつも元気でいてほしいからね」

「病院？ 紹介？ あの、ねーさん、よくわからないですが」

不機嫌はだんだん疑問にすりかわっていく様子。南雲くんは耳にカバーをつけるような感じに手をかざした。たぶん詳しく説明しないとわかりづらいだろうとは思うが、残念ながら時間がない。時也が迎えにくるはずだ。

「ほら、うちの母さん、医者だから、そういうのに詳しいんだ。どの病気にどのお医者さんに行けばいいかってこと、いっぱい教えてくれるんだ。たまたまその子の病気にお奨めのお医者さんが見つかったから、この前新しく行くことになってね。その時にせっかくだったらってことで、一緒にデートみたく耳鼻科に行こうかってことになったんだ」

「なんで？ あの、奈良岡さん、病気とデート？ 病院で？」

「だって、私にはいわゆるデートって一生ありえないって思うんだ。遊園地とか、喫茶店とかそういう可愛いこと似合わないもん。でも、大好きな友だちと一緒にだったら、病院の待合室だって絶対楽しいよ。小学時代の栄光の日々を、せめて思い出させてねってことで」

だんだん混乱の極地に陥ったらしい南雲くん。本当はもっと「紹介状について」「紹介状と診断書とは違うこと」「自分がなぜ医者になりたいか」「友だちがいつも笑顔でいてくれるにはどうすればいいか」などなど語りたかった。南雲くんは見た目よりもずっとひたむきでまじめだとわかっているから、思いっきり話したかった。でも、時間がない。

「じゃあ、また明日ね、ばいばい！」

走らないと間に合わない。彰子は素早く背を向け、後ろ向きに手を振りながら玄関に急いだ。

「彰子、おせえぞ」

靴を履きかえる前から、誰が来ているのかすぐに見分けがついた。

まだ夕日が落ちない黄色い光。まばゆい物体がひとつあり。

「ああ、ナッキーもいるぞ！ 時也、今日は私とふたりっきりじゃなかったのかなあ」

時也は無表情で頷いていた。学生服のままだった。白い縁取りをした、一発でどこの中学かわかるというあれだ。

「夏木が、勝手についてきた」

「あったりめえだろ。彰子とデートするんだったら、俺も一緒だろ。な、時也」

頷く時也。もし、これが「デート」ならば、両手に王子様ってことだろうか。これは贅沢だ。思わずにやけてしまうのをこらえつつ、彰子はふたりの肩にゆっくりほおずりした。右、左と頭を乗せたただけだけど。さすがに青大附中の連中にはできないけれど、このふたりには許せる。

「検査はどうだった？ なんも痛いことされなかったでしょ」

「今は手術できないって言われた」

ぼそりつつぶやく時也のポケットを覗いた。薄い。つぶれている。ちゃんと使用済みティッシュを入れるためのビニール袋を持参しているらしい。ナッキーの提案だろう。

「じゃあ、トリプルデートに出発！ でも、待合室が込んでたら私とナッキーは別のところにいた方がいいよね」

「予約だから」

前をずんずん歩き出す時也を追いかけ、彰子は急ぎ足で自転車置き場へ向かった。ひゅうと口笛を吹くナッキー。何もかもがくっきりと見えるふたりの言葉。身体のすみずみまで気持ちよかった。

時也の慢性的鼻炎の原因はそれなりの病名だったらしい。

手術を必要とするほどではないという。成長期の間はまだ手がつけられないので、しばらくは薬で様子を見ようとのことだった。

なんで彰子がそんなことまで知っているのか。

決して時也を絞り上げて白状させたわけでも、診療室までナッキーとふたり押しかけていったわけでもない。三日後、時也のお母さんが彰子の家に来て大きなバウンドケーキを手土産にぺらぺらと話してくれたことだった。もちろん彰子の母と同じくどふりふりのピンクドレスを纏って。母よりもほっそりしているからフランス人形のようにかわいらしい。

——似合う人がうらやましいな。

ふと、そんなことがよぎって慌てた。

当然、手土産のケーキは母に取り上げられ、全部父に食べさせることになってしまった。残念だ。自分の体重増が将来三大成人病に影響するからだと母に聞かされても、やはりむなしい。「悔しかったら、少しは意識しなさいよ。彰子だって愛嬌だけで売っていただけだったら、これから勝負できないよ。世の中の目は、厳しいんだから」

——勝負？

首をかしげてみた彰子に、母はぱりぱりの南部せんべいを皿に盛った。耳がしゃきしゃきして美味しいし、ごま味もなかなかのもの。でも、甘いケーキの方がいいのも確か。

「あんたって子はほんっと、人を疑うこと知らないからねえ。今まではそれでもよかったけど、お姉さんになってくるとそうもいかなくなるんだからね」

——お母さん、人のこといえるの？

さらに首を反対側にかしげた。もう母は返事をせず、自分用のケーキをぱくついている。仕方なく彰子も、そのままかぶりつくことにした。

例の耳鼻科トリブルデートにて聞いたところによると、ナッキーが精一杯、時也のためにクラス女子と対峙しているらしい。その辺は心配していなかった。まあ女子だって、時也の病状がよくなったら文句を言うネタはなくなるわけだから、これ以上不潔扱いすることはないだろう。

父からはクラス情報をあまり聞いていなかった。話もしなかった。

彰子も無理に聞き出す必要もないと思っていた。

何か困ったことがあればナッキーあたりから連絡がくるに違いない。

彰子にはようやく、青大附中二年D組内の「気になること」を整理する余裕ができた。ナッキー、時也と出かけた耳鼻科へのデート、あれはごく普通のおしゃべりと、帰り道母からのお菓子配布つきでめでたく終わったけれども。

——あきよくん、まだあの時のこと、怒ってるんだなあ。

あれから一週間、南雲くんは口を利いてくれなかった。

もちろん朝の挨拶はいつも通り、  
「あきよくん、おはよ！」  
と彰子の方から声をかける。

軽くうなづく感じで答えてはくれる。しかし、それだけだ。妙に言葉が少ない。  
「今度、例のイラスト見せてね」

通りすがりに一声かけても、妙にびくっと肩をこわばらせ、頷くかよそ向くか、そのどちらかの行動を取る。一週間続いてようやく避けられていることに気づいた。

——まずいなあ。あの日は時也を待たせていたから、スケッチブックの絵を見ていく余裕なかったんだもんなあ。一応、あきよくんには説明したけれど、確かに一方的に断っちゃったようなもの。友だちだったら、そりゃいやよね。反省しなくちゃ。

彰子は次の授業の教科書を机から取り出した。理科の実験が、教室で行われる予定だった。本当だったら教科書を持参の上、理科実験室へ向かうのが筋だ。でもこの日は、教育実習生の授業が入っていて、一日貸切になってしまった。仕方ないので二年D組の教室で、アルコールランプを持ち込み、マグネシウムを熱して酸化させるという実験を行うことになった。火を使うのでめったに教室でやるなんてことはないのだけれども、しかたない。机をそれぞれ班ごとに向かい合わせて、場所を広くこしらえていた。彰子の席は角の方だった。椅子の背を向けたら、隣の班、南雲くんたちのところにぶつかりそうだった。南雲くんが隣の立村くんの席と一緒に動かしているのが見えた。

「南雲、悪い。ちょっと手伝ってくれ」

近くで声がすると思ったら、学習委員の男子だった。

いつもは評議委員が先生の教科書を運んだり、細かい道具を持ってきたりするのが常だ。めずらしく今日は違うらしい。立村くんもいない。美里ちゃんの姿も見かけない。

「あん、なんだよ」

愛想良い声で答える南雲くん。機嫌は悪くない様子。

「実験室、やたらと細かいものが多くて運び切れねえよ。悪いんだけど、南雲手伝ってくれねえか」

ははあ、どうやら、南雲くんの実験道具運びを頼んでいるらしい。

「いつもだったら立村に頼むんだけどさあ、逃げられたよ」

「さっき、三年の教室に行くって言ってたなあ。まだ戻ってないっか」

どうやら学習委員の彼は、アルコールランプとか三脚とかを六セット一人で持ってくるのが不可能だということを認識しているらしい。そばで聞いている彰子も想像がついた。いつも理科実験室で用意する際は、平べったい木の箱にまとめて、一緒に運んでくるのが常だった。

ふと一案が思いついた。ちらりと南雲くん視線を送り、目が合うのを待った。ぴくりとしているのがわかる。

「じゃあ、私が手伝おうか？ あきよくん」

もうひとりにはあらら、という風に顔を向けられた。

南雲くんの方は無言だった。目をこわばらせ、笑顔なく彰子を見つめていた。今日の髪型はおしゃれな南雲くんにはまれながら、少し生え際が崩れている様子。たぶん寝癖が取りきれなかったのだろう。

「うわっ、奈良岡のねーさん、まじで手伝ってくれる？」

手もみしつつ近寄ってくる学習委員の君に頷いた。この子の気持ちも察するに、ひとりじゃあいやだろう。

「どうせ私の筋肉だったらあっという間に運んでくれるし、いいかなって思ったの。ここで少し、余分な脂肪を減らさないかね」

「うはは、言えてる、感謝っすよねーさん。じゃあ俺も先に、先生のところさ行ってやばい薬品ないかどうか聞いてくるからよ。できたら、六セット、持ってきてくれるとうれしいぜ」

「うん、わかった。じゃあ、あきよくん、一緒に行こうか」

学習委員の君との軽い口調。ふだんだったら南雲くんとばかやっている時と同じのはずだった。

南雲くんが何も言わず立ち上がり教室を出たのを、彰子は大急ぎで追いかけた。とりあえずは荷物運びを手伝ってくれそうだ。扉が閉まりそうなところもう一度開いて反対方向の職員室へ走っていったのは学習委員の君だった。

ふたりっきり。あやまるにはいい機会だ。

前回のことは南雲くんに時間を取ってあげなかった彰子が明らかに悪い。

——話せばわかってくれるよね。大丈夫。

ひとりですたすた歩く南雲くんを追いついたのは、理科実験室前だった。

戸口で振り返り、冷ややかなまなざしで彰子を見つめていた。

意外に根に持つ性格かもしれない。

——うわ、本当に怒ってるかも。

彰子は思いっきりほっぺたのところをやわらかいままにして笑顔を振りまいた。

「待っててくれたんだね。ありがと。じゃ、お手伝いするね」

無言で扉を開いた。中には誰もいなかった。消毒した後の黄色い匂い、口から空気を吸ったら咽をいためそうな塩酸っぽい匂い、ガラス戸に納まった理科実験道具の数々が迎えてくれた。

「アルコールランプは、どこだったっけ？」

あえて気づかない振りをしながら反対側の戸棚を開ける。三角フラスコ、ガスバーナー、いろいろな長さの試験管一覧。ホルダーもさわると刺がささりそうな木製のものが並んでいた。横に細い小箱はリトマス試験紙。大抵実験で使う時、一、二枚くすねる奴がいた。

「ほらほら、あきよくん、リトマス試験紙あるよ。もらってく？」

返事が返ってこない。すでに南雲くんはアルコールランプの揃っている棚の前に立っていた。鍵を開け、木製のおぼん型入れ物にひとつひとつ並べた。六セット用意しなくてはならない。あとは三脚だろうか。

「あきよくん、何か用意するものあとある？」



さすがにこれ以上沈黙が続くのはまずいだろう。決して無視しているわけでないということは、彰子にもわかる。時折ちらちらと、振り返る様子を感じる。彰子が口を開こうとすると慌てて目を逸らす。たとえば悪いかもしれないけれど、立村くんのしぐさに似ている。今までの南雲くんにはない様子だった。

——こう言う時は、こっちからごめんなさいしとこうかな。

彰子は「危険！さわるな！薬品あり」の張り紙がされている別の戸棚の前を通り、アルコールランプの並んでいる棚に近づいた。ついでにピンセットを六本掴んで。

無視はしてない。確かに南雲くんは彰子の方を無表情で見つめ続けている。一切相手にしてもらえないのならばしかたないけれど、まだ脈はある。だいぶ古い木製おぼんの上に、ひとつひとつピンセットを並べた。ひとりで十分運べるだろう。

一呼吸、二呼吸、置いた後に彰子は南雲くんの顔を見上げた。やはり背は高い。

「あきよくん、先週はごめんね」

笑顔は絶やさないように、まずは話だけ聞いてもらえるように急いで続けた。

「せっかく、イラストを見せてくれるって言ってくれたのに、私の都合で無視しちゃった形になっちゃって。友だち待たせてたのはほんとうだけど、あきよくんをないがしろにしたと思われても、仕方がないよね。反省してます」

できるだけ軽く、おしつけないように。母が父の機嫌を取る時いつもやっているように。大抵は、バーゲンでどふりふり服を買い過ぎた時によくするやり方だ。

南雲くんはすぐに横を向いた。へらへら口調ではない。

「別に、そんなこと」

「ほんと？ 私、あきよくんに思いっきり嫌われたかと思ってひそかに焦ってたんだ。よかった！」

過剰なくらい「よかった」を繰り返してみる。どうもまだひっかかりが取れたわけではないだろうが、決定的に「お前とはしゃべりたくねえよ」と言われるよりはまだ、友情の脈はある。

「嫌われる？」

目をアルコールランプに向けたまま南雲くんはつぶやいた。語尾は上げている。疑問形だ。

「やっぱりみんな仲良しな方がいいに決まってるもん。ね」

「仲良し、だけかよ」

やはりまだ、許してくれてなさそうだ。いやはやと肩をすくめたくなる。でも彰子が話をすればなんとかかなりそうだ。滑らかに言葉を緩めた。

薄いあめ色のアルコールがランプの底で揺れている。キャップが揺れていた。マッチがないことに気づいて慌てて引き出しから取り出した。

「そうだよ。あきよくん。いつも思うんだけどね、私ははっきり言って一生ミスコンテストには縁のない顔してるし、親にはいつも痩せろ痩せろって言われてるけれど、でも誰よりも得してるってね」

「得？」

今日の南雲くんはずっと語尾を上げっぱなしだ。

「うん、私の身の回りにいる人って、みいんないい人ばかりだってこと。この前、小学校の友だちが私を迎えにきてたって話したよね。私、男子も女子もみんないい人ばかりがそばにいるから、安心して話ができるんだ。お母さんにも、私が人を信用しすぎるって言われるけれど、だって信じられる友達ばかりだもの。ほら、あきよくんだって私にとっては、いい友だちだよ」

一番わかりやすい言葉だろう。彰子のわかる範囲内で、一番南雲くんに伝わると思う言葉だった。

「友だち、かよ」

「そう。だから、そうでなくなってしまうたらやだなあって思ってたの。怒ってないって分かったから、もう私も安心したな。よかった。じゃあこれ持っていくね。戸を開けてください」

もう大丈夫だ。まだ機嫌を直したとは思えないけれど、友だちとしては問題なからう。安心して彰子は両手を木のおぼんにかけて。持ち上げようとしたが押さえられた。右手側を抑えられた。小指だけ、南雲くんの掌に触れていた。

「あ、持って行ってくれるの？」

答えはない。力が入っている。持たせようとはしていない。

「早く行かないと実験の準備が終わらないよ。いって。私が持っていくからね」

もう一度持ち上げようとしたが、さらに押さえつける。彰子の右肩に、南雲くんの顔が乗っかりそうだった。髪の毛が少し耳もとに触れた。

息遣いが荒い。疲れているんだろうか。

「俺のことは、友だちなのか」

耳もとに、息をたっぷり込めた言葉が流れてきた。

気配が違う。

「そうだよ。それよりどうしたのあきよくん。具合悪くなったの？」

「答えてくれ。俺のことは、それだけなのか」

「それだけって、何が？」

「金銀のまだら自転車の奴、あいつよりも、俺は友だちなのか？」

——ナッキーのことだ。

金銀まだらの自転車は趣味でなかったのだろう。思わず笑いたくなかった。そういえばナッキーも南雲くんのことを「なんとなくむかつく」と言っていたっけ。

「そうだよ。ナッキーはそうだね、ちっちゃい時から友だちだよ」

「この前迎えに来ていた奴は？」

——時也のことだろうか？

調子が狂いそうで彰子も懸命に答えた。

「見てた？ 時也も、友だちだよ。だから一緒に耳鼻科にお付き合いしたんだよ」

そっと、横目で南雲くんの顔をうかがおうとする。うっかり顔をずらしたら顔と髪の毛がべっとりくっつきそうになる。そりゃあ、嫌だろう。できればもう少し、離れてほしいのだけど。でも下手なこと言ったら返って怒られそう。ただでさえ南雲くんのご機嫌は斜めなのだから。

——困ったなあ。逆効果だったかも。私ってほんっと、ばか！

思い切りため息をついた後、彰子は軽く木製おぼんを持ち上げた。

「ほら、早く行くよ。うっかりここで落としたり、アルコールがぷんぷんで先生に怒られちゃう」

もちろん笑顔を絶やさなかったつもりだった。戸口へ向かおうとつま先を出した。

「行くなよ！」

鼓膜が破れるかと思った。まだ南雲くんの口元は彰子の耳もとに残っていた。

「俺の話、まだ終わってないだろ、奈良岡さん」

「だから、どうしたってのよ。あきよくん」

耳を押さえきれず彰子はもう一度、アルコールランプを実験机に置いた。

「俺は、あんたのことを友だちなんかだと思ってなんかねえよ！」

「え？」

力が抜けそうになる。思わず指先を離した。

あれだけあやまっても、だめだったらしい。

何を言っているかわからない。彰子は首を振っていた。

「あきよくん、ごめ……」

「違う、聞けよ！」

自分の手がいきなり厚く覆われた。指先が動かない。南雲くんの指先がしっかりと押さえてくる。握り締められたと気づいたのはまだ後だった。

「ちょっとちょっと、あきよくん、なんかとんでもないところ掴んでるよ。ほらほら、離して。また噂されちゃうよ。私なんかと……」

「されるなら本望だ！」

逆効果。完全に彰子は読みを誤った。手の甲からにじんできてくる湿り気は汗だろうか。顔をのぞけず、だんだん心臓の鼓動が指先のぬくもりと重なってくる。いつもの南雲くんの口調ではない。いつものように

「あれ、ねーさん、どうしたっすか」

と声をかける明るい「あきよくん」ではなかった。

視界に入る南雲くんの顔に笑顔はない。彰子が分かるのはなんかわからないけれど南雲くんが本気だってことだけだ。

「本望だったって、そりゃ困るでしょって」

「好きな相手に好きだと言ってどこが悪いんだ！」

「は？」

手が離れない。完全に南雲くんの中のモーターが暴走している。彰子の中の精神的鼓膜が破れていく。

——好きな相手に好きだと言って、って、あきよくん、まずいよそれは。

南雲くんの言葉は途切れず、まだ手を離してくれない。状況が把握できないまま、言葉が続く

「奈良岡さん、俺、軽いと思われてるだろうけどさ、今言ったことは嘘じゃない。ほんと。それだけは信じて」

「だから、あきよくん、ちょっと待って。頭の中が混乱してるんだけど」

「話は一言だけだって。奈良岡さん、俺は本気だ。付き合ってください」

「付き合うって、でもあきよくん、言いたくないけど確か、先週」

彼女と別れたんでしょ、言うつもりだった。遮られた。

「好きな子ができたから、別れた」

「好きな子って、今の話だと下手したら私のことになっちゃうよ、日本語文法上、それはまずいでしょいくらなんでも」

「まずくないって言ってるだろ！」

南雲くんの顔を見ないようにして、彰子はひたすらアルコールランプのふたを数えていた。さすがに心臓がとくとく言い出してきた。

繋がらない。南雲くんと「告白」の意味がわからない。

第一、「付き合ってください」だって、いきなり言われても困る。

彰子が知りたいのは、南雲くんが彰子のことを「友だちじゃない」と言ったのに、なぜ「付き合ってください」になるのか、そのつながりだけだ。一生懸命彰子があやまっても許してくれなかったのに、なぜ、今になっていきなり「付き合って」と言い出すのか、わからない。

——どうしよう、どうすればあきよくんを冷静にさせられるんだろう。

——きっと、私がまだ怒らせてるかなんかしてるのかも。

——だって、今の話からすると、私と付き合いたってこと言ってることになっちゃうよ。

——それだったらいくらなんでも、あきよくん、いやでしょう。

「奈良岡……彰子さん、俺と」

さすがの彰子も黙るしかない、混乱を制する一言が、南雲くんの口からこぼれた。

「南雲秋世と、付き合ってやってください」

おそろおそろ横を見る。目が合った。からかい調子だったら笑ってごまかそうと思った。でもだめだった。彰子の目からみても、南雲くんの瞳は少しだけうるみ加減、笑みは目尻一滴残っていなかった。

——なんで？

あらためて指先の神経を震わせてみる。じわっと南雲くんの手のひらから熱いものがにじんでくる。

「もし、あの自転車野郎と付き合っていたとしても」

「ううん、それはないよ。ないけど、ちょっと待ってね。あきよくんちょっと」

失神しそう、ってきっとこの瞬間のことを言うのだろう。

いいかげんな言葉を返したら、何が起こるか分からない。アルコールランプに火がついてしまったのだろうか。少しだけ底のアルコールが揺れている。あめ色に光っている。

——どうしよう……。

ちょうどチャイムが鳴った。足早に駆け出す気配あり。廊下に誰かがうろついているらしい。

急いで教室に戻らなくてはならない。頭の半分で冷静に考える彰子がいた。

まだ「あきよくんの前では笑ってあげなくちゃ」と命令する自分がいた。

「あきよくん、今のこと、また、あとで聞くね。ごめんね」

「ごめんって」

「いや、そういう意味じゃなくて、ごめん、私、なんかまた変なこと言っちゃいそうだから、ちょっとだけ時間ちょうだいね。あの、とにかく」

精一杯両腕に力をこめて実験セット一式を持ち上げた。やっと南雲くんの手も離れて落ちた。

「とにかく、教室に戻ろうね。私持っていくね」

返事は待たない。とにかく理科準備室を離れないと、またとんでもない言葉を口走ってしまう。

奈良岡彰子の人生において生まれて初めて聞かされた「付き合ってください」という言葉。

どう調理していいのかわからなかった。

言葉をおさかなさばくように解剖する時がほしかった。

——付き合ってください。

「奈良岡さん、俺は」

南雲くんの追いかける声は何を言っているのかわからない。開けるのを待たず、背中で戸を押して彰子は廊下に出た。あぶなく転びそうになり、バランスを取った。もう人通りはない。二年D組の教室は同じ階だから階段を昇らないですむので急ぎ早に歩を進めた。風が窓から砂埃を巻き上げている。咽にひっかかり そうで咳が出た。背中越しに南雲くんがついてきているかと振りかえったが、いなかった。

——どうしよう、とんでもないことになっちゃった。

教室の扉に佇んだ時だった。

「おい、聞いたか聞いたか？」

「まじかよ、ほんとか？」

確かに扉越しすごい騒ぎになっているとは感じた。誰かにドアノブを開けてもらいたかったから、戸口席の誰かに合図するつもりで立ち止まっただけだった。盗み聞きなんてしようと思っていない。勝手に聞こえてくる。誰がしゃべっているのかなんてわからない。男子と女子だと、わかるだけ。

「えー、南雲くんが彰子ちゃんに告白しちゃったの？」

「うそでしょ！ だって南雲くんには彼女がいたくせに」

「ううん、別れたってC組の子からは聞いたよ。彼女ショックで泣いちゃったらしいけれどね」

早口だ。息を継がないで事実関係をどんどん積み上げていくのが女子のしゃべりだ。

手元のアルコールが揺れている。

「おいおい、それほんとかよ」

「だって今、理科準備室で死ぬほど恥ずかしいこと、あいつが言ってるんだぜ。信じられるかよ」

」

「なにになに？」

「付き合ってくれって。奈良岡のねーさんが露骨にいやがってるのにさ、南雲の奴、手を押さえつけてさまるでなんか脅迫してるって感じでさ」

「ちょっと待った。本当に相手は奈良岡だったわけ？」

「だから俺だって信じられないんだってさ」

うろうろ、前側の戸に移動してみる。あまりにもタイムリーな話題に飛び込めない。さすがに彰子でもそこまでクラスの注目を浴びたくなかった。

C組側の位置からは、同じく勢いよく盛り上がる声が飛び込んできた。やはり女子だった。「聞いた？ 今D組の男子が話してるの聞いたんだけど、……ちゃんの彼がとんでもない女とできちゃったんだって」

——とんでもない、女？

口の中にセメントを流し込まれた感じだ。身体の節々が堅く、こわばってくる。耳だけがそよいである。聞き取ろうとしている。廊下にはまだ誰もいない。先生がくるかこないかの瀬戸際だ。

「ほらD組のすっごく太った子いるでしょ。あの子だって」

——そりゃあ、私のことだろうなあ。私より大きい子って男子もそういないもんなあ。

「知ってる知ってる、保健委員やってる、すっごく性格いい子でしょ。ああいう子大好き」

「性格はいいかもしれないけど、あの顔とあの体型だけで、私は絶対いや！ 見てると暑苦しくてうっとおしいよね」

彰子は一歩ずつD組側に横歩きして移動した。ずっと両腕で抱えているからどうしようもなかった。

彰子は後ろを振り返った。ようやく南雲くんが廊下の向こうから現れた。

気まずそうに、うつむき加減で、でも目をそらさずに。

「あの、さっき」

「あ、ご、ごめん。ちょっと私、おなか痛くなっちゃったみたいなんだ。今日の実験、パスするね。やだなあ。もう、なんか変なことばかり言ってるね。じゃあ、これ、お願いします！」

真っ正面に向かい、両手で差し出した。ランプの中のアルコールが、右左と揺れていた。

「俺、本気だからな、それだけは信じて」

言いかけた南雲くん小さく首を振り、目一杯笑顔をこしらえた。かなり無理していた。

「ほら、私は気にしないから。ね。私はただあきよくんの友だちでいたかっただけだから」

がしっとおぼんを押さええてくれたのを確認してから、ぱらっと手を離し、一歩、二歩と後ろずさりした。

「ほんと、変なこと言ってごめんね！」

髪がぱさぱさきしんでいる音が聞こえる。心臓が壊れそうだ。こう言う時こそ、青大附中の保

健室は守ってくれる場所だと思う。保健委員だって身体と心の調子がよくない時はあるのだ。今、利用しなかったらどうするっていうのだ。

全く冗談めいた風に南雲くんの表情は崩れなかった。だから怖かった。手に残った汗ばんだ感覚が、今ごろになり蘇ってくる。彰子は急いで階段を下りた。保健室は一階の職員室隣りにある。

。

「いやあっ」

保健室に入ってみると、白いカーテンの後ろ側では修羅場の展開中だった。相手の顔は見えない。保健の先生および、他の先生がそばについているらしい。悲鳴じみた泣き声が聞こえた。何かがあったらしいけれども、カーテンで隠さなくてはならないくらいのことらしい。なだめる声、落ち着かせようと叱りつける声。自分が割り込んだらお邪魔虫になりそうなのは目に見えていた。

ちょこんと顔をのぞかせた時の、保健の先生は穏やかだった。彰子だと気づくと突然笑みを浮かべた。切り替えが早い。

「あら、奈良岡さん、どうしたの」

「ちょっとおなかが痛かったから、寝たかったんだけど、無理そう、ですね」

「あらめずらしい」

直前まで

「ほら、もう三年なんだから大人なんだから！」

とわめき散らしていた先生とは違う。もともと保健の先生はそんなに声を荒げない人だった。「今のうちにベット占領しちゃいなさいな。胃腸に来る風邪なのかな？ 季節の変わり目は風邪引きさんが多いからねえ」

「かも、しれないです。今日は患者さんになっちゃっていいですか」

健康体そのものだとわかっているから、嘘をつくのも罪悪感あり。

おなかが痛いと思ってみると、なんとなく横っ腹がちくちくしてきた。

全く嘘、ってわけではないよね。と言い聞かせた。

彰子はカーテン越しの修羅場に耳を済ませながら、横たわった。保健室のベットは全て白いけれども、ところどころパイプのペンキがはげている。人が見ていないことをいいことに、ちょこっとだけ乾いたペンキ跡を爪ではがしてみた。ぱかっと、落ちた。

どうやら三年の女子が、授業中に何か騒ぎを起こして保健室に連れてこられたらしい。いささかパニック状態。でも彰子が来てから五分くらいで落ち着きを取り戻したらしく、ばさばさとか何か物音の後静まった。たぶんベットに寝かしつけられたらしい。白いカーテンのシルエットが、人の形したままゆっくりと倒れていくのを彰子は見ていた。

——保健室って、自分で使ったこと初めてなんだよね。よく、クラスで貧血起こしたりした子を連れてきたりしたけどね。こうやって、みんな天井を見上げてるんだ。緑色なんだ。鶯色の天井に、明るい陽射しが陰をこしらえ、ふらふらと丸く揺らめいている。天気がよくても教室・保健室の中では電気をつけなくてはいけないらしい。明るすぎる空気に、彰子は少し目を被いたかった。

——あきよくん、どうしてあんなこと、言ったんだろう。



何度も「俺は本気だから」と繰り返す南雲くんの顔と口元が忘れられない。

「付き合ってください」と二回も口にした南雲くん。

——私があきよくんと友だちだって分かってるのに、どうしてだろう。

——わかんないよ。どうしてだか。どうしよう。

あらためて天井の丸い揺らめきを追ってみた。ひとつ、ふたつ、みっつと灰色の勾玉がさまよっているようだった。夜中に見つけたら、きっとこれは人魂だ、どうでもいいことを考えた。

彰子にとって、まだ南雲くんは「子」と呼べる相手でしかない。同い年の男子で「人」と呼べるのは羽飛くんしかいない。入学式の時初めて、羽飛くんと話をした時は確かに、「こいつはすっごくいい奴だ」と思い、もっとおしゃべりしたいと願ったものだった。南雲くんと口を利いたのはいつだっただろう。ずっとずっと後のはずだ。たまたま「秋世」という名を「あきよ」と呼んでしまった時に、

「いいよ、俺、ガキの頃からずっとあきよっていわれてたから」

と、ぱっかり笑顔で返してくれてからだろう。

青大附中に入学してから、自分が小学校時代いかに男子に人気あったか、いかに自分がそれに甘えてたかってことがよくわかった。母が口癖のように、

「あんたは愛嬌で生きていく子なんだからね」

と言い聞かせていたのも、今なら通じた。

何があっても、自分は笑顔を忘れてはならない。

自分の武器は、それだけだったと知ったから。どんなに逆立ちしたって、彰子は美里ちゃんやこずえちゃんたちのように可愛いとは思われないのだからと。

そう、羽飛くんの視界には入ってないのだからと。

羽飛くんの好みが「アイドル歌手鈴蘭優」的幼い感じの美少女だと知り、それ以上に幼なじみの美里ちゃんを大切にしていることにも気づいた時。

たぶんこの段階であきらめてしまったのだろう。

辛いとか哀しいとかは思わなかったけれども、かつてのように男子たちがガチャガチャのおもちゃを貢いでくれたり、電話をしょっちゅうかけてきたりとかする友だち付き合いはできないと覚悟した。

——そうよね、私ってすっごく、いやな性格してたのかも。

——もし、黄金時代が続いていたら、もっといやな子になってたかも。

例の二大悪口「ブス」「デブ」の洪水は浴びなかった。「ビール瓶」とのお言葉を水口くんから温かく頂戴した程度。自分の容貌がおかちめんこだとは彰子がよくわかっている。小さい頃から気づいていた。でも、それで辛いと思ったことなんてなかった。みんなが彰子のことをお姫様扱いしてくれたからなおさらだった。魔法のかかったまま、小学校を卒業し、初めて解けたのが青大附中だった、それだけのことだった。

なら、魔法のかからないままで、精一杯笑顔を振り撒いていこう。

今までの自分は魔法でげたを履かせてもらっていただけなんだもの。

その分、みんなが楽しくいられるように、気持ちいいことで補おう。

一年半、彰子はそれだけを考えていた。

うつらうつらしているうちに、隣のベットで騒いでいた女子の親が迎えに来たらしい。なにやら娘をしかりつけている。ヒステリックに悲鳴をあげる隣の影。

「だからあんた三年のくせにどうして！」

「だって、だって」

しばらく泣き崩れるものの、この場において置けないとわかっていたのか、母親らしき人の声で「ご迷惑をおかけしました。申しわけございません」と二回繰り返して、娘を引っ立てるように出て行った。

——すぐに迎えに来ることができる家の子だったんだ。

——うちのお母さんは今ごろ、手術かな？ 毎日手術のない午後はないって話してるもんね。

南雲くんの実験道具を押し付けて逃げ出してきたことって、やっぱり「逃げ」だったのだろうか。

隣のベットを整頓しているらしい保健の先生に、カーテンを開けて一声かけた。

「先生、保健日誌に私のこと書くんでしょ」

「そうだ、そうそう。奈良岡さん、熱を測らなくちゃね」

体温計をもらい、脇に挟んだ。たぶん平熱だとわかりきっている。右肩に手を置いて中世の騎士がポーズを取るような格好で上半身を起こした。

保健の先生はまだ若い。二十代後半で恋人ありとの噂あり。よく保健委員会の帰りに「先生の彼ってどんな感じ？」とからかったりすると、真っ赤にして、でも語ってしまう。明るい人だ。彰子もたまに、いわゆる一般論で「恋愛」について聞いてみたりする。自分と重ねる話題はなかったけれども、

「もし、彼、彼女が出来て困ったら、すぐに相談しなさいよ」

とされている。保健委員、男女問わずそれは何度も耳にしているはずだ。

「先生、いい？」

「あら、平熱ね」

「やっぱりそっか」

ため息をつく。すぐに気づいてくれたのか、薬を一袋取り出して水を用意してくれた。

「勉強のしすぎ？ それともストレス？」

「ストレス、かもしれないなあ。これでも結構落ち込むことあるんです」

さすがに「クラスの王子様に告白されて逃げ出した」なんて言うつもりはない。変に口にして、さらに話が膨らんでいったら大変なことになる。いい先生だとは思いうけれども、秘密を守ることはできそうにないだろう。この人は。

言われてもかまわないことだけ聞いたかった。

「先生、あのね、自分の顔とかを意識したのって、どのくらい？」

「え？ 顔？」

可愛い感じでソパージュに髪の毛を膨らませている。もちろん保健室にいる時は一つにまとめているけれども、帰り際見ると思いっきり解いているのを保健委員はみな知っている。「そうね、五年生くらいかなあ。その頃になると、顔というよりも身体が、みな変わってくるでしょ。だから身体検査の時に胸見たり、おなかが出てないか見たり、結構チェックしまくってたなあ」

「あの、うちの中学の身体検査で全然そういうの気にしなかった私って、やっぱり変ですか。体重だけはうちの母に怒られるのでちゃんとチェックするけど」

「ああそうか、奈良岡さんのお母さん、お医者さんなんだもんね」

げらげらふたりで笑い合う。

「奈良岡さんは天真爛漫だもんね、無理に意識したくないなら思わなければいいことであって、自然に任せるのが一番よ」

「そうかなあ」

天井の人魂ゆらめきをもう一度見上げた。こまこまと動き回っている先生に、もう一声かけた。

「先生、もうひとつだけ。私みたいに太ってて、不細工な顔って、いるだけでむかついちゃいますか？」

」 「なんで？」

「うっとおしいとか、そう思いませんか」

口に出していくと、本当の傷口がぱっくり開いてきて、泣けてきそうになる。南雲くんの「俺、本気だから」という言葉が全く耳に入らなかったのも、最初に染み込んだざわめきがあまりにも、濃かったから。

「そんなこと全然。誰がそんなこと言ったの」

「言われたわけじゃないけれど」

本当のことなんていえるわけがない。C組の女子が口にしていた言葉、

「見るだけでもいや」

南雲くんの元彼女と友だちだったから、慰めるために言っただけなのかもしれない。できればそう思いたい。それに誤解なのかもしれないと彰子がまだ受け入れてない。

どんなに笑顔でみんなに接しても、この顔、この体型だけは変えられない。

もちろん母の言う通り、甘いケーキをあきらめておせんべいだけにすれば、もう少し体重そのものも減るだろう。でも、整形でもしない限り変わらない自分の顔立ちを否定されたら、どうすればいいんだろう。

「奈良岡さんにそんなこと、真っ正面から言う奴いるの？ やだねえ、それって。そういう奴は無視よ、無視。見る目ないねって笑ってやればいいのよ。男子？ 二年生くらいの男子ってねえ、はっきり言って生意気だから、無視してけっと笑ってやればいいのよ」

——違う、男子じゃないよ。先生。

「女子は、どうなのかなあ、先生」

保健日誌に名前を書き込みながら、もう一度先生は顔を上げてじっと彰子を見つめ直した。「

女子？ はっきり言って自分に自信のない子ばかりだと思えばいいのよ。でも、そう言われるようなきっかけ、何かあったの？」

こればかりはいえない。彰子は首を軽く振って、にっこりと微笑んだ。

「ううん、なんでもありません。じゃあ、ちょっと患者さんの気持ち、感じて寝てていいですか」

薬はおなかのすく胃散だった。これなら副作用がない。おなか猛烈にすくだろうけれども、あとでこっそりおせんべいをくすねよう。

二十分くらいたった頃だろうか。

三年女子の大騒ぎが終わって、先生と語った後、ぼんやりとゆらめきを眺めていたときだった。

「せんせー、悪い、患者一人連れてきたわ」

聞き覚えのある、声変わりが完全に終わった奴。反射的に起き上がった。同年代でここまで声が野郎ものに出来上がった奴はそういない。

「もしや、その声は東堂くんかな」

先生が返事をする前に彰子はカーテンを開けた。二年D組の男子保健委員。彰子ともコンビをくんで二年連続。面食いなのが玉に瑕だがなかなか、話の分かる良い奴である。

「よ、奈良岡のねーさん、こんなところにいたんですかい」

「久しぶりに患者気分を味わいたかったのよ。あれ？」

軽い返事で受けようとしたが、次の瞬間固まった。東堂くんのがっちりした肩にもたれて、今にも死にそうな顔してうなだれているのが約一名。顔は半紙の白さそのまま。足を引きずっている。

「あらら、立村くん、どうしたの」

一種、保健室の常連化している、評議委員立村くんが運び込まれてきた。

ふわっと顔を上げて、彰子の顔をじっと見た。少し挑戦的なまなざしにも見えて戸惑った。

「実験してる最中にさ、いきなり椅子から滑り落ちて気を失ってやんの。いつもの貧血だろ、な、立村」

頷きながら、それでも足を引きずりつつ保健の先生に迎えられた。立村くんが夏にしょっちゅう貧血を起こして倒れているのは、周知の事実だし、最近クラスでもみな驚かなくなっていた。かならず誰かが立村くんを担いで連れ込むか介抱するかのどちらかだった。羽飛くんあたりがいつもそうだったのだけでも。保健の先生はまず、椅子に座らせて体温計を渡そうとしたが、気が変わったのか、

「あんたは平熱でも貧血起こすこと多いものね。足を高くして少し横になっていきなさいね」

すでに「あんた」扱い。立村くんがいかにも「保健室の常連化」しているかがよくわかる。彰子の隣に並んでいるベットに、横たわった気配がした。カーテン越しに映るのは、男子にしてはやたらと細い腕と首だった。影絵芝居を観ているようだった。

「給食はちゃんと食べたの？」「朝は具合悪くなかったの？」「風邪引いてない？」

先生の質問には答えているらしいが、彰子の耳には聞き取れなかった。東堂くんが帰ろうかど

うしようかと何度も保健室内を覗き込んでいる。授業をさぼりたいに違いない。起き上がってじっと見つめ返してやると、相手はにやっと笑った。

「ねーさん、教室に戻るか？」

当然のように声をかけてくるのは、東堂くんも彰子がずる休みしているとわかっているからだろう。ここで「やあよ」なんて答えたら、突っ込まれそうだ。どちらにせよ今日の放課後は保健委員会でまたいろいろな話し合いがあるのだから。

「しょうがないか、戻るね。でも立村くんも大変だね。夏苦手なんですよ」

本音を言わせてもらえれば、隣りに男子が、特に彰子的に苦手なタイプの立村くんが寝ているというのは、どうも落ち着けなかった。天井のゆらめきを眺めていたおかげで、たぶん大丈夫、そう思えてきた。

「奈良岡さん……」

声が、しつけ糸状態で切れ切れに聞こえる。立村くんの話し方はいつも語尾が消えそうだった。彰子や他の女子に話し掛ける時はいつもそうだった。彰子が返事をする前に、東堂くんが答えた。

「ほんと、今日は塩酸とかやばい薬の実験じゃなくてよかったぜ。ま、寝てろよ。あとで迎えに来てやるからさ」

「ありがとう、助かる」

電話が鳴り、先生が受話器を取っている様子だ。東堂くんは最後に彰子へ、

「しかし災難だなあ。ねーさんも。水口泣いてたぞ」

思うに、彰子とまともに話をしている男子はあまり、さっきの話を気にしていないということらしい。

——まあいっか。東堂くんはとりあえず、まともに話ができる人であるらしいしね。ああ、しょうがないっか。戻ろうっと。

隣の立村くんにも、もう一度声をかけた。カーテン越しなのもなんか悪くて、直接顔をのぞくことのできるのところまで戻った。すっかり汗びっしゅりで真っ白い顔。化粧しているんでないかと思うくらいだ。

「じゃあ、私は戻るから、早く元気になるんだよ。立村くん」

「あの、さ、奈良岡さん」

目がだんだんうつろいでいる。口元が半ば開き加減で、言葉を発している。なんだろう、早く離れたいのに。でも顔には出さず、彰子はかがみこんだ。手で招くしぐさをする立村くんは、片目で先生の様子をうかがった。まだ電話から離れられないようだ。やたらとお辞儀をしている。

「どうしたの？」

「さっきの、ことなただけどさ」

「さっき？」

立村くんの口から出た時はぴんとかかった。

「あの、南雲のことなただけど」

——なんで、立村くんがそんなこと言うわけ？

やはりばれているのだろう。立村くんにまで情報が流れているということは、教室に戻るやいなやひゅうひゅう攻撃は覚悟しなくてはならないということだ。思わずため息をついた。「あれは、あきよくんが悪いわけじゃないからね。これから、ゆっくりみんなに誤解を解いていかなくっちゃ。立村くん、あきよくんと仲いいでしょ。ごめんなさいと伝えてくれると嬉しいな」「そういうんじゃないってさ、あの」

テレビドラマの臨終シーンを思い浮かべるような、末期の言葉。そんな雰囲気。かなり大げさだけど、真面目に話している以上は無視できない。彰子はもう一度首をかしげて耳を澄ませた。まだ保健の先生が受話器を離していないのを確認し、半身起こしてもう一度、「南雲は、本気だよ。隣りで見ててそう感じた。けど、今戻ったらまだクラスの中、妙な感じになってるかもしれないんだ」

言っている意味がわからない。じっと聞く。黙りこむ。立村くんが咽奥であえぐように、必死に何かを伝えようとしているのだけがみしみしと、染みしてくるだけだった。

「だから、奈良岡さん、しばらく大変かもしれない。けど、俺がクラスの方はなんとかするから、とにかく南雲と、直接話した方がいい。大丈夫だから」

——クラスの方はなんとかするからって、立村くんが？

はっきり言うと、彰子には全く理解できない言葉の羅列だった。立村くんが真剣に、彰子へ何かを訴えているのは読み取れる。南雲くんと仲が良いということもあっていろいろ気を遣ってくれるのもわかる。しかし、なぜそこまで言おうとするのか。確かに、理科の実験が始まる直前に見た女子たち、男子たちの言葉には打ちのめされた。特にC組の女子が口にした「いるだけでいや」という言葉。自分をすべて否定された、そんな重みがあった。だから逃げ出してきた。南雲くんに押し付けて保健室に避難した。

でも、それは彰子の責任であり、決して誰のせいでもない。

彰子はただ、自分で覚悟を決める時間がほしかっただけだ。

南雲くんがどうして自分に「告白」めいたことをしたのか、それはわからない。

もしかしたら本気なのかもしれないし、もしかしたら別の事情があるのかもしれない。どちらにせよ彰子は南雲くんを「あきよくん」と呼ぶことに変わりないだろう。教室に戻るということは、南雲くんと改めて顔を合わせる事。もう一度、自分のどこがまずかったのか、どうしてほしいのか、話そうと決めていた。

なにも、立村くんが心配してくれることはないのだ。

どうしてそんなことまで気を回してくれるのだろう。いくら二年D組の評議委員だからといっても、少し干渉しすぎなのではないだろうか。もちろん立村くんが人一倍思いやりのある、やさしい子だというのはクラスメートとしてよくわかるつもりだ。男子たちが立村くんを、羽飛くんや南雲くんよりも支持しているのにはその辺にも理由があるのだろう。

どうしてもわからない。立村くんの言いたいことが、彰子にはわからない。

唯一、受け止められることだけ、お礼を言おう。

「ありがとうね。立村くん、やさしいんだね」

めまいがひどいのだろう。彰子の言葉が終わると同時に立村くんは目を閉じた。臨終です、と

言いそうなのりだった。いつのまにか後ろに保健の先生が立っていたのに気づいたらしい。

「ほら、立村くんなあに、奈良岡さんを口説いてるのよ。ほらほら、無理しないで。氷枕で頭を冷やさないよ。全く、思春期なんだから」

彰子に目配せで、「早く行った方がいいよ」と合図する先生。きっと先生も、立村くんのように気の回りすぎる男子は苦手なんだろう。好みのタイプはさっぱりきっぱりしたサーファータイプ、と話していたことを思い出し、彰子は笑いをこらえた。

天井の揺らめきは、ほのかに続いていた。

階段の踊り場で二回、もう一度二年D組のドアでラジオ体操形式の深呼吸を繰り返した。

——さあ、行くぞ！

こそっと隙間から顔を覗かせた。班ごとに机をつけたままだった。マグネシウムリボンのこげた匂いやアルコールランプ使用後の臭さがいっぱいだった。日常的理科実験室の匂いだろう。空気入れ替えしたいなあと誰もが思うだろう。

彰子に気づくや否や、一気に女子たち、男子たちがざわめきたった。もう戻ってきたのか？という疑問の雰囲気ではない。そこになにがあったかを探ろうとする、ねめっとしたべたつきを感じる。特に女子たちの視線は、友だちとは違う別のものを見つめているようだった。「奈良岡、具合よくなったか？ めずらしいなあ」

「ご心配おかけしました！ もう大丈夫です！」

わざと明るく答える。自分の席に戻り際にちらりと南雲くんを目を向けた。向けなくてもぴたっと合った。隣の席が空いたままなのは、立村くんがいないから。南雲くんは無言でじっと、彰子を見詰めていた。

「やだあ、見てるよ見てる」

「ったく、南雲もやるよなあ」

幸い、彰子に対しての「ブス」「デブ」攻撃は一切なかった。すでに終わった実験の後始末を彰子は引き受けた。後ろから水口くんが、泣きそうな顔で手を振っている。振り返ってあげるのはいつものこと。少なくとも彰子だけは、今までと同じに振舞ったつもりだった。羽飛くんが反対側の席から、機嫌悪そうに南雲くんを見つめているのにも気づいた。やはり相性が悪いんだろう。

授業が終りもう一度、おぼんにアルコールランプをを持っていった。たまたま隣り合わせになったのは羽飛くんだった。南雲くんと同じ視線を向けられるかと思ったが、違った。

「奈良岡、ひでえめにあつたな。ほんっと、災難だよな」

はっきりと、聞こえるように羽飛くんが言い切った。

「え？」

「やり方がきたねえよな、南雲もな」

——もしかして、気にしてくれてるのかな？

思わずときめいてしまったけれど、すぐに消えた。

「気のない相手をからかうなんて、男として最低だぜ。いいか、奈良岡、これ以上なにかされたら、俺たちが『紳士として』奴を許さないからな。めげんなよ」

「はとば、くん？」

じゃあな、と羽飛くんは勢い良く彰子の背中を叩いて、おぼんを運んで出て行った。たぶん背中に手跡がのこっているかもしれない。けど、ちっとも、痛くなかった。

あと一時間だけ授業が残っていた。六時間目は国語だったが視聴覚教室にて「明治文豪の歴史ビデオ」で時間がつぶれるはずだった。三階へ教科書だけ持って移動した。立村くんはまだ眠りつづけているらしかった。姿はなし。

「彰子ちゃん、彰子ちゃん」

周りに同じクラスの女子たちが集まってくる。やはり聞き出したかったのだろう。自分が反対の立場だったらきっとそうだろうと、彰子も思う。腹なんて立たない。ただ、羽飛くんが南雲くんへ見当違いの怒りを向けているようすが気になっているだけだ。

カセットレコーダーがセットされている机に、テープを押し込んで、彰子は振り返った。

「さっきびっくりしたでしょう」

「そうよね、彰子ちゃん、驚くよねいくらなんでも」

「おなか痛くなっちゃうよね」

口調はどこか慰めのニュアンスあり。やはり保健室に向かったのは、いろいろな誤解を招いてしまったのかもしれない。クラスの子たちがどのくらい本当のことを知っているのかはわからないけれど、少なくとも女子は彰子のことを嫌っていないらしかった。ほっとして彰子も口を開こうとした。

——みんな、ありがとう。心配してくれるなんていいクラスだよね。二年D組って。

「でさあ、彰子ちゃん。私思うんだけど」

突然声をひそめてひとりがかがみこんだ。周りの子たちをこいこいと集めた。

「ほら、南雲くんの前の彼女、C組にいるでしょ。あの子の友だちから聞いたんだけどね」

顔は見たことがある。髪の毛がショートで、目がまん丸で可愛い子だったっけ。

「南雲くんって、遊び人に見えて実はすごく家族思いなんだって」

それは前から知っている。おばあちゃんっ子らしいことも、向こうが良く話してくれていた。

「彰子ちゃん、知ってるんだあ。そうそう、おばあちゃんのことすごく大切にしてるんだって。でねえ」

廊下側に南雲くんたちが席を取っている。男子たちの群れもどことなく半分に色分けされているようすだ。遠くから水口くんがおろおろと、彰子へ手を振って合図しているが、無視するしかない。

さらに小さい声だった。みな耳を膨らませている様子。

「で、南雲くんのおばあちゃんって心臓が悪いらしいよね。知ってる？ 彰子ちゃん」

聞いたことがある。頷いた。

「だから、前から病気のことについて誰か詳しい人いないかなとか、話していたんだって」



——想像はつく。見た目よりもずっと、あきよくんはやさしい子だからね。

大きく頷いた。ゆっくりと、語る子ひとり、にやっと笑い、すぐに消した。

「私、彰子ちゃんのために言うんだけど、きっと南雲くんは、彰子ちゃんにおばあちゃんの病気とかそういうことを相談したくて、それで、告白した振りをしたんだと思うんだ。これ、C組の女子たちもさっき話してたんだ。だって、そうでなけりゃ、考えられないもん。彰子ちゃんになんで、いきなり南雲くんが変なこと言い出すのかって！」

頷くしかなかった。ばかにされたなんて思わなかった。ほんと、それが一番しっくりくる、考え方だった。そっと南雲くんのグループがたむろう廊下側席を見やると、じっと視線を向けてくるのがわかる。優しく受け止めて、返事をしたかった。

——あきよくん。きっと、そうだよな。

言葉の響きは確かに、「付き合ってください」だった。

もしそうだとしたら、彰子はどう答えていいのかわからなかった。

でも、もし、南雲くんのおばあちゃんに何かしてほしいからという理由が隠れているのならば

。

——私は、あきよくんと友だちでいられるはず。付き合うとかなんとかってことじゃない。

「そうよね、彰子ちゃんになら、正攻法で相談すればいいのにね。どうしていきなり告白なんてわざとらしいやり方するんだろうね。納得いかないよ。ね、彰子ちゃん。これは抗議すべきだよ。さっき羽飛もすい君も、他の男子も信じられないって顔してたもん。立村くんなんかいまだに貧血起こしてひっくり返ったままだもんね。ほんっと南雲くんって真面目でいい奴だと思ってたけどね。いくらなんでも彰子ちゃんに告白のまねなんてして、利用しようとするなんてねえ……」

女子たちの会話はまだ続いている。みな、勢いづいて南雲くんのことを誇っている。それに加わりたくはなかったから何度も、

「ううん、あきよくんは私を利用しようだなんて、絶対思っていないよ。でもそれならそれで私はかまわないもの」

と言い返したけれども。

「だって、そうでなかったらなんで南雲くんが彰子ちゃんに付き合いかけたのか、説明つかないもんね」

——やっぱり、そっか。そうだよな。

唇をかみ締めてじっと見つめる視線をほおに感じながら、彰子はうつむいた。

南雲くんとはあれから話をしなかった。視線だけの訴えだけだった。

向こうは掃除当番だったし、彰子はすぐに保健委員会に出かけなくてはならなかった。別に無視したわけではないけれども、泣きついてくる水口くんの面倒も見なくてはならなかった。非常に信じがたいことだが、水口くんもしばらく、「一緒に解剖してくれないかもしれない」と周りの男子に脅されたとかで、何度も「週刊メディカルイン」のバックナンバーを丸めて叩いてよこした。ご両親の読み終わった分だろう。

頭を撫でなだめているうちに、今度は立村くんが戻ってきた。

さすがに掃除はさぼったらまずいと思ったのだろう。だまってごみ箱を片手にぶら下げ、南雲くんへ廊下に出るよう声をかけているのが聞こえた。

保健委員会でも、帰り道でも、すれ違う女子たちみなに言われる言葉は、「彰子ちゃん、大変だったよね。でも大丈夫だよ。きっと何かの間違いだからさ」だった。

——そうだよ。きっとそうなんだよ。でもね。

男子たちだけが無言のままているのが意外だった。女子たちの態度の方がはるかにあっけらかんとしているのは、ふたりの間のストーリーが見え見えだったからだろう。

彰子に南雲くんが大真面目に告白したというのは本当のことだ。

嘘はないと分かっている。

でも「彰子ちゃんと付き合いたいイコール、彰子ちゃんのことを好きで好きでなんない」ということではないと思う。

他の子たちが言うように、

「きっと南雲くんは彰子ちゃんと、もっと真面目な話をしたかっただけだろう。付き合いたいというのはその場ののりに過ぎず、額面どおり受け取ったら今度は彰子ちゃんがもっと傷つくことになる。だから誤解を解いてあげなきゃ」

一番近いような気がする。

何よりも、南雲くんの祖母にあたる人が、循環器系の病気を持っているというのは、一年の頃から聞かされていたことだった。

——そうだよ、あきよくんのおばあちゃん、動くことはできるけれどもいつもベットに横になっているって聞いたよ。心臓だけじゃなくて、難聴、白内障、その他いろいろなところが悪くなっているって。だからあきよくんは学校帰りに、自転車でいろんな病院を回って薬もらっているんだって。偉いよね。でも、確かにそうだよなあ。おばあちゃんの病気の具合って、なかなか同い年の友だちに話してもあんたなに？って言われそうだよもんね。心配なんだよきっと。だから、私と。

一番納得いく答えだった。でもその陰に、髪の毛一本程度の違和感が残っていた。

——そうだよ。私のご面相じゃあ、ふつうそう思われるよね。

——二年D組の王子様だもんなあ。並んだら、私ってば護衛の人みたい。

自転車で家に戻り、誰もいない部屋でクラスの集合写真を開いて眺めた。

去年の遠足写真だった。みなブレザー制服姿でそれぞれ並んでいるけれども、一枚だけ羽飛くと隣り合ったものが真ん中に張られていた。趣味だ。もちろん他の男子女子も混じっているけれども、ささやかながらの主張。

——なんか私ってつりあい取れないなあ。わかってても。

別のアルバムを開くと、そちらには小学校六年の修学旅行写真がいっぱい並んでいた。台紙に八枚、キャビネット版で並んでいる。フィルムの重なる面積が少ないので、実質写真を保護する役割を果たしていない。ペろっとめくれたまま落ち着いた。

ナッキー、時也、その他の男子たちとそれぞれツーショットがたくさん並んでいる。女子もいるけれども、みな男子たちの表情は笑顔だった。肩を組んだりしているのもある。彰子はひたすらにここにこしている。クラスには美人さんもたくさんいたのに、どうしてみんな男子たちは彰子に懐いてくれたんだろう。

結論は見つからなかった。

彰子はもう一度、青大附中バージョンのアルバムをめくり、南雲くんの写真を探してみた。あまり気にしていなかったからどういう顔をしているか覚えていなかった。真ん中で人懐っこい笑顔を振り撒いていることには変わらないが、周りに映る女子たちがつんと澄ましているのが目立っていた。一緒にけらけらしているのは彰子くらいのもの。

いわば、小学校修学旅行バージョンの彰子と南雲くんが入れ替わったようなものだった。

こう言う時相談するのは、全く青大附中の内部事情を知らない友だちに限る。

さっそく三人に電話をかけてみることにした。

最近全然連絡を取っていないけれども大の仲良しばっかりだ。

父の担任している子は、いない。

話す内容はひとつだけだ。

「今日ね、クラスの仲良しの男子にね、付き合って欲しいって言われたんだ。ううん、きれいじゃない子だよ。すごくやさしくて思いやりのある子。見た目は『パール・シティー』のボーカルに似ているんだけど、家族思いなんだって。嫌いじゃないんだけど、ただ、付き合うとか付き合わないとか、そういうことをその子相手に一度も考えたことないのよね。どうしよう。どうやって、返事すればいいと思う？ 断って友達付き合いできなくなるのはいやだよ。仲良しでやっぱりいたいもん」

やはり女子同士が一番相談しやすいと思う。

三人とも電話で捕まった。塾に行く直前だということで、ゆっくりと説明はできなかったけれども、三人それぞれが素直な感想を述べてくれた。

——彰子ちゃんは小学校の頃からももてだだったからねえ。やっぱり青大附中でベタぼれされ

るのは時間の問題だと思ってたよ。今度その彼の写真見せてよ。「パール・シティー」のボーカル似？ すごく美形じゃない！ いいなあー、彰子ちゃん、絶対それOKしなよ。

——奈良岡さんは真面目な人だから悩んでるんだね。私だったらあっさり付き合ってみちゃうけどなあ。きっと相手も深い意味もって付き合ってるわけじゃないと思うよ。もともと友だちだったんでしょ。今、そう思えなくても、一応彼氏彼女になってみれば、ね。ああ、でもいいなあ。「パール・シティー」かあ。超かっこよすぎ。

——私思うんだけど、人は顔で決めるもんじゃないと思うんだ。もし「パール・シティー」似の彼が本気で彰子のことを好きだったら、外見なんて気にしないでアタックしちゃうと思うよ。でも彰子はまだいまいちなんでしょ？ っていうか、夏木のことどうするのよ。夏木、今だに「花散里の君ファン倶楽部会長」やってるよ。好きでないなら断る、好きだったら付き合う、これだけでいいじゃない。ただし、付き合うんだったら夏木の怒りは覚悟すべきね。以上！

好きになってもらえる要素はある、ってことだろうか。気づいてはっと赤くなる。ひとりで戸惑う。

——やだなあ、やっぱり私って性格が悪いなあ。

——あきよくんが好きになってもらえるようないいところがあるって、無意識のうちに信じ込んでたんだもんなあ。D組のみんなが言うとおりあきよくんはただの友だちとして、「付き合い」たいてことだと、理屈ではわかってるんだけど。でも、他の子たちの言うとおりに、私のことを好きだってことになるんだったら……ちょっと嬉しいって感じてたりする。

——自分のことを認めて欲しいなんて、ああ、なんかいじましいなあ。私。

もし、告白してきたのが羽飛くんだったらどうしてただろう。改めて考えてみる。ただ素直に、ありがとうと言えただろう。なのになぜ南雲くんなのだろうか。全く、恋愛の対象外として扱ってきた男子が、いきなり豹変して想いを告げるというのは。OKしていいのか悪いのか、それ以前に自分は羽飛くん以上に南雲くんのことを好きになれるのか。いやいやまだいうなら南雲くんは本当に彰子のことを好きだと想っているのか。周りの意見を聞けば聞くほどわからなくなってきた。

彰子の本音は「今までどおり、消しゴム忘れたらあげちゃうくらいの仲良し」でいるだけでいい。

でも南雲くんは、「友だちだなんて思ってねえよ！」と断言した。彰子の求める甘ったるいぬるま湯づきあいでは満足できないということだろう。あくまでも、南雲くんの言葉を百パーセント信じれば。

夕焼け空が黒っぽくなるまでずっと、ベットの上で膝を抱えていた。シーツカバーがずれて落ちていた。そろそろ父に料理を作ってあげよう。時期が早いけれども、この前送られてきた海草

入りそばをゆでてあげよう。解剖が必要な料理は、今の自分だと指まで切っただけで危険だから。

彰子は部屋から下りてなべにたっぷりと水を汲んだ。時刻は夜五時半をさしている。

電話が鳴った。父からだった。

「彰子さん、悪いが今日は遅くなるからな。食事は用意しなくていいよ」

手短に切れた。急いでいるようだった。父の背後から気配がなかったところを見ると、たぶん中学校の職員室からだろう。この時間帯でまだ動けないというのはきっと部活かなにかの付き合いだろうか。いつものことだしあまり詳しく聞かなかった。二人分ゆでるまえで良かった。少し減らし、扇形にそばを散らした。きもちよくなべに納まっていく。ちょっと早いけどさっさと食べよう。

と、同時だった。呼び出し音が続いた。

「はい、奈良岡です」

ガスの火を見ながら出る。ごほんとか、またすすり上げる声。じゅるじゅる言っている。

「あの、俺」

「時也？ あれ、どうしたん？」

鼻水の音だけで判断してしまう自分も自分だけど、ある種、時也のトレードマーク化しているのもまた確か。電話で判断する限り、薬が効いているとは思えない。咽にたんを詰まらせた風な声が出た。

「奈良岡、今、お前、ひとりか」

「うん。ちょっと待ってね」

まずは火を止めた。そばが伸びるかもしれないけれどしかたない。

「今、そばゆでてたんだ。でももう火止めたから大丈夫」

「今、塾」

そうだった。あのどふりふりお母さんの命で、時也は一年の頃から塾に通わされているのだ。

「あれ、じゃあ今、あんた授業中なんじゃないの？ まずいよ」

「まずくない。今から電話たくさん鳴らす」

「は？」

言う意味がわからず問い返す。

「奈良岡のうち、留守伝入ってるか」

「入ってるよ。もちろん、けど」

時也はもう一度咳をした後、こつんと告げた。

「じゃあ、今から五回電話鳴るが、絶対に出るな。留守電かけたままだ。わかったか」

偉そうな口調はくせなのだ。思わずほころぶ。

「はいはい、わかりました。何か、たくらんでるのかなあ」

答えず切れた。腑に落ちない点はあるけれども、ナッキーならともかく時也がそれほど深いこ

とを考えているとは思えない。すぐに留守伝ボタンを押した。赤いランプがてかてか光った。

三十秒後、鳴りつづけた。本能でとってしまいたくなるのをこらえ、彰子はそばをゆで直していた。幸いのびてはいない。水にさらして美味しくいただけそうだ。実は二人分、自分のためにこしらえている。母にばれたらまた怒られるかもしれないけれど、今日はなんとなくやけ食いたい気分でもある。

呼び出し音を五回鳴らして誰も出なかったら自動的に留守番電話が作動する。後片付けが終わるころには五回目の電話も終り、留守電の入っている合図のランプが黄色に変わった。

——いたずらだったら、あとで時也に文句を言おうっと。

自動再生ボタンを押した。特製そばつゆをおちょこに移しながら利いていた。瞬間、手が震えてほんの少し、こぼれた。

——時也、みんな……。

頭の中が、すうっとしてきた。回りがぼやけてきた。

——あの、名倉です。今から奈良岡への伝言を、ここにいる男子一同から録音するから、ちゃんと、聞く、こと。

受話器を置く音。連続再生。

——あ、もしもし奈良岡さん？ お久しぶりっす。いろいろ大変みたいだけど、がんばれ。じゃあ。

——もっしー、彰子かあ。青大附中のバカ野郎どもにいろいろ苦労しているようだが、もしなんかあったら俺たちに言えよ。ナッキーだけじゃねえってこと、覚えとけよ。

——彰子ねーさん、こんちは。相変わらず俺たちもやっています。もしなんだったら俺たちとダブルデートって手もあるぜ。やばい相手はきっちりと俺たちがチェックしてやるからな。じゃあ。

三人の声は、聞くだけでわかる。小学校時代いっしょのクラスだった男子たちだった。いつも、消しゴムや給食の揚げパンやプリンをくれた子だった。中には彰子が仲を取り持ってカップルになった子もいた。

最後に締めた声は、時也だった。

——以上。聞き終わったらすぐに消すこと。先生に見つからないようにすること。いいな。

そばが伸びてしまう。そんなのかまわなかった。何度もマイクロテープを巻き戻し、時也たちの声を聴いた。後ろからは「おーっす！」とか「授業はじまるよ」とか、大人の声が聞こえたから、たぶん時也の通っている塾からかけてきたものだとは思った。でも、みんなが十円を握り締めて、たぶん赤電話からかけてきている。彰子の家に、一声録音するためにだけ、かけてきてくれている。どうしてなのかは、わからない。でも、時也がまとめて声をかけてくれたことだけは、確かだと思った。

——時也、ありがとうね。私みたいな思い上がった子と友だちでいてくれるなんて、すごいことだよ。みんな、ありがとう。

自分の性格がすごぶる悪いことを思い知らされていた時、あまりにもタイムリーだった。みんなが味方でいてくれたこと。どうして、時也がそんなことしてくれたのかわからないけれど、彰子はただ「みんながいい人ばかり」だと思い続けることができそうだった。

——そうだよ、みんな、私の身の回りの子はいい奴ばかりなんだもん。

そばをすすり上げながら食べた。たれを付けなくても美味しかった。留守電テープを消さずに、また繰り返し聞いて、泣いた。

約束どおり留守電を消した後、彰子は母からの電話を受けたりなんなりしながら後片付けをしていた。水の音といっしょに、自分のことばと答えが出た。

——あきよくんには、ちゃんと、友だちでいようって伝えよう。

——もちろん、おばあちゃんの循環器系のことが心配だったら、いつでも相談に乗るからって。

——まだ私は、あきよくんのことを好きだって、言えないもん。「付き合いたい」って言うくらい、言えないから。

——あきよくんが利用しようだなんてそんなこと思ってないよ。みんな他の子たちは、私のご面相が不細工だから、心配してくれたけれど、きっとあきよくんなりの真実で、私に声をかけてきたんだって、私は信じる。だから精一杯、きっちりと答えなくっちゃ。そして、ありがとうって言わなくっちゃ。

父が帰って来たのは十時過ぎだった。彰子が部屋に上がっている時にいきなり電話がかかってきた。ナッキーのお母さんからだった。

「彰子ちゃん、先生はいらっしゃいますか？」

恐る恐るという雰囲気。本当はナッキーとも話をしたかったけれども、言葉の端々にまずいものが混じっている様子だった。すぐに父へ渡した。父も無言で受け取り、何度か短い言葉で受け答えしていた。笑みはない。

「……はい、宗くんとは明日、ゆっくりと話をさせていただきます。はい、はい、はい。私の不行き届きで申しわけありません。この件についてはまた、ゆっくりと」

ふだんは「ナッキー」と呼ぶのに、なぜ「宗くん」なのか。

電話を切り終わった後、彰子は尋ねた。

「ねえお父さん、どうしたの。ナッキーになんかあったの？」

父は無言だった。彰子をじっと見つめると、おもむろに、

「彰子さん、いいかい」

ひよわそうな父の言葉ではない静かな響きだった。彰子も頷いた。テーブルについた。

「たぶんこれから、宗くんの周りが騒々しくなるだろう。周りの友だちも、あの子のことを悪く言う子が増えるだろう。でもな、彰子さん」

「何があったの。お父さん」

首を振って、父はゆっくりと言葉を継いだ。

「外見や、目に見えるものや、そんなものだけで判断してはいけないよ。お前はあの子のいいと

ころをみんな知っているから、それだけを信じてやってほしい。これから何を言われてもな」  
「だから、具体的になにがあったのかわからないと。今からナッキーに電話してみるのもだめ？」

首を小さく振り、観念したかのように父は口を開いた。

「一週間の自宅謹慎だ。クラスの女子に手を挙げてしまい怪我させてしまったんだ」

——ちょ、ちょっと！ ナッキーが？ なんでなんでなんで！

さっき電話した時誰もそんな話してくれなかった。時也も、誰も。

口を数回動かした。言葉がなかなか出てこない。

「ナッキーは理由のない暴力なんてやらかさないよ！ お父さん。知ってるよね。父さんのクラスでナッキーが時也をかばっているってこと。私もわかんないけど、クラス大変なんですよ。父さんはナッキーのこと知ってるですよ。先生になる前に、ナッキーの性格知ってるですよ。ね、お願いだから教えてよ」

父は沈黙したままだった。ただ彰子を見つめて、頷いた。

「父さん、言わないんだったら、私が聞くよ。ナッキーがどうするのかわかんないけど、理由がわかんないんだったら、私だってかばいようないよ！」

止めなかったのはきっと、父からのOKが出たということだろう。彰子は小学校時代の友だちでかつ、仲の良かった女の子にもう一度電話をかけた。

「あ、彰子、『パール・シティー』の彼とはどうするつもり？」

「そんなのどうでもいいから、ナッキーのこと、分かっていることだけでいいから教えてよ。お父さんも話してくれないの」

「なら先生、いるんだよね」

「いるよ」

友だちもやはり沈黙していた。彰子の背から父の気配が消えた。自分の書斎に戻ったのだろう。ふたりで話せてことだろう。

「ううん、でも父さんいなくなった」

ほっとした吐息が聞こえる。彰子は友だちの言葉が返ってくるのを待った。

「誰がいいか悪いかなんて、わかんないからね」

頷いた。友だちに一人でしゃべらせておいた。相槌打つととめどがなくなってしまいそうだから。だってナッキーのことなんだから。

——相変わらず夏木が名倉のことをかばっているのは彰子も知ってるよね。たまたまその時に、夏木がかっとなってその女子をひっぱたいたのよ。でも、まあねえ。そのひっぱたき方が本気だったんだ。拍子に頭を教壇にぶつけて、血が出てしまって。その子のお母さんが文句をいいに教室に飛び込んできて、なら先生に食ってかかるんだ。その時、まずかったなあと思うんだけど、そのお母さんがね、夏木のお父さんのことについてきついこと言っちゃったんだよね。完全に夏木がぶっちぎれてしまって、手に負えなくなっちゃって、あやうくそのお母さんに殴りか



かりそうになったんだ。

——夏木の父さん、なんとかっていう右か左かの政治結社っていうところに入ってるでしょ。でほとんど、家にも顔出さないでしょ。みんな知ってるけど、これは暗黙のお約束ってことで内緒にしてるでしょ。でもそれを一気に、お母さんがまくし立てちゃったもんだから、もう騒然。あれは名倉をかばったんじゃないかと、夏木のプライドそのものの問題だったんじゃないかって思うんだ。今の夏木は怖くて近寄りたくないっていうのもわかるよ。

彰子は受話器を置いた。

父が話さないのも当然だと思った。

小さい頃からナッキーが彰子の家に入り浸っていたのも、中学入学の時にあえて父が、自分のクラスに入れてもらうよう頼んだらしいということも知っている。ナッキーの家が、彰子の知る限りかなりややこしい状態だということも。もちろん、政治結社関係の問題でしょっちゅう警察のお世話になっているらしいことも。

——ナッキーは、ナッキーだよ。私はナッキーの味方だよ。

「お父さん、自宅謹慎って、別に私が遊びに行く分には問題ないんだよね」

階段の下から声を張り上げた。返事をもらいに階段を昇った。

「あした、ナッキーのうち行くなら、私も一緒に連れてって。五時間で授業終わるんだもん。大丈夫、よけいなことなんて言わないから。いいでしょ。お父さん」

ドアを開けて、父は彰子の頭を軽く撫でた。

ケーキにするか、それともクッキーにするか。母が帰ってくる十時くらいまで彰子は迷っていた。ナッキーの場合、味がどうであろうと「食えればオッケー」だと言っているから、特別に気を遣う必要はないのかもしれない。でもできれば、好みに合ったほうがいいではないか。結局、母に相談して、

「クッキーの方がたぶん、みんなで分けて食べられるからいいんでないか」

という結論に達した。夜中二時過ぎまで、たっぷりバターのきいたクッキー生地をこしらえ、冷蔵庫に入れた。学校に行く前に焼いておけばいい。

家の中が香ばしいクッキーの匂いに満たされている。食事を焼きたてのクッキー六枚で終わらせたのは、とにかく後片付けが大変だったから。ラッピングして、家に戻ったらすぐ出発できるように準備を整えた。

昨日は本当にいろいろなことがあった。

南雲くんには告白らしきものをされてしまうし、時也はなぜか心配してくれて男子たちから愛のメッセージを送ってくれたし、ナッキーにいたっては、まさかの自宅謹慎。

ずっと悩んでいたことばかりだったけれども、彰子にとっては最後の「ナッキー自宅謹慎事件」で一気に最重要課題が現われてしまったという感じだった。正直なところ、南雲くんがらみで女子たちにささやかれたことなんて、どうでもよかった。

——あきよくんとはいい友達でいましょう、でいいよね。

——なんか、ナッキーのことを考えると、私のちょこっとしたことなんて、どうでもいいなって気になっちゃうな。ナッキー、どうしてだろう。時也が電話くれたのは、その辺りにも事情があったのかもなあ。

学校に到着した。鈍感だと自覚している彰子だが、なんとなく三年生方面からの視線が突き刺さってきた。いつもだったら「おはようございます！」と挨拶する程度なのだけど、いきなり向こうから、

「ねえ、南雲くんと付き合ってるの」

と聞かれるとは思わなかった。

「いえ、あの」

もごもごと言葉を探すと、

「あ、ごめんね、そうだよねそうだよね、違うよね」

と自己完結して去ってってしまう。彰子の場合、あまりいやがらせとかリンチとか、そういう恐ろしいこととは縁がないらしい。

南雲くんが全学年の人気を博していることは、よくわかった。

まずは保健室に向かい、先生に挨拶した。ちょうどソパージュをまとめているところだった。鏡に向かっていたのだが、彰子が映ったのだろう。すぐに振り向いて、

「奈良岡さん、早いねえ」

「昨日はどうもありがとうございます！」

ちょっと多めに焼いておいたクッキーを手渡した。

「先生こっそり、後で食べてね」

「サンキュー！ 奈良岡さん家庭的なんだよねえ」

ちらっと見た後、彰子を手招きして耳にささやいた。

「なんかねえ、昨日、三年の女子たちがパニックになっていた理由なんだけど、聞いてあきれちゃったよ」

「パニックなんてあったんですか？」

彰子個人としては結構いろいろあったけれども、他学年まではわからない。

「二年で人気のある男子がいるらしいんだけど、だれかに付き合いをかけてしまったことがすぐにばれて、ファンの子たちがショックを受けてしまったらしいのよ。なあにが、ねえ。奈良岡さん。クラスの男子たち見てて、そんな心ときめく奴いる？」

一年女子の間では羽飛くんが圧倒的人気らしいけれども、そうか、三年は南雲くんなのか。彰子はさすがに言えなかった。

「よくわからないけど、大変だったんだあ」

「歳を取ればわかるのよ。男は顔じゃない、ハートだってね」

先生もそれなりに恋しているんだろう。重みあるお言葉だった。

廊下途中まではクッキーと一緒にハイテンションで軽やかに歩いた。でもさすがに、二年D組の教室へたどり着いた時には妙にフラッシュバックしてしまいそうになった。D組よりも、隣のC組だろうか。やはり聞こえてくる。もともとC組は女子たちの力が強くて、男子たちがおとなしい。教室の前を通るたび、ざわめくのは甲高い嬌声だ。

「……がねえ、あの太った子」

「……絶対なんかの間違いだよね」

相変わらずの言葉が飛び交っている。傷つかないわけじゃない。いつもボタンがはちきれそうになるジャケットを、そろそろ買い替えないとまずいなと思う。

——ま、いっか。あんまり暗い顔してると、あきよくんだって辛いもんね。

気持ちを切り替えて、扉を開けた。

「おはよう！ あれ、すい君いたの」

ちょうど待ってましたとばかりに水口くんが立ち上がった。男子たちの集団はほとんど揃っていた。もちろん南雲くんもこちらを向いた。女子たちだけがそれぞれに、

「彰子ちゃんおはよ！」

と、いつものような声をかけてくれた。答えようとしたら、いきなり水口くんが飛びついてきた。まさに赤ちゃんそのものののりだ。

「ねーさんねーさん、学校やめないよね」

——なぜ、すい君そこまで発想が飛ぶわけ？

頭を撫でながら彰子は答えた。

「やめないよ。でもどうして？」

「よかったあ、それならいいんだ」

ぴょんぴょん飛び回って喜ぶすい君を誰もからかう奴はいない。いつのまにか近づいてきていた立村くんが水口くんの肩を叩いて、

「さ、すい君席に戻ろうな」

と促している程度だった。男子たちも、またやってるかとはばかりにちらりと見るだけだった。南雲くんだけが黙って彰子を見つめているのが分かる。同じく隣の席に付いた立村くんが、朝自習のプリントを開いて何か尋ねている。どうやら、数学の文章題が載っているらしい。

朝ぴっかりの天気は昼間過ぎると一気に下り坂とはよく言ったもの。授業が終わる頃には雷が轟きしばらく外は黒い雲に覆われていた。傘は持ってきているけれども、きっと折れてしまいそうだった。

「しゃあねえなあ、雨宿りしてっか」

帰りのホームルームが終り、それぞれが教室を出るのを見計らって、彰子は声をかけた。南雲くんがまだ、無言で座り込んでいる。いつもだったら男子同士の仲のいい連中と、レコードを片手にまだしゃべっているのだろう。たぶん、昨日のことでからかわれたかなんかしたのだろう。表立っての悪口やひがみは聞かされてないけれども、それは彰子が二年D組にこもっていたからだ。元の彼女がいるC組からも鬨聲は買い捲っているだろうし、もっというなら三年生グループもかなり、衝撃を受けているはずだ。告白された彰子よりも風当たりが強いのは想像がつく。

——でも、きちんと言わないと。

——あきよくんとは友だちですらもいられなくなるからなあ。

まだ教室には何人か男子がたむろっている。

「あきよくん、ちょっといい？」

改めて、でも笑顔は忘れないように彰子は顔を覗き込んだ。

「奈良岡、さん。俺、さ」

「いいから、ちょっと隅っこに来てください」

お願いする時はきちんと敬語を使うこと、彰子のお約束だ。

窓辺の隅に立ち、彰子はもう一度南雲くんの顔を見上げた。こうしてみると、結構背が高いらしい。羽飛くんと同じくらいだ。「パール・シティー」のボーカルよりはもちろん低いだろうけれども、背景の黒い雲を通して見ると、いかにも舞台受けしそうな雰囲気だ。ネクタイはきちんと結んでいる。髪型も今日はきっちりまとまっている。ちっとも、だらしなくない。

「あきよくん、あのね。私」

ここで息を継いだ。今まで視線をきちんと向けていなかったから、その分たっぷり見つめ返そうと決めていた。

「昨日のこと、私はすごくうれしかったよ」

「え、じゃあ、いいの？」

いきなり緊張していた表情が笑顔に変わる。まあまあ押さえてと彰子は首を振った。

「でも、今の私はまだ、あきよくんを友だちとしか思ってないんだ。なんていうか、私は男子と『付き合う』ってこと、一度もしたことがないんだ。だからなおさらなのかな」

「でも今は、好きな奴いないんだろ？」

だんだん彰子もわからなくなってくる。ちらっと、羽飛くんの顔が浮かんで消えた。好きってわけではないのだと、思い直す。

「小学校時代の子で大の仲良しってというのはたくさんいるんだよ。でも、まだそういう気持ちになれないんだ。あきよくんがしてほしいような付き合いって、私、赤ちゃんだからわかんないんだらうなあ。身体と頭がつりあっていない典型的な例かもね」

ちょっと自虐的なことを言ってみる。

「そんなことねえよ。あのさ、奈良岡さん、俺のこと、嫌いじゃないんだよな。それだけはほんとだよな。あの、驚かせてしまったのは本当にごめん、って感じなんだけど」

妙に力がこもっている。身体を斜めに傾け両手を握りしめている。

彰子の中で、周りの女子たちの言葉を信じなくてもいいという実感が湧いた。大丈夫。この子とは友だちでいられる。よかった。

「そうだよ。私はあきよくんのこと、友だちとして大好きだよ。もし、あきよくんがクラスの中で問題起こして自宅謹慎になったとしたら、すぐにクッキー持って駆けつけるし、電話であきよくんのファンの子たち集めて、電話で励ましの声を送ってあげる。そういう感じで、本当にあきよくんはいい子だと思うんだ。でも、まだ『付き合う』っていうのがね、ぴんとこない」

外の雨は激しい。窓ガラスをぬらしている。南雲くんはじっと彰子を見つめていた。言葉が返ってこない。

「きっとあきよくんには、私よりももっと可愛くて美人さんがたくさん好きでいると思うんだ。私なんかと付き合うとしたら、きっと大変だよ。並んでつりあい取れないし。私はこの顔と十四年間お付き合いしてるから、ま、いっかと思ってるけど、あきよくんに迷惑をかけてしまうのはなんかやだなあ。だから、友だち ということで、いかがでしょうか」

後ろの方で二年D組の男子たちが、様子をうかがっている。ふたりっきりのところで言えばよかったと思う。言い方は悪いけれども彰子が南雲くんを振ったという形にはなるのだから。

「奈良岡さん、俺の言いたいこと、言っていないか」

笑顔になったり驚いたり、ありとあらゆる感情が顔の中を駆け抜けていた。彰子はそれを眺めていた。やはり、こういう気持ちいい表情にみんな女子たちは惹かれているのだろう。

「いいよ」

「奈良岡さん、ぶっちゃけた話、『付き合った』経験、ないんだろ？」

は？と口をあぐりあけてしまった。

「ない、けど。だってこのご面相じゃあねえ」

「デートしたことも、手つないだことも、ないんだろ」

「あるわけじゃない！ もう、あきよくんやだなあ。想像するだけでも大笑いだよ」

手つなぎ鬼をやるならともかく、俗に言うデートなんて経験なしだ。少女漫画に出てくるような、夕焼けに向かってキスだとか、そういうのを言うんだろうか。誰もいなかったら腹抱えて笑い転げたいところだ。

「キスしたことも、ないんだろ」

口呼吸はよくないと分かっているけど、彰子は完全に凍りついた。

口で呼吸するしかない。

「あきよくん、あるの」

「うん、経験はあるよ」

——大人すぎる。うわあ、なんかすごいこと言わせちゃったよ。

あやうく「ねえ、どうだったどうだった？」と聞いてしまいそうなのをがまんした。残っている男子たちも同じく凍り付いているらしい。キス経験者、零だろう。きっと。

「うわあ、すごい」

「だから、俺は付き合っているってことのだいたいどんなものかはわかってるつもりなんだ。もちろん、いきなりなんて俺は言わないよ。でも、一度も付き合ったことないんだったら、一度くらい、真面目にそういうことしてみるのもいいと思わないか？」

「いや、あの、キスはちょっと」

「それは例えだって」

笑い転げたいのを彰子は必死にがまんした。そりゃあ、南雲くんは恋愛経験豊富だから、唇を触れ合わせることの一度や二度はあるだろうし、別にそれがどうとは言わない。だが、相手が自分だと想像するだけで、ほとんどギャク漫画の一コマにしか見えない。

「あきよくん、ごめん、もう限界。笑い死にそう」

しゃがみこむとしばらく彰子は笑いつづけていた。困ったように見下ろしている南雲くんには悪いと思う。でも、どうしようもない。しばらく落ち着いたところで立ち上がり、もう一度答えることにした。

「あきよくん、本当に好きな子にそういうのは言ってあげなよ。私がそんなことしているなんて想像するだに笑えるじゃない」

「なにもいきなり、キスだなんて言わないけど。でも、もし俺のことが嫌いじゃなくて、付き合ったことなく、今好きな奴いないんだったら、一度試してみませんか」

「試す？」

「そう。奈良岡さんが『友だち』としてっていうのがよかったらもちろんそれに合わせる。とにかく一度、デート申し込んでいいっすか」

空気が湿ってくる。彰子は見竦められた。

「デートって、いったい」

「今度の土曜午後、青潟こども公園でどうでしょう」

また嘔き出しそうになった。小学校三年生くらいの子しか喜びそうにないティーカップとか、あつという間に終わるジェットコースターとか、そういうのしかない。南雲くんだったらもっと

、大人っぽいライブハウスだとかそういうところに連れていかれそうだと思うけれども、さすがデートなれしている。彰子の大丈夫そうなところを瞬時に選び取ったらしい。「あきよくん、うまいね。私の受けそうなところ選んだでしょ」

——これだけ一生懸命言ってくれてるんだから、ね。友だちなんだから。みんな誘って楽しく行きたいなあ。

顔に出たのを素早く読み取ったに違いない。南雲くんは最後に付け加えた。

「でさ、デートっていうのは基本として、一対一なんだ。それだけ、お忘れなく！」

「別に、それでもかまわないけど、淋しくない？」

とんでもないとばかりに手を大きくふる南雲くん。彰子の見る限り、すっかりご機嫌は元に戻ったようすだ。それだけが心配だった。数人の男子たちが沈黙で見送る中、

「じゃあ、詳しくはまたあらためて！ これから規律委員会あるんだ。最高っすよ。もう」

最後に他の男子連中へ「じゃあな」と言い残し、教室を飛び出していった。

「奈良岡のねーさん、あのなあ」

最初から最後まですべて目撃していた、男子のひとりが近づいてきた。なんとなく南雲くんグループの一派だった。二年D組の男子は大雑把に三グループに分かれていて、羽飛くん、南雲くん、あと水口くんを中心とする派が並んでいる。ドライヤーで髪が枝毛っぽくなっているところみると、どうみても南雲くん派だ。にやにやしなながら寄ってきた。

「ああ言ってるけど、南雲って結構まじな奴だぜ。あれでも次期規律委員長だもの」

「え、そうだったっけ？」

初耳だった。相手も当然のごとく頷いた。

「うちのクラスで委員長がふたり立つってのも笑えるけどさ、でもいいんじゃないの」

「困ったねえ、あきよくんどうするんだろう。委員長になったらもうおしゃれできなくなちゃうよ」

「ねーさんさあ」

頭をかきながら大笑いした後、男子三人は手を振って言い残した。

「人間は見た目じゃねえから、そのへんよろしくな」

——なんか私のこと、誉めてくれてるのかなあ。

本当はお付き合いを断るつもりだったのに。なんか負けてしまった。

こんな気持ちよく笑ってしまえるなんて思わなかった。

つきあうかどうかは別として、今週の土曜日は彰子にとって初めての「デート」になりそうだった。

——だからみんなで行けばいいのになあ。あきよくん。

彰子はすばやく頭を切り替えて、校門へ急いだ。駆け出した。外はすでに黒真珠色。雷が鳴り響いている。でも帰らなくちゃ。南雲くんと話している間は忘れていたけれど、もっともっと大切なことが待っている。

——ナッキー、ごめん。今行くからね！

びしょぬれで家に帰り、髪を乾かした後、大急ぎで冷蔵庫からクッキーの残り生地を取り出した。焼きためたものは缶に入っているけれども、やはり焼きたての方が美味しいだろう。すばやくオーブンに油を引いて準備をし、火が入っている間にラッピングの準備をする。母のお気に入りブランドで配っている花柄の包み紙を拝借し、口が花びらのように見えるべくぎざぎざに切る。焼き上がるころには完全にお誕生日モードのプレゼントが完成した。

母は昼から学会があるとかで、出かけていった。半分クッキーがなくなっていたところみると、他の先生や事務室のみなさまに配るのだろう。

しかし、全く電話は鳴らなかった。

父にもしつこく「絶対行く時は電話してね」と釘をさしておいたのに。

あいまいに頷いていたから忘れてしまったのかもしれない。

それとも会議か何かで忙しいのかもしれない。とにかく彰子は待つことにした。ちゃんと制服を干して、カレンダーの「土曜」に丸を付けた。

待てども暮らせど連絡は来ない。

待ちくたびれて新聞を読んだり、テレビを見たりしているうちにソファで軽く居眠りしてしまったみたいだ。気が付くと、電話が鳴っていた。赤ランプが点滅していた。

「彰子さんか？」

やっぱり父だった。忘れていなかったらしい。

「お父さん？」

電話の向こうがやけに騒がしい。女の子が泣き叫んでいる声はたぶん、ナッキーの妹だろう。修羅場なのかもしれない。様子を聞きたかった。

「私、行くけど大丈夫？」

「今から時也が迎えにいつてくれると言ってる」

「ちょっと、時也もいるの？ で、ナッキーは？」

父はしばらく無言でいたが、口の中をちかちか鳴らして言った。

「彰子さんに、聞きたいことがあるんだそうだ」

がしゃっと受話器が千切れそうな音。耳が痛くなりそう。だれかが受話器を取り合っているのかもしれない。耳に当てたまま待った。はう、はう、息遣いが荒い。

「おい、彰子いるんだろ？」

「ナッキーじゃない！」

あれだけ心配させたくせに、声が明るすぎる。クッキーの匂いに包まれて思わず涙が出そうになる。いつも通りのナッキーだ。自宅謹慎なんてへとも思っていない、正義感強いあのナッキーだ。

「とにかく、すぐ来い！ 俺もお前が戻ってくる前にけりをつけるからな」

「けり？」



電話の向こうが父に代わった。何度かナッキーの「なら先生、わかった。うん」と話し掛ける声だけが聞こえている。

「詳しいことはついてから話すよ。それと時也の分のクッキーも、忘れるなよ」  
もちろん忘れてはいけない。彰子は受話器を置いた後、大至急包み紙をそろえた。

時也が到着したのは十五分後だった。自転車が雨のために使えないというのを考えると、そのくらいかかるだろう。急いででてきたのかもしれない。口ではあはあ呼吸をしている。白いラインの入った学生服姿だった。

「今から連れてく」  
それだけ言うと、また鼻をかんだ。

「ほら、ポケットに詰め込んでる分、うちで捨てていきなよ」  
ためらっているのを彰子は素早く取り去ってやった。かわりにクッキーの袋を詰め込んだ。

「今、焼きあがったばかりなんだよ。あとで食べようね」  
「母さんのと同じ紙」

つまり、時也のお母さんも大好きなブランドの包み紙だと言いたいらしい。傘を持って彰子は並んで歩いた。

「昨日、電話かけてくれて、ありがとね。うれしかったよ」

「奈良岡に聞きたいことがある」

「なあに？」  
表情が硬く険しいのに気づいたのは、横から覗いた時だった。

「変な奴に変なこと言われたのは本当か」

「変な奴？」  
一瞬、ぴんとこなかった。

「塾の女子が言ってた」  
——ちょっとちょっと、もしかしてみんな、あのこと、言いふらしてたなんて言わないよね！

思い当たるふしはある。もちろん、南雲くんとあの事件だ。

でも、三人にしか話していない。青大附中に通っている子もそういないはずだ。

「信じられないって話してた」  
「なにが？ その変な奴に私が変なこと言われたことが？」

心がまた、冷たく濡れていく。時也はじっとにらみつけるように続けた。

「『パール・シティー』のボーカルって、あいつだろう」  
「は？」

「夏木にも言った」  
今、出かけた時に言ったのだろうか？ 話が見えてこなくて彰子はもう一度聞き返した。

「夏木に、奈良岡が変な男に追いかけてまわされていること、部屋の前で言った。そしたら、すぐに連れてこいって命令した」

「はああ？」

最後にとどめ。

「今のうちに夏木、なら先生と一緒に、殴った女子の家に謝りに行くって言ってた。だから先に食べていいと思う」

——混乱、しちゃうよ、時也。どういうこと？

時也の武士を気取った口調が、似合わない。

「何を？」

「これ」

ポケットを指差した。クッキーを早く食べたい、ということらしい。

時也の、ぶつ切れ言葉をつないでいくと、大体状況が見えてきた。

すなわち、担任の奈良岡先生は放課後、まっすぐ生徒夏木宗の家に向かったらしい。彰子連れて行くという約束はあっさり破ってだ。なぜか時也もついてきていたがその辺のつながりは説明してくれなかった。

夏木家に到着してみると、そこにはナッキーが部屋にこもったまま出てこないとのこと。そりゃそうだろう。お母さんも妹の明日香ちゃんと一緒に気をもんでいたという。

「でも、言うこと伝えないとあとで、夏木に怒鳴られる」

「何を言ったの？」

時也の表情は変わらない。寡黙そうだがっちりした、いかにも柔道やら剣道やらやりそうな身体つき。武士に二言はなし、と言いたげだ。

「奈良岡に一大事が起こった。って」

「私に何が起こったってこと？」

ひたすら質問ばかりしている自分にあきれながらも彰子は尋ねた。

「青大附中で奈良岡が大変なことになったって言った」

時也は立ち止まり、じっと見つめて、

「ナッキー、それ聞いてふすま開けて飛び出してきた。なら先生に、すごい勢いでくっついてかかってた。それから、謝りにいくって言い出した」

「あやまるって、ナッキーがけがをさせた子に？」

「絶対悪いことしてないから、あやまらないって言い張ってた。でも、心境の変化あったみたいだ」

棒読みで、音読するように時也はつぶやいた。

彰子はそれきり黙った。

時也のポケットにもう一枚、ポケットティッシュを入れてやった。クッキーの入っていない反対側のポケットにだった。

やがて目の前に長屋風の木造住宅が見えてきた。だいぶ色あせたその家は、入ると奥に広く決して貧乏くさい雰囲気はしなかったこと。ただ近所の家と違うのは、祝日でもないのに年がら年中日の丸の旗が立てられていることだけだった。



六畳の部屋に、四角い漆塗りの机がでんと居座っていた。ナッキーのお母さんがほっとした表情で彰子と時也を迎えた。とりあえずは、丸く収まっているらしい。

「彰子ちゃん、雨の中、うちの馬鹿息子のためにありがとうね」

時也の肩がずぶぬれなことに気づいたらしく、すぐにタオルを持ってきてくれた。

「時也くんも、本当に、ありがとう。さ、風邪引くからどうぞ」

明日香ちゃんの気配はない。彰子はまず、明日香ちゃん用にこしらえたクッキーの包みを差し出した。

「今、ちょっと興奮気味だったから寝させたの。やっと落ち着いたところなの」

ナッキーのお母さんはきつと、彰子が何から何まで分かっていると思っているのだろう。話をあわせることにして、まずは机の端にふたり並んで座った。部屋のあちらこちらに、日の丸を背負って腕組みしている学生服姿の男性写真が飾られている。ナッキーのお父さんだ。非常におっかない人だと周りでは言うけれども、彰子の知る限り「二月に紅白のお饅頭を持ってきてくれる、やさしいおじさん」という印象が強い。ナッキー曰く、

「また捕まっちゃったんだよなあ、うちのおやじ」

とぼやいてたりもするけれども、別に主義主張が違ってたっていい人はいいい人なんだもの、いいじゃないかと思う。現在は、政治結社の関係で遠征かなにかをしているらしい。詳しいことはわからない。

「ナッキー、大丈夫だったんですか？」

まずは心配だったので、出してくれた大福餅をいただきながら尋ねることにした。

「ご心配かけちゃったみたいね。さっきまで宗もずうっと部屋にこもっていたんだけど、時也くんが説得してくれて、なんとか、ね」

時也を見てにっこりと微笑む。体型がちりした時也が軽くうつむいて頷く。

「時也が説得したの？」

「そうなの。彰子ちゃんのお父さんと一緒に時也くんが来てくれてね、いくらしても宗が出てこないってことで、部屋の前まで説得に行ってくれたの」

「説得した、わけじゃ、ないけど」

からからと笑うお母さん。息子が自宅謹慎している身とは思えない。

「彰子ちゃんがピンチだから出ておいで、ってね。宗にとって彰子ちゃんはお姫さまなんだなあって思っちゃったわよ。あの馬鹿息子もやはり、好きな子には弱いよねえ」

——好きな子？ まあいいけどナッキー、なんで？

今ひとつぴんどこなくて、彰子は相槌を打ちつづけた。隣りでじっと見つめていた時也は、彰子が渡したクッキーを取り出し、いきなりパクパク食べ始めた。人のうちでそれをやるのもちょっとなと彰子は思うのだが、まあ自信作のクッキーだしいいかと思い直した。

「ね、おいしい？」

「もっとほしい」

それだけ答えた後、時也は花柄の袋に手を突っ込んで、ひたすら食べつづけた。袋が空になった頃、もう一度玄関がざわめいた。

「かあちゃんただいま！」

甲高い声。ナッキーだ。

「しーっ、明日香やっとなんだから。ほら宗、彰子ちゃんいるわよ」

玄関で迎えるお母さんの声がする。時也と顔を見合わせて、彰子はすばやくもうひとつの袋を用意した。ナッキー用のクッキーだ。

父もいた。一緒にずぶぬれになり戻ってきた。いろいろ考えるところもあるのだろうが、何も言わなかった。彰子を見るなり、

「おいしそうだなあ。私にもあるかい？」

「ごめん、父さんのはうちにあるんだ」

非常に淋しそうな表情を見せた。まだ言い争う声がするけれども、きっと着替えるか、ぬれているのを拭いてもらっているかしているのだろう。

——よかった。ナッキーいつもどおりだ。

白線が施された学生服姿。それも裾が長い。背が低いせいもあるけれど。

口を真一文字に結んでナッキーは、堂々と入場した。まさに「入場」そのもの。応援団が入ってくる時の雰囲気だった。おかしいのをこらえるのに苦労した。

「なにはともあれ、彰子、ちょっと俺の前に座れ」

お母さんが慌てている。彰子を見るなりいきなり口調と目つきが険しくなった。となりで父が困ったように彰子の肩を叩いた。まあ、言う通りにしろってことだろうか。

「失礼なこと言うんじゃないの。あんたが頼んで彰子ちゃんにきてもらったんでしょ」

「事実関係を確認するんだ。黙ってる」

「ちょっと親に向かって言う言葉じゃないでしょ」

「うるせえったらうるせえんだ。母ちゃんは明日香のところ行ってろ。俺は彰子に話があるんだ！」

言い出したら退かないナッキーの性格を彰子もよくわかっている。

「いいです。いいよ。ナッキー、真っ正面に座るからいい？」

細長い机を挟んで、少し戸口からずれた。父を時也の隣りに座らせて、彰子はナッキーの真向かいに座った。ちゃんと、大福も一つ持って。上座にためらうことなくナッキーが向い、じっと見下ろし、あぐらをかいた。ナッキ一流に言わせると、あぐらは家長の威厳を示すものらしい。時也が心配そうに指をくわえて、なんどか鼻の下をこすっている。

大きく深呼吸した後、ナッキーは自分のお母さんに手でおっぱらうしぐさをした。なかなか動かないのを無視して、次に彰子の父へ、

「なら先生、これから俺が話すこと、全部聞いてていいからさあ。まずは事実確認する。自分の娘のこと、少しは知っとけよ」

——うわあ、どうしようナッキー、全然しょぼくれてなんかないじゃない。もう心配した私ってばかみたい。ま、いっか。落ち込んでるよりもこういうナッキーの方が、私は大好きだけどね

。父が苦笑いしつつも、時也と顔を合わせて頷いている。ある程度彰子の知らない部分を把握しているのだろう。彰子はあきらめてお白州の場に出ることにした。

「まず、ひとつめだ。彰子、お前、この前青大附中の変な奴に追いまわされてるって話してたよな」

——変な奴？

話が全く読めない。斜め前から時也が助け舟を出してくれた。

「耳鼻科で会った奴のこと」

「追いまわされてはいないと思うなあ」

くすっと笑う父。思いっきりナッキーににらまれて黙った。父も本気出したナッキーにはさからえないらしい。

「じゃあいい。次だ。彰子、その変な奴がお前にこの前ちょっかいだしてきたって本当の何か？」

「ちょっかい？」

父がひたすら笑いをこらえている。まあまあと目で合図しつつ彰子はこたえた。

「ちょっかいていうのかなあ。クラスで仲いい子がいてね、その子からお付き合いを申し込まれたってのはあるよ。一応断ったけど。でも」

「付き合いを申し込まれただと！」

時也とナッキーが同時に身を乗り出した。父が、ほう、という顔をして様子をうかがった。どう答えるか迷ったけれども、嘘をいうとどつぼにはまるので素直に答えることにした。「だってね、その子性格はいいんだけど、見かけが私とつりあわないのよ。ほら、時也知道るでしょ。『パール・シティー』のボーカルにそっくりだって子のこと。たぶん私と友だちとして仲良くしたいということをいいたかったのかなあ。ただ、私がそういうのに慣れてなくて思わず、いかにもの『お付き合い』と勘違いしちゃって、パニックになったってのはあったよ。だからきくと、時也もその話聞いて、心配してくれたんだと思うんだ。ありがとうね。ナッキー」

南雲くんのおそらく時也の方からもれたのだろう。時也の通っている塾で、彰子の相談した内容を女子たちが話しているかなんかして、それを聞きつけたと。時也は心配して大至急、彰子の仲良しである男子たちに声をかけて留守電応援メッセージを送ってくれたと。ついでに自宅謹慎中のナッキーにも報告したと。なあんだ、時也が彰子のことを心配してみんなやってくれたことだ。もう一袋時也にクッキー用意してくればよかった。

ナッキーはしばらく両腕を組んだ。お父さんの写真に似た格好でだった。ほんと、ナッキーはお父さん似だと思う。写真を見上げながらのんびり、そんなことを思った。

「彰子、お前なあ」

いきなりじっと、彰子の顔をにらみつけた。素直に感謝したのが帰ってまずかったらしい。ちょっと読み違いありだろうか。身構えつつも笑顔を忘れないよう、彰子は答えた。

「なんか、悪いこと言っちゃったかなあ」

「お前なんも分かってねえよ！ ばかやろう！」

漆塗りの机にばしんと両手を叩きつけた。

——どうしよう、ナッキーに怒られちゃったよ。私って男子にどうも、逆なでしちゃうこと言っちゃうくせあるみたい。

父だけが落ち着いたまま、時也の分のクッキーを一枚もらい食べていた。

ナッキーの怒号は父譲りだと思つづく思う。

「いいか、彰子。お前、自分の立場がどれだけ大変なことになってるかちっとも理解してねえよ。彰子のことをばか女どもがさんざんこけにしていること、どうして気づかねえんだよ！ あんな奴らにお前がなんで、そこまで言われなくちゃいけないんだよ！」

「私のことをこけにしてるって、どういうこと？」

時也に目線を送るナッキー。ごほんとかいひして、時也が答える。

「奈良岡のことを話していた女子たち、最低だ」

「は？」

「『あんなデブにどうして、`パール・シティー”みたいなカッコいい彼ができるっていうわけ？ 絶対変だよ』って言ってた」

——なにも時也、そんなにリアルに言わなくたって。

止められない時也は更に続けた。

「『小学校の時から男に媚びるのが得意だった』とか」

「私、媚びてた？」

「『青大附中では全然男子が相手にしてくれないって話してたけど、やっぱり顔が命だもん、当然だと思ってたけど』とか」

「いや、私、この辺はそうだって思うけど」

「『絶対からかってるんだよ、それ。青大附中の子たちも言ってたけど、あんなブスに相手がいるなんて絶対変だって！』とか。うちの塾、青大附中の女子が何人かいたから聞いてる」「時也、教えてくれればよかったのに。私の友だちかもしれないじゃない。紹介してあげたのに」

父が笑いをこらえきれずうつぶして声をもらしている。彰子からすれば時也が報告する彰子への悪口は、否定できないことばかりだし、もうあきらめていることだらけだった。周りの人が南雲くんの「理科室告白事件」についてかなり冷静な見方をしているのは知っている。でも南雲くんが「友だち」としていい付き合いをしたいと真剣に言ってくれたことだけは確かだと思う。だから彰子なりに誠実な答えを返したつもりだった。ブスだとかデブだとか言われて言い返す気はない。健康面の問題さえクリアすれば、今の自分の顔も身体も、まんざら嫌いじゃない。

とうとう、ナッキーが立ち上がった。

「なら先生！ 自分の娘がこれだけこけにされてるんだぜ！ 頭の悪いばか女どもにここまで罵られてるんだぜ！ なんで笑ってられるんだ！」

「夏木、ごめんごめん、時也と彰子の漫才が面白すぎたんだ」

「笑い事じゃねえ！」

両手を腰に当て、彰子を見下ろした。

「いいか彰子。ばか男がさんざん彰子を追い掛け回していたのはわかる。その気持ちはよーく、わかる。だがな、こんな奴らをのさばらしておいていいと思ってるのか。いいか、俺はな。そんな奴らを許しちゃおけねえ！」

「うん、そうだ」

合いの手、時也だ。

「なら先生、ここで言っとく。父ちゃんが日本を守るのと同じく、俺は彰子を守るからな。絶対に、こいつに手を出す奴は許さねえからな！」

——なんか、怒られにきてしまったみたいだなあ。

ぼんやり、見上げながら彰子は答えた。

「うん、ありがとう。ナッキー、ごめんね」

本来の目的「自宅謹慎中のナッキーを勇気付けるためクッキーを渡す」ではなく、結局は「青大附中の馬鹿男に追いかけて、周りでは不当な評価をされている彰子を、ナッキーと時也が守ろうと宣言」のための集まりになってしまった。まあ、これでもいっか、ということで彰子はおとなしく大福を三つほおぼっていたし、父も荒波をこれ以上立てないよう、ナッキーのしたことについては何も言わなかった。クッキーがあっという間になくなったのはきっと、それなりに美味しかったからだろう。彰子は満足だった。

もっとも根掘り葉掘り、

「そいつの顔はどういう感じなんだ？」とか「まさか、連れ込まれようとしてるんでないだろうな」とか、あまりにも南雲くん失礼な内容を突っ込まれるのには困ってしまったけれども。一応、

「土曜の午後に、友だちとして遊びに行くことにはなったんだよ。青潟こども公園。ちっとも、デートっぽくないよ。ナッキーが騒ぐほどのことでもないと思うなあ」

とだけは、伝えておいた。自宅謹慎期間が過ぎたら、「あけましておめでとう」記念にどこかナッキーたちと遊びに行ってもいいだろう。

夕方過ぎに辞去することにした。

「彰子さん、さっき、宗くんが言っていたことなんだがな」

一緒に並ぶとなにか変。父が骨ばった手で彰子の髪に触れた。

「ナッキーってばもう、私なんかぶさいくもいいところなのに、すごくかばってくれるんだからね。ほんと、ありがたいなって思うよ」

周りの奴の悪口を告げ口されたので傷ついていると思ったのだろう。彰子としては外見のことを言われるのならばしかたないと割り切っている。性格が救いようないとか、人間的に存在価値がないとか言われたら傷つくかもしれないけれども、

「私、自分の顔、結構好きだよ。お母さんにもちっちゃい頃から言われてたもん。『みんなに覚えてもらうためには、いつもにこにこしてればいいよ。そうしたら、あそこのぽっちゃりして



いつもにこにこした子って、みんなが記憶してくれて、友だちたくさんできるからって。美人さんだったら近づけないかもしれないけれど、私みたいなタイプだったら、みんな安心してお友だちになってくれるからね』って」

父はかすかに口元をほころばせると、時計を覗いた。

「そういえば彰子さんに最近、洋服買ってやってなかったなあ」

「いいよそんなの」

「その辺でいいのがあったら、教えなさい。お父さんはあまりそういうのわからないから」

——なんかやだなあ、お父さんも。どうしたんだろう。

——でもラッキーかも。あまり洋服にこだわる性格じゃないんだけどね。ただ、お母さんのおふるはちょっと、恥ずかしすぎるからなあ。スカートの裾いっぱいフリルがたくさんついているフランス人形みたいな服はちょっとなあ。

少しだけ考えて彰子はありがたく、父の申し出を受けることにした。

「じゃあ、今度、気合入れて洋服屋さん回ってみるね」

だれかおしゃれなことに敏感な友だちを誘って出かけたほうがよさそうだ。

——美里ちゃんあたりにそういうのは相談してみるといいかもな。

父は母に、ナッキーのことをあまり詳しく説明しなかったらしい。とにかくクッキーが満足だったことと、相変わらず彰子が男子連中に愛されていることを報告したにとどまる。彰子も照れくささありとはいえ、

「ねえねえ、言ってくればいいのに。彰子に申し込みした男子いたの？ どうするのよ。ねえねえ」

大きなフリルがたくさんついている花柄エプロンをした母。南雲くんについてひとつひとつ聞き出すのだけはやめてほしかった。

「そりゃあ、ナッキーショック受けるよね。そうか、彰子にとって青大附中に入ってから初めてのデートかあ。お母さんがいい服、選んでおくからあとで着て見なさいね。お父さんも別にいいから。うちにたっくさん、古い服あるんだからね」

父のまなざしはかなり、同情を含んだものだった。大丈夫、なんとかなるわと、目で答えた。

——いやあ、しかし、あきよくんと遊びに行くのはいいけど、お母さんのどぶりふりを来て出かけるわけ？ わああ、どうしよう。こっちの方がすっごく恥ずかしいよ。

娘の初デートは、母にとっては心ときめくものだったらしい。たぶんウエストが入らないという理由で下げてくれたのだろう。百合の花がおおぶりにプリントされた真っ赤なワンピースに白いコサージュ、かなりだぼだぼのボレロ、最後はフリルたっぷりの白い靴下とスニーカー。信じられないくらい自分には似合わない格好をさせられそうだった。

鏡に映る自分の姿を見るなり、ふうとため息をついた。

——これって、なんかさあ。

母の嬉々としている様子を見ていると、さすがに「こんなの恥ずかしくてやあよ」なんて言い

返せない。かといって、南雲くんが呆然とするところを見るのも、悪いと思う。たぶん一瞬にして、南雲くんは彰子に交際の申し込みをしたことを後悔するんじゃないだろうか。「彰子はね濃い色が絶対似合うのよ。あんた赤とか苦手だとか言ってたけどね。でも、男の子と会うんだったら思いっきりおしゃれしないと、損よ。どうせその男の子に振られてもね、ナッキーや時也くんがいるじゃない。そうよ、時也くんならこういう服、お母さんの方で見慣れてるわよ」

——いや、あのふたりにこの格好見られたら何言われるかわかんないよ。

きっと、普段の白衣でたまったストレスを、こういう派手なもので発散しているのだろう。さらにコーディネートを楽しんでいる母を見下ろしつつ、彰子は思いっきり脱力した。

——やっぱりあした、美里ちゃんたち誘って、いい服見繕ってこよう。まあいっか。土曜日はお母さんのリクエストにお答えするとしても。

次の日、彰子が教室に入るまでの間、やたらと視線がびしびしと当たったのを感じた。急いで避難すべく二年D組にもぐりこんだ。なぜか、ここだけは安心して話ができるのだった。彰子にとっては気楽な場所だった。いつものように水口くんと解剖の話をし、他の女子たちとテレビの話や宿題の写し合いをし、南雲くんを始めとする他の男子たちには「おはよ！」と声をかける。不自然なほど、ふつうの空気が流れていた。

「彰子さん、これ、あとで見ておいて」

美里ちゃんたちと「砂のマレイ2」の話につきあっていると、南雲くんが机に一枚、レポート用紙を置いていった。

「他のみなさまのご意見もいただいていいよ」

ちらっと美里ちゃん、こずえちゃんたちの方もみて、頷いた。彰子の性格をよく掴んだ様子だ。南雲くんの態度は、理科実験室事件前とほとんどかわらなかった。デートを受け入れたことがかなりいい方向に進んでいるらしい。

「ねえねえ、見せて見せて」

「彰子ちゃん、結局どうしたの？ 付き合うの？ 南雲と」

「付き合うかどうかわかんないけど」

もももご言いながら、許可の出たレポート用紙を一枚覗き込んだ。

- 一 青潟駅前にて集合。
- 二 青潟駅～バスで「青潟こども公園」まで十分。
- 三 休憩室にてただのお茶をもらいながら、お弁当を食べる。
- 四 遊ぶ。
- 五 ないしょ。

五の「ないしょ」というところが妙に受けた。項目の間には、それなりにお奨めスポットなどの記入もある。宿泊研修の時作るしおりによく似ていた。文章は少なかったけれども、あいているところにはいろいろな音楽系のイラストが書き連ねられていた。鉛筆書きのもの。たぶん、バ

ンド関係に詳しい人なら一発でわかるのだろう。

「彰子ちゃん、つまり、土曜日会うの？」

「うん、公園だったらいいかなと思って。みんなで行った方がいいと思うんだけどね」

「それはだめだよ！」

強く美里ちゃんが訴える。

「よくわかんないけど、これは彰子ちゃん一人で行くべきよ！」

「美里も何一人で力こめているのよ。全く、自分がかなわないからって」

「こずえ！」

真っ赤になりつつも、美里ちゃんは一生懸命にしゃべっていた。

「お弁当は必要かなあ。休憩所だから。作っていった方がいいのかなあ」

「彰子ちゃん料理巧いからそれは当然よ！」

「それと、お茶も水筒に入れて用意したほうがいいよね」

「遠足と一緒に！」

「公園でだったら、あまり派手な服はまずいよね」

「でも可愛くなくちゃ絶対だめ！」

頭の中に浮かぶのは母コーディネートの派手なワンピース。

可愛くないとは言わないが、着る相手を思いっきり選ぶ。

「洋服選ぶんだったら私が付き合ってあげる！」

そうきた。よかった。言い出す前に美里ちゃん、強く受けてくれた。

「頼もうと思ってたんだ。ありがとう美里ちゃん」

「私も付き合っていていい？」

もちろん。こずえちゃんもいれば鬼に金棒。彰子は手と手を取り合い、レポート用紙に質問事項を書き込み、もう一度南雲くんを持っていった。

「あきよくん、お弁当のことなんだけどどうかなあ」

「あ、それ大丈夫」

立村くんとふたりでテープの交換をしているところを邪魔してしまった。あっさりと南雲くんは受け取り、ぱかっとした笑顔で答えた。

「ちゃんと、料理は用意してるんだ。まかせといて！」

立村くんがわけのわからなさそうな顔をしつつも、知らん顔してテープの入れ物をいじくっていた。南雲くんはいくつかレポート用紙にチェックを入れた後、

「じゃあ、後は俺が全部プランニングするから任せといて！」

と胸を叩いた。

「あとね、ひとつだけご了解いただきたいんだけど」

「なに？」

「当日、諸般の事情で非常に、つれて歩きたくない格好をしてくるかもしれないけれども、その時はごめん。洋服あまり、そういうの関心ないもんだから」

「全然、そんなの気にしないよ」

——いや、うなされなければいいなあ。

彰子は両手を合わせておいた。

しかし不思議だ。二年D組から一步出たとたん、空気がにごる。

五月の風が、湿っていく。

あまり季節を感じない彰子ですらも、

——うわ、息苦しいよ。

思うくらいなのだから相当なものだろう。立村くんが顔色青くして机にうつぶしていた。南雲くんが軽く背中をさすってやっていた。羽飛くんが美里ちゃんに、

「あいつまた倒れてるぜ。ったく、何考えてるのこいつ」

指差して肩をすくめていた。

彰子が思うに、どうもいろいろな空気をよけいに察知してしまう体質の持ち主らしい。憑依体質、というのがある。一緒にいる人が「気」を出して、「おなか がすいた」とか「外に行きたい」とか「ぐあいわるい」とか考えているのを、普通の人はいささか感じない。しかし、憑依体質の人はそういうのをよけいに感じとってしまい、おなかすいていないのに思いっきり食べてしまったり、つられて具合悪くなってしまうりする。バスの中で一人が酔ってしまうと、連鎖反応で吐いちゃう人が連続するのと同じだ。教えてくれたのは母だ。もちろん、「あんたは神経ずぶといからいいよねえ」とため息をついて、ダイエットについて説明してくれた時だ。

「立村くん、保健室、行こうか？」

心配そうに美里ちゃんがそばに寄って声をかけていた。やはり同じ評議委員だから、気遣ってあげているんだろう。ほんとにやさしい子だ。

「大丈夫、ごめん。少し落ち着いたら帰るから」

身動きせずに立村くんは、か細く答えていた。

彰子も保健委員の立場上、気になるところあって近寄ろうとした。とたん、美里ちゃんが勢いよく近づいてきて、手を引っ張った。

「じゃ、行こっか。こずえと一緒におしゃれの勉強、しに行こ！」

南雲くんがきょとんとした顔で彰子を見つめている。羽飛が美里ちゃんに、あきれた顔して片手を上げている。立村くんは相変わらずうつぶせたまま。「じゃあ、お先にね！」 彰子はこずえちゃんに背中を押されるように、美里ちゃんに手をひっぱられるようにして教室を出て行った。ふたりの「気」が守ってくれているみたいだった。C組、および他のやっかみらしい「気」が跳ね返されたみたいだった。やっぱり自分は守られている。

——どうして私の周りっていい人ばかりなのかなあ。

「一応、希望だけ言っとくけど」

デパートの中を歩きながら、彰子は前もって母の愛好ブランド名を告げ、避けてもらうよう頼んだ。

「え、そんなふりふり、着たりするの？」

「たぶん、着なくちゃいけないと思うんだ。お母さんの立場上」

こずえちゃんが嘔き出したところみると、相当イメージと異なっらしい。

「それって彰子ちゃん絶対まずいよ。美里に任せときなって。美里はくやすいけど私よりずっと、男子が目からうろこ落ちるようなコーディネート決めてくれるから！ 相手は南雲でしょ。奴ならきつと、今時のしゃきつとした感じが好みだと思うからさ。あまりぶりぶりした感じは好きじゃないと思うんだ。ねー、美里。どこのだれかさんとは違ってね！」

「こずえ、うるさいっ！」

なぜか美里ちゃんは顔を真っ赤にしてこずえちゃんの肩を思いっきりぶっている。いつもそう。美里ちゃんとこずえちゃんの会話は、「砂のマレイ2」のキャスト好みにしろなににしろ、「だれか」の存在をちらつかしてはからかい、相手が本気でくってかかる。そんなのりだった。しかもこずえちゃんは引かないで、傷つかないで、平気で言っける。

「正統派のトラッドファッションか、それとも気品のあるドレスとか、そういうのを気に入ってるみたいよ。あいつはね。羽飛とは大違い。羽飛の好みは美里も知ってるよね」

——羽飛くん？

思わず口からもれた。

「羽飛くんの好みと違うのは想像つくけど」

にんまり笑ってこずえちゃんは無理なウインクをしてみせた。顔がつっぱっている。

「あのね、彰子ちゃん。美里はひそかに、彰子ちゃんのお母さんが大好きなブランドの服、着たがってるに違いないんだ」

「うん、美里ちゃんだったらああいうふわふわしたのって似合うと思うなあ」

素直にそう思う。

「そういうんじゃないってば！」

「ほらほら無理しないでさ。彰子ちゃんも聞いてやってよ。この子のダーリン候補ってばねえ、美里の好きなおしゃれ系とずれててさ。すっごくジレンマ感じてるみたい。形崩さないできちんとした格好して、ブレザーとコートでびしっと決めて、冬は絶対シャーロック・ホームズ風コートって感じの奴だからさあ」

——羽飛くんじゃない？

いっちゃんんだが全くイメージが異なる。彰子はもっと尋ねてみたかった。

「そういう子を、美里ちゃん、好きなの」

「こずえ言わないでってば！」

通路の真ん中で完全に泣き顔を見せながら美里ちゃんはこずえちゃんを捕まえようとする。逃げながらべろべろばーしてみせるこずえちゃん。軽くかばって、

「こずえちゃん、いいよ。やめときなよ」

声をかけた。だんだん、輪郭が見えてきたものがある。

「全くさあ、美里ってば好みが変よねえ。そばにさ、羽飛みたいな奴がいるのに、なんでよりによって」

「こずえにはわかんなくていいの！ もう、知らない！」

とうとう美里ちゃんはエスカレーターの方へ駆け出してしまった。

「ちょっとまずくない？ 美里ちゃん、行っちゃったよ」

こずえちゃんもさすがに、姿が見えなくなったのを見ていてあせったらしい。

「じゃあちょっと待ってて。美里を捕まえてくるからさ。彰子ちゃんもよさそうなものあったら目星つけておいてよ。どうせ買うわけじゃないんだからさ」

でもちっともあせてない風に、舌を出した後こずえちゃんは、

「みさと一、待ってよー」

叫びながら駆け出した。平日の午後、人通りのないデパート。販売員さんたちが目の笑っていない顔でお辞儀をしている。一人取り残された彰子は、同じ年頃の子たちがたむろっている店に入り、自分が着れそうにないブラウスを広げたりしていた。白も黒もいろいろあったけれど、ほとんど選んでいなかった。指先で触れながら、さっきのこずえちゃんが口走った言葉を思い出していた。

——この子のダーリン候補ってばねえ、美里の好きなおしゃれ系とずれててさ。すっごくジレンマ感じてるみたい。形崩さないできちんとした格好して、ブレザーとコートでびしっと決めて、冬は絶対シャーロック・ホームズ風コートって感じの奴だからさあ。

——そばにさ、羽飛みたいな奴がいるのに、なんでよりによって。

羽飛くんではない。ブレザーとコートでびしっと決めるタイプじゃない。同じ理由で南雲くんでもない。もっというなら、シャーロック・ホームズ風コートという言葉。特定される一人しかいない。

——美里ちゃん、まさか。

——立村くんのこと、好きだったの？

マント風のいかにも目立ちそうな格好で教室に入ってきた時、みなが呆然として指差したことを覚えている。彰子が立村くんについて記憶しているのはそのあたりだ。だから覚えていた。似合わないとは思わなかったけれども、学校ではちょっと目立つだろう。

美里ちゃんと立村くんは同じ評議委員だし、もちろんそういうのがありえないとは思わない。でも、彰子は最初から羽飛くんの存在を意識していたから想像だにしていなかった。

何よりも、クラスで人気者、可愛い美里ちゃんが、なぜ、評議委員とはいえ地味で目立たない立村くんを好きなんだろうか。

——羽飛くんと、幼なじみなのに。

——羽飛くんとだったら、お似合いなのに。

——私だったら、絶対羽飛くんを選ぶのに。

「彰子ちゃーん、捕まえたよー！」

背中を叩かれた。恥ずかしそうにうつむいている美里ちゃんと、そばでけらけら笑いこけているこずえちゃんがいた。すぐに見つけて、探してくれたらしい。

「ほら、美里も機嫌なおしなよ。私が悪うございました。今日は彰子ちゃんのためにコーディネートしてあげるんでしょ。ほらほら」

まだむくれている様子の美里ちゃんをなだめるように、こずえちゃんは彰子へこっそり、

「ねっ！わかったでしょ」と唇を突き出すしぐさをした。

——うん、わかったよ。

動揺したところを見せたくなくて、彰子はもう一度、こっくり頷いた。

——どうしよう。

美里ちゃんを選んでくれたコーディネートは、幾分白と黒の直線がカッターで切ったようではなかなかおしゃれだった。値段もそう高くなかったし、彰子も気に入った。ワンピースで、一応試着してみたら一番大きなサイズで問題なかったし、あとは父に買ってもらえばいい。しかし「彰子の初デートに着る服を選ぶ会会長」の母により、あっさり却下された。

「あんなぴったりした服着たら、彰子、あなたおなかが目立ってしょうがないわよ。食べた後おなかがたぬきみたいにぽこっとでたらしゃれになんないわ。いい？　こういう時にはね、ウエストは全部ゴムでないとだめなのよ。いい？」

父に助太刀を頼んだのが間違いだった。

「お父さんは黙ってて。女の子はね、洋服でいくらでもかわいくなれるのよ。彰子は笑顔ですって勝負きた子なんだから、可愛い赤のワンピースなんて着たら、絶対男たちはいちころよ。ね、そうでしょ」

頷けない。絶対に嘘だと思う。

でも、母が楽しそうに新しいブラウスを広げてみたり、わざわざ彰子のために、ブランドのプレミアムハンカチをプレゼントしてくれたりしたら、もう観念するしかなかった。父の懐が痛まず、母のご機嫌がよくなるとしたら、彰子がどふりふりの真っ赤なワンピースを着て、南雲くんがうなされるというパターンを甘受するしかなかった。

——ま、いっか。あきよくんだって、友だちづきあいをやめるとまではいわないだろうしなあ。

土曜の朝からずっと彰子に笑顔を向ける南雲くん、彰子は曖昧に頷いた。

——お願いだから、卒倒しないでね。あきよくん。

四時間目が終わってからまずはうちに帰り、一時に駅前で待ち合わせ。

まっすぐバスに乗って「青淵こども公園」に向かい、そこから南雲くんの立てたプラン通りに行動すればいい。彰子はデートというものがどんなものか皆目見当がつかないけれども、回数を重ねている南雲くん、に任せておけばいいだろう。その辺は心配していなかった。

むしろ、駅で待ち合わせした時に、どういう顔をするか、それが問題だ。

——大きい着替えのバック持って行って、駅のコインロッカーに入れて着替えるのが一番いいような気がするなあ。何度見ても、この格好って。

白い百合がたくさんプリントされていて、可愛いことには可愛い。

ただ、着る相手を選ぶと思う。なぜ母はこういうデザインの服を選んだのだろう。母がいなければそれなりに別のものを選ぶのだが、今日に限って医師会の会議があるのだという。母も着替えてから、出かけるという。もちろんスーツだ。どふりふりではない。

「彰子、ほら、あなたそんなに不満そうな顔しないで」

「第三者から見て、お母さん、私に似合うと思う？」



真面目に尋ねるが、母の目は曇っているらしい。眼科医のくせ。

「いいわよ。やっぱり彰子は赤とかはっきりした方がいいのよ。もともとほわっとした感じだから、甘い色を入れるとね、なおさらぽっちゃりして見えちゃうのよ」

「別に、それでもいいんだけど」

「だめよ。あんたは少しでもほっそり見えたほうが得なの！」

わざわざバックも、小さめのおそろいポシェットを用意された。

観念。もう逃れられない。

時間はまだある。せめてもの抵抗に、着替え用ボストンバックを用意しようとした時だ。呼び鈴が鳴った。桃色のスーツ姿で玄関に走る母。そしていきなり叫び声。

「彰子ちゃん、お友だちよー！」

全身、完全に硬直した。

——なむさん。どうか、あきよくん、冷静でいられますように。

見ている自分でも受け入れられないこのふりふり度。ファッションに詳しくおしゃれな彼が、冷静でいられるとは思えない。

父がいないのが幸이었다。

母はすっかりはしゃいでいる。自分のデートじゃないんだから。どうも母親というのは娘のデート相手には異常な関心を持つらしい。ナッキーや時也と同じ扱いでいいと思うのだが、妙にハイテンションだった。

「あきよくん、わざわざ」

「うん、最初だからやっぱり、と思って」

南雲くんは玄関で、白いシャツに水色のパーカーを羽織り、髪型を丁寧すぎるほどきれいにまとめていた。目がはっきりと前髪から出ている。彰子の家族に会うため、規律きっちりとしたんだらうか。

——「パール・シティー」な彼だもんね。

彰子はそっと南雲くんの顔をうかがった。

「あの、あきよくん。実はね」

「大丈夫。俺は平気だよ」

聞く前に反応したってことは、かなり南雲くんも心中衝撃を受けたに違いない。彰子は見た。上から降りてきてまず、最初に南雲くんの顔によぎったのは、

——なにこの格好。

そのものだ。いや、責める気はない。彰子だってそう思う。

母がなにやらはしゃぎながら奥に引っ込むのを待ち、彰子はささやくことにした。

「私もかなりこの格好に抵抗があるんだけど、母の趣味なの。だから、公園で一回、ふつうの服に着替えるつもりなんだけど、それまでがまんしてね」

「いいじゃん、これで」

——あきよくん正気？

上から下までさらっと眺め、すぱっと答えた。付け加えた。

「俺、すげえいいと思うよ。あそこのブランドだろ？ 俺もたまにメンズもの覗きに行くけど、高過ぎて手を出さなかったんだけどさ。彰子さんがそういうのを着るんだったら、今度、小遣いためて」

「それだけはやめようよ！」

何か世界がずれている。南雲くんが彰子に気を遣って、似合うといってくれているならわかる。しかし今言ったのは「おそろいでもいいよ」ってことじゃないだろうか。それだけは彰子自身のご遠慮したい。メンズブランドは、ふりふりものを男の人の服にくっつけた、それこそバンドの舞台用としか思えない内容なのだ。南雲くんが正真正銘の「パール・シティー」だったら話は別だが、一緒に歩くなんてしようもんなら、青湯中の噂になるに決まっている。

「とにかく、行こうか」

母が慌てて出てきて、この前こしらえたクッキーの残りを持たせてくれた。ナッキーにこしらえたものが残っていたのだ。余りものとは言えない。

「わあ、ありがとうございます！」

「彰子がこしらえたのよ」

目の輝きが尋常じゃない。続く言葉に彰子は罪悪感でいっぱいになった。

「俺のために作ってくれたんだよね！」

目で「そういうことにしときなさい」と合図する母には逆らえない。

——ふつうのうちって、こういう時はいろいろと文句を言うらしいってきいたなあ。うちが変なのかな。そんなことないよね。ま、友だちだし、ナッキーや時也とおんなじことしてるだけだよ。

こういうことするから、周囲からは「彰子ちゃんのお父さんとお母さん、先生やってるのにどうしてそんなに面白いの」と聞かれるのだ。

いざ出陣。

少しぶかぶかの花柄付スニーカーをはいて後、彰子は何度か戸口にぶつかりながら外に出た。もちろん扉を南雲くんが押さえてくれていた。その辺はさすが慣れている。お姫さま気分になるのも無理はない。こちらとしては申しわけないのだけれども。通りかかる人々の視線が妙に痛いのは、やはりいでたちのためだろう。これからバスに乗るのだ。公共の迷惑を掛けまくっている。やはり駅前で着換えたほうがいいような気がする。

南雲くんはずっと笑顔のままで話し掛けてきた。嬉しくて嬉しくてならないという風にだった。その点ありがたいと思う。彰子ももちろんしゃべりつづけたのだが、いかんせん重ねたスカートやペチコートが重くてならない。足が絡みそうだ。

「ごめん、やはりなれない格好するのはよくないね」

ひとしきり自分で大笑いしてから、彰子は頷いた。

「彰子さんのお母さん、お医者さんなんだっけ。俺んところは両親ともども会計士」

何度か聞いたことがあるけれども、初めて聞かされたような顔して促した。気づかないのか南

雲くんはにこやかに続けた。

「だからうちの両親、いつも事務所にいずっぱりなんだ。うちから離れているとこだから、帰るのはすげえ遅くて。多少俺も遅く帰っても文句言われないんだ。うちにいるのはばあちゃんだけだし」

——確か、妹さんもいらしたんだよね。

口に出かかったけれども、聞かないことに決めた。彰子の直感だった。何かまずいような気がした。

「だから、結構俺、青潟の遊び場って詳しいと思うんだ。みんなから遊び人だって思われても、まあしゃあねえよな。でもさ、公園とかそういうところも嫌いじゃないから、彰子さん、気を遣わなくていいからさあ」

言い訳しているらしい。なんだか彰子も、自分の服のことばかり考えているのが申しわけなくなってきた。きっと、今時のライブハウスとかおしゃれな喫茶店では彰子が萎縮してしまうであろうことを予想していたのだろう。思いやりのある子だ。自分がクラスでさんざん「軽い奴」「いかげんな奴」と思い込まれているのを気にしているのかもしれない。羽飛くんがさんざん、罵っていたんだから。

「ううん、気にしないよ。楽しみだよ！」

バス停で百五十円払い乗り込んだ。時間帯が高校生の帰宅時刻にぶつかったらしく、やたらと混んでいた。満員バスの中にただでさえ場所を作るのは大変なのに、さらに輪をかけて分厚い服着ているってわけだ。嫌な顔をされないわけがない。

耳元に「なんだよこのデブ」「似合わなねー」などとの悪口を耳にしながらか、彰子は小さくなっていた。南雲くんはさすが細い、するすると奥に追い込まれている。当然、手なんてつないでいないのでバスの中ではばらばらだった。

約十五分揺られた後、だいぶ少なくなった車内から降りる。目の前にはさびた鉄柵に寄り添うつつじが咲き乱れていた。白、濃い桃色、匂いはないけれども花びらがぴんと張り切っていた。

「やっと生き返ったって感じだね」

無言ながらも笑顔を絶やさない南雲くん。早く行きたいらしく、たったと競歩の感覚で歩き始めた。付いていくのがやっとだった。

「とにかく、中に入っちゃおう。それから説明するよ」

急いでいるらしい。手首を袖の上からぎゅっと捕まれた。驚いた。そうしないと南雲くんのスピードについていけない。素直に任せてひっぱられていった。

入場料百円、財布を取り出す間もなく南雲くんが全部用意していたらしい。受け付けに二枚さっと渡し、そのまま彰子を引きずっていく。もちろん手首は離さない。受け付けのお姉さんが彰子を見てくすっと笑ったような気がした。そりゃあそうだろう。

「急がせちゃってごめん。まず、腹ごしらえしようよ。昼ご飯、食べてないよね」

「うん」

実はかなりおなかですいていた。一口でもいいから何か口に入れたかったけれども、母に「絶対だめ！」と禁止されていたのでずっと空腹のままだったのだ。

「よかった。じゃあまっすぐ休憩室に行こう」

きっと、ハンバーガーとかおにぎりとかが売っているのだろう。それでいい。ジュースとおにぎりだけでも十分だ。

「あのね、あきよくんいいかな」

「ん？」

「手首、離してくれと、うれしいな」

彰子としては「あまり握り締められると痛い」と思っていたからにすぎない。しかし南雲くんにとっては思わぬことだったらしく。いきなりぱたっと離し、じっと彰子を見つめた。

「ご、ごめん。びっくりしてた？」

「ううん、ちょっと痛かっただけだから。でももう大丈夫だよ。さ、連れてってください！」

南雲くんの目が少し安心したように緩んだ。

「うん、じゃあ行こう。今度はゆっくり歩くから」

小動物公園と、遊園地が別々に分かれている。南雲くんのプランによると最初は動物公園でりすとかオウムとかやぎとかポニーを眺めたのち、コーヒーカップに乗って、最後には観覧車を予定しているらしい。その辺はお任せだ。まずは食べたいそれだけだ。

「じゃあ、入りましょっか」

軽く、乗りよく、南雲くんは「公園休憩場」と書かれたベンチを指差した。食堂席奥席には年配の女性陣がずらっと陣取っていた。

天気もいいし、外でいい。

「いいよ、外の方が気持ちいいし」

「食べるのは外でいいんだけど、ちょっとだけ付き合っほしいんだ」

強引だった。袖ではない。手をいきなり握り締めてきた。全身にぴくっとするものが走る。有無を言わさない握り方。しめってきた。一瞬理科準備室のことを思い出してしまいそうだった。

「ほんのちょっとだけ。ごめん」

引き戸を開けて、一身に視線を浴びる。

グループは年齢的にだいたい六十才後半から七十才くらいのご婦人たちだった。めがねをかけている人もいる。オレンジ色の花模様を纏っている人もいる。髪の毛が紫色の人もいる。六人くらい。驚くなかれ、みな笑顔だった。

「しゅうせいくん、来たの」

すっかり忘れていた。南雲くんの本名は「あきよ」ではない。「しゅうせい」だった。

「お久しぶりっす。なんかあったらまた言ってください。えっと、それから」

肩で呼吸し、ちらっと彰子の方を真面目に見つめ、もう一度ご婦人たちに顔を向けた。

「こちらが、俺の、一番好きな人なんで、連れてきました。奈良岡、彰子さん。これからいろんなところで会うと思うんで、よろしく」

絶句。言葉が見つからない。彰子がしたのは意識のもうろうとしたまま、

「初めまして、奈良岡彰子です。どうかよろしく」

笑顔を仮面にして頭を下げたことだけだった。

あとは覚えていない。周りのご婦人たちがにこやかに、

「あらあ、しゅうせいくんの彼女なの？」

「元気そうなお嬢さんね」

「可愛い服ねえ」

彰子を評する声に硬直していた。

「と、いうことで、いただいてっていいですか」

南雲くんがそばに置いてあったらしい、豪華なお弁当の箱を二折抱えて、片手で彰子を守るようなしぐさをした。

「じゃあ、俺たちは外で食べてます。ありがとうございます！」

ふわふわと笑い声に見送られ、彰子は南雲くん連れられて戸口のベンチに並んで座った。座らされた。大きな木目のテーブルに紙のお弁当箱が並んだ。見た目漆塗り調の入れ物で、結婚式の引き出物に良く似ていた。

「豪華なお弁当、ね」

これしか言えなかった。

「うん、うちのばあちゃんが今日、婦人会の人たちと出かけるって言ってたんだ。で、ここの弁当がすごく美味しいから、もし俺が来るなら用意してくれるって言っててさあ。で条件が」

「条件？」

彰子は問い返した。

「俺の好きな人を紹介してほしいって。自慢したいんだって」

「好きな人って？」

桜の花に形をこしらえたご飯、鮭、たけのこ、卵焼き、みかん、黒豆。いかにもおばあちゃま好み。でも美味しい。彰子はほおぼりながらも言葉を失った。

「うん、彰子さんのこと」

「.....美味しいね、ごちそうさま！」

だって、それしか答えようがなかった。

話すことはたくさんてんこもりだった。なにも「デート」だからといってかしまる必要はないし、南雲くんも絶え間なくクラスのこととか、規律委員のこととか、得意なイラストのこととか、ぺらぺらとじゃべりつづけていた。彰子はとにかく笑顔で相槌を打つように心がけていただけだった。実のある話、全然していないという気持ちがないわけじゃなかったけれども、南雲くんがとにかく楽しそうだったので、いいことにした。

「でさあ、彰子さんのところ、保健委員会の委員長どうなるのかな。ここだけの話なんだけど、俺が次期規律委員長になってしまうんだよなあ。みんな、あっけに取られるだろうなあ」「ほんと、イメージに合わないよね。この前もみんなで言ってたよ。あきよくん、規律委員長になん

てなっちゃったらおしゃれできないねって」

制服関係をびしっと決めないと、やはりいろいろまずいだろう。

「うん、でも、そんなに規則規則ってうるさく言うつもりないし、むしろ今度発行する予定の『規律委員会作成・青大附中ファッションブック』を作ることに専念するんだ。そうだ、彰子さん。今度、俺と一緒に洋服関係の店回るのが、つきあってほしいなあ。野郎関係だったら平気だけど、なかなか婦人服っぽいところって、あやしいと思われそうで嫌なんだ。ほら、今着ているような服のとことか。絶対変態だと思われそうでさ」

頷く。そのくらいならばかまわない。ただモデルがいまいちかもしれないけれども。

「よっしゃあ！　じゃあ、今度はそこに行こう！」

一通り平らげた後、南雲くんは手元に無料のお茶が切れているのに気づいたらしい。軽く紙コップを振ってみて、

「彰子さん、お茶、持ってきてあげるよ。ちょっと待ってな」

答える間もなく両手に紙コップを持って、建物の中に入って行った。実にまめだ。まさに歩くデートブック。これだったら女子たちも満足するだろう。ぎんなんとおしんこをきれいに食べ終え、彰子がお弁当のふたを閉じた時だった。

「ちょっと、いいかしら？」

背中であたりほどの気配がした。香水の匂いがちょっとばかりきつい。振り向くと、さっきの婦人会グループの女性が二人、ほほえんでいた。このふたりは大体六十代くらい。あの中では若い方だろう。

「あ、さっきは失礼しました。それと、ごちそうさまでした！」

ご馳走してくれたのは実質、このグループなのだ。きちんとお礼を言った。

「いいお弁当だったでしょ。ここの店ねえ、いつも私たちの集まりがある時にね、取り寄せるんだけど。今日はしゅうせいくんが気合こもった初デートだってことでね、特別にお祝いで、ねえ」

顔を見合わせて頷きあい、また微笑む。

彰子は慣れてないわけじゃなかった。よく母の付き合いでお医者さんたちの交流旅行に連れて行かれることがあるのだけれども、その奥様たちがだいたいそんな感じだった。品があって、丁寧だ。

「よかったら、ちょっとだけ私たちのところにきてくださらない？」

「南雲さんの奥さんもぜひにっておっしゃってるの」

つまり、南雲くんが大好きなおばあちゃんのことだろう。断るわけにはいかない。こう言う時は「早く来なさい」という意味として受け取ることが正しい。

——あ、でもあきよくんお茶くんでもらっているところだし。

「しゅうせいくん、悪いんだけど、あなたの恋人、ちょっと借りていくわね」

すでにもうひとりのブルーのワンピースを纏った婦人が南雲くんに大きな声をかけていた。室内では大笑い。南雲くんはきょとんとした顔で、口をぽかんと開けていた。

「さ、OKがでたことだし、いらっしやい」

——お弁当のお礼は言うつもりだったけど、どうしよう。

ほとんど気分は「拉致」だった。彰子はスカートを持ち上げるようにして建物の中に入って行った。目があった南雲くんとは、合図したかったけれどもうまくいったかどうか自信がなかった。

席には五人ほど連なっていて、それぞれが濃い化粧、めがね、口紅、とにかく匂いが食べ物を覆っている。みな丁寧に箸入れの袋をきれいに折って、割り箸を乗せていた。おそらく南雲くんのおばあちゃんにあたる人だろう。手を振ってにこやかに彰子を迎えてくれた。なんか、ほっとしたのは相性が合いそうだったからだろう。一番歳かさの方で、推定年齢おそらく八十歳近く。

「さあ、連れてきたわよ。それにしても今日はおめかししてきわわねえ」

答えようがないのでこっくり頷いた。そりゃあ目立つだろう。

「すみません。私も着慣れてないんです。母がこういうの好きなんです。でも私はあまりこういうのが苦手かも」

南雲くんのおばあちゃんは目を細めて、手を震わせながら彰子の腕を撫でた。ちょうど南雲くんが握り締めたあたりだろうか。

「本当にあの子はね、あなたのことが大好きみたいですよ。とってもやさしい子がいるって、毎日私に話してたんですよ。さっきお会いした時にやっぱり、ねえって思いましたよ」

気品のあるおばあちゃまだと感じた。少し息切れしているようすだった。体調があまりよくないのかもしれない。循環器系の病気らしいとは前から聞いていたけれども、手元に市販されている心臓関係の薬が握られているところみると慢性のものなのだろう。耳も遠いらしい。なんだか聞きかえされた。大きな声で話さないともまずいらしい。

「ほらほら、この機会なんだから南雲さん、お嬢さんにどんどん質問なさったら？」

「そうよ、どこにお住まいなの？」

「お父さんは学校の先生なんですよ？ あら、お母さんはめいしゃさんなの？ で、どこのめいしゃさん？」

根掘り葉掘りとはこのことだ。彰子は素直に答えつづけた。後ろの方で右往左往しているのは南雲くんで、なんとかして連れ戻そうと思案しているのが手に取るようにわかる。お茶を置いてから、なんども戸口を行ったり来たりしている。

「あらそうなの、あそこのめいしゃさんなの？」

どうやら彰子の母に当たったことのある人がいたらしく、話はいきなり「お互いの病気自慢」にかわった。これは彰子も実際、年配の人と話す時経験している。どこが痛い、ここが痛い、あそこの病院はいい、あの病院はやぶだ、どこどこの医者は胃カメラが下手だ、あそこの医者の子は遊び人、などなどどうしてそこまで知っているのか不思議なくらい盛り上がる。知らない話ではないし、判断もしかねるので彰子は黙って聞いていた。さすがに大病院とはいえ水口病院の話は出なかったので、

——すい君のお父さんの悪口出ると申しわけないなあ。

少しほっとしていた。かなり、病院としてはひどい噂のあるところだからだ。

話をあわせていくうちに、南雲くんのおばあちゃんは白内障と緑内障を併発し、心臓の手術を経験し、さらには若い頃に蓄膿を経験しているとのことだった。もちろん現在は補聴器を使用しているらしい。

「だから、あの子には毎週薬をもらいに行ってもらってるんですよ。ああ見えても秋世は真面目な子だから」

ご婦人たち、何度も頷いている。二年D組の王子様で、さんざん女子と浮名を流してきたことはあまり知られていないらしい。

「そうなのよねえ。しゅうせいくん、本当にいい男、じゃなくって」

爆笑するのでこちらも困る。

「いい男の子よねえ。ほら、この前も私たちの旅行についていろいろ手伝ってくれたことあったでしょ。私たちが行くところの資料、全部友だちの男の子と一緒に集めてくれてねえ」——なるほど。デートどころじゃないよ。あきよくん、おばあちゃまたちのお手伝いもしているからね。そうかあ、すごいすごい。

相槌を打ちながら彰子は耳を傾けた。聞かれること以外には何も言う必要がない。話を聞いていればとにかくみな笑顔でいてくれる。

「そうそう、奈良岡先生ってあのぽちゃっとして、いつもげらげら笑いながら検査してくれるあの女先生かしら？」

なんてリアルなお答え。大きく頷いた。母しかいない。

「絶対、うちの母です」

「あの先生、帰り道のお洋服みたことあるけれど、ほんっと派手な格好しているわよねえ」納得しているようすなので、彰子もゆっくりと答えた。

「その母のお下がりや、私が着ているんです。うちでも、あんな風に一日中げらげら笑ってます。裏表ないんです」

しばらく彰子のワンピースを撫でながら、他のご婦人たちは洋服および病院ウォッチングに花を咲かせていた。話を聞いているうちに、やはり母の病院評価は正しいのだと思えてきた。やはり時也を別の病院に紹介したのは正しかったのだろう。南雲くんのおばあちゃんも今は例の「あまり評判よくない病院」に通っているようだけど、それはそれでお医者さんと相性が合うということで、あまり気兼ねなくお付き合いしているようだ。それはそれでいいんだろう。

結局最後に、「今度、お母さんにいい病院の情報などあったら教えてほしいと言っておいてね」と頼まれ彰子はやっと席を立つことができた。ご婦人たちはみな楽しげだったし、南雲くんのおばあちゃんも最後まで洋服をなでなでしてくれた。嫌われはしなかったみたいだ。約九十分間、医療関係の話題で盛り上がった後彰子は戸口を出た。

待ちくたびれたようにぼけっとした顔で、ベンチに座り込んでいたのは南雲くんだけだった。家族連れが数人いないこともないが、やはり野郎ひとりで座り込んでいるのは目立つ。特に「パ



ール・シティ」似の美少年ともあろうお方だ。さぞや視線もちらちらしただろう。すでに空の弁当箱は片付けられていた。

「あきよくん」

「ごめん、ほんっと、ごめん」

平手ついて頭をテーブルに擦り付ける南雲くん。

「うちのばあちゃんたちにただ、彰子さんのこと、紹介するだけのつもりだったんだ。ほんと、それだけ。まさか、あんなことするなんて俺も。本当にごめん」

平謝りしたらそのことだろうか。風が、せっかく決めた前髪をばさばさにしている。

——きっとおばあちゃん軍団に連れ込まれたと思っているんだなあ。事実そうでないとも言い切れないけどね。

でも、いやじゃなかった。

お年を召した方たちの病院うんちくや、その他いろいろな生の本音は聞くに退屈しなかった。

「ううん、大丈夫だよあきよくん。私も楽しかったし。ただ、あきよくんをずっとひとりぼっちにってしまったのが、ごめんなさいってだけ。せっかく美味しいお弁当おごってもらったのに。私こそ、本当にごめんね」

スカートを持ち上げ、彰子は南雲くんの隣りに立った。意地悪令嬢が美少年をこき使う図と思われるそうだけどしかたない。

「続き、お任せします。あきよくん」

おずおずと見上げ、ふたたび元の笑顔に戻っていく南雲くんの表情。ある意味単純だ。男子はナッキーも時也も似たところがある、なんとなく彰子は比べて思った。

「よおし、じゃあ、次だ次！」

勢い良く手首を掴み、急ぎ早に南雲くんはメリーゴーランドの方でひっぱっていった。まだ就学前の子どもたちしか乗っていない乗り物だ。彰子が乗ったら壊れないだろうか。心配だった。

幸い乗り物は一切支障をきたさなかった。南雲くんのサービス精神は全く衰えることを知らず、話も途切れず、スカートの裾を踏まないようにしてくれたり、手を取ってくれたりいたせりつくせりだった。たぶん教室でこういうことやらかしたら、ひゅうひゅう攻撃を受けることは必至。C組の別れた彼女のおともだちに知られたらもっと大変だ。

「あきよくんって、本当にやさしいね」

ひととおりジェットコースターまで制覇した後、最後の締めめに観覧車を選んだ。それほど大きくない。上り詰めると青潟の街と海が見渡せる。南雲くん曰く、

「やはり、デートはこれがないと嘘だよなあ」

とのこと。さすが、慣れている。スカートを持ち上げながら歩くのがだんだんしんどくなってきたけれども、ナイトがいるとその辺も楽なものだと彰子は改めて思った。可愛くて美人さんの女子たちは、こういうことに慣れているのだろう。

「中入ると、暑いね」

観覧車の戸が閉められ、一度勢いよく動いてゆっくり進みだす。彰子が汗を拭きながらつぶや

くと、南雲くんはわざわざ隣りに腰を下ろした。別に真向かいでもいいのに。お尻が窮屈だろうに。

「うん、今日は走り回ったもんなあ。彰子さん、疲れなかったかなあ」

「私は大丈夫よ。走るのはだめだけど、ちゃんとあきよくんがひっぱってくれたからね」

じっと、スカートのフリル部分に手を触れ、いきなり引っ込めたりと、やたら落ち着かない様子だ。そろそろ会話もネタが尽きてきたのだろう。彰子もそろそろ自分のネタを出すことかもしれない、思いつつも出てくるのはクラスの噂話だけになりそうだ。

「私ね、やはり人は見かけによらないなあってよっくわかったよ。だってあきよくんは、二Dにいる時、絶対におばあちゃんたちと話すよりも、女子たちとやいのやいのしている方のイメージが強かったもん。もちろん、私とかは話をしているから、わかってるけどね。でも」

今のうちにお礼を言っておこう。決めた。

「今日、あきよくんのおばあちゃんたちが言ってたよ。あきよくんって、婦人会の旅行とかの計画を立てる手伝いもしてたんだって？」

「そんなこと、言ってたかなあ」

「うん。言ってた。他の人も言ってたよ。いつもすれ違おうと挨拶してくれて、荷物とかも途中で持ってくれるって」

聞いててこれはすごいと思ったのだ。バスの中で席を譲るとかはよくあるかもしれないが、なかなかできることではない。南雲くんは頭をかきながら、照れ笑いした。

「だってさあ、重そうだよ。うちばあちゃんがいるから、そういうの慣れているからさあ」

「そういうの、きっと二年D組のみんなは知らないんだよ。きっと。だから、あきよくんのことを軽いとかいろいろ言うのかもしれないけどね。でも、今日のことによおく、わかったよ」

だんだん南雲くんがうつむいて、指を何度か絡めては離し、離してはからめを繰り返した。

「俺のこと、みんないいかげんだって言われるのは慣れてるけどさ。羽飛たちにもさんざん言われたけどさ。女ったらしだとか、好きでもない相手にちょっかいだす馬鹿野郎とか、利用する奴だとか、いろいろ言われたけどさ」

きゅうっと頭をあげた。満開の笑顔だった。

「彰子さんのお言葉で、そんなのどうでもよくなった！」

——あの、そういうことを言わせるつもりじゃなかったんだけど。

アナウンスで「ここから左手に青潟市街、また反対側には港が見えます」と流れている。眺めながら彰子は頷きながら、気にかかった言葉を引っ張り出していた。

——羽飛くんと仲が悪いのは知っていたけれど。

——けど羽飛くんだって、あきよくんのこんな真面目なところを見たら少しは見直すんじゃないかなあ。

——いろんな意味で、損してるよね。それなら、来週から少しでもあきよくんのいいところ、人前で誉めてあげたらまた、クラスの男子たちも変わるんじゃないかなあ。特に羽飛くんは。

そろそろ閉園時間だ。五時過ぎだ。音楽が「蛍の光」。最後までワンピースのペチコートで一

苦労だったけれど、汗だくになりながらも無事過ぎた。「ありがとうございます」と頭を下げる受け付けのお姉さんに挨拶し、バス停に向かおうとした。

とたん、目の前を金銀まだらの風が走りぬけた。

急ブレーキをかけて止まり、すぐに目の前に戻ってきた。ナッキーだ。

——まずい、やっぱり、ナッキー来ちゃったか！

隣の南雲くんは身を凍らせている。じっとふたり、目を合わせてはさっと逸らし、彰子の方に顔を向ける。ナッキーはにらみ、南雲くんは困惑のまなざしだ。そりゃそうだろう。この二人、顔を合わせるのが二回目なのだ。ナッキーも「なんかむかつく」と言っていたし、南雲くんも「あの自転車野郎」とか口走っていた。相性が合うとは思えない。羽飛くんと南雲くんのような関係に近いかもしれない。

危険だ。早く離れた方がよさそうだ。どっちのためにも。

ナッキーのうちではあまり「デート」の予定について説明したつもりはなかったのだが。もちろん「青潟こども公園」で会うとまでは話した。でも、まさか、追っかけてくるとは思わなかった。

頭には赤いバンダナ、学生服姿で彰子と南雲くんの前に立ちはだかった。

「なんって格好させられてるんだよ彰子。時也の母ちゃんみたいじゃねえか」

「ナッキー、これってうちの母さんの趣味に決まってるじゃない」

バス停に向かう群れから、声が届く。彰子は聞くとともにしに聞いていた。

聞きなれた言葉だったし、あきらめてもいた。

——やだあ、あの子似合わないふりふり着てるよね。

——なんかぶたっぽいよねえ。

——隣の男の子は可愛いのにねえ。

ナッキーと南雲くんがその声の方に身体を傾けていく。抗議してくれようとするのか、それとも、やっぱりそうなのかと納得してしまうのか。彰子はじっと待った。ナッキーの出方を待つことにした。

「お前か、彰子のことをさんざんもてあそんでる奴ってのは！」

「もてあそぶ、って、失礼だな。名前を名乗れ」

息せき切ってもう一人、バス停から降りてくる奴がいた。やはり学生服姿。白いラインが入っている。四角い体型と鼻の下を何度かこする姿でよくわかる。

「時也、あんたも、いったいどうしたの」

口があんぐり開いたままふさがらない。彰子を見つけるや否や、何度か咳をしながら怒鳴った。笑っていない。怖い。時也の声だ。

「なら先生に言われて、迎えに来た。これから奈良岡を、連れて帰る」

「え？ 俺まだ連れて行くところいっぱいあるのに」

きよろきよろ、ナッキーと時也、彰子を見比べながら口籠もる南雲くん。

腕が引っ張られた。バックの柄が横にずれている。気をそらされて見ると、時也が墓石の顔して、バス停を指差している。しっかり、バックの底を掴んで離さない。

「時也、なんであんたもいるの。父さんが何言ったっていうの。今日のこと、そりゃ話したけど、でも」

いきなり時也は指を南雲くんに突きつけた。ナッキーの隣りに立ち、はっきりと、

「耳鼻科で俺に、聞いたのはお前だろう」

「ええっと、あ、あんときはどうも」

すっかり南雲くんの態勢不利だ。頭に手をやったり、目をふらふらさせたり、彰子の顔をうかがったりとかなりのパニック状態だ。

「耳鼻科で俺にとって、時也、あのどういうこと？」

とうとう相手が目の前にいるってことで、時也も胸を張って答えた。

「俺が前の耳鼻科で待っている時、『奈良岡さんに付き合っている人はいるのか』と聞いたのは、こいつだ」

——あの、それって、本当にあきよくん？

じっと南雲くんを見返してみた。

嘘じゃないという証明に南雲くんはうつむいた。

「事情は俺が聞きだす。おい、時也。お前は彰子をうちまで送れ。バスでだぞ。俺はこいつにまだ確認したいことがある」

ナッキーは自転車をけりなおし、きっと南雲くんをにらみつけた。

これはちょっとまずい。割って入りたい。

「ちょっと待ってよナッキー。あのね、今日、南雲くんとは友だちとして」

「こいつの顔がそう見えるかよ。彰子、このまま食われてしまったら、お前、将来医者になんてなれねえぞ。とにかく、男だったら来い。言い忘れたが俺は、夏木宗だ。お前を意味なく殴るなんてことはしねえ。とにかく、ええっとなんだったか、お前の名前」

「南雲、秋世だが、話とは」

横顔が、いきなりクラスの規律委員雰囲気になり替わっている。仮面を被った。両方を見比べながら、彰子はもう一度訴えた。

「ナッキー、変なことを考えちゃだめだよ。あんたが私のことを心配してくれるのはすっごくうれしいよ。でも、今日は私が南雲くんと会うことを選んだんだから。ナッキーとはまた謹慎が終わったら」

「彰子、お前は黙ってろ！ とにかく、南雲、お前にとことん話がある。来い」

再接近。顔を近づけ、腹を突き出し、ナッキーは思いっきり爪先立ちしていた。でないと、南雲くんには届かない。

「あきよくん、あの、ごめんなさい。ナッキーは決して悪い奴じゃないのよ。ただ、なにか勘違いして」

息を呑んだようだが南雲くんは彰子に、もう一度にっこりと微笑んだ。

「彰子さんと一緒にいられるには、絶対戦うことがあるって覚悟してた。だから、平気だよ。負けないもんな。今日のお言葉で百人力さ！」

「よおし、いい根性だ」

一瞬だけナッキーは笑みを浮かべた。が、すぐに自転車をひっぱりだした。「彰子、これ以上謹慎くらうのごめんだもんな。時也にも、なら先生にも、ちゃんと後で説明する。俺は」

言葉を切った後、じっと見つめ返した。今まで見たことのあるナッキーの瞳でないようだった。ナッキーのお父さんが写真で腕組みしている時のまなざしにそっくりだった。

彰子は時也に無理やりひっぱられ、南雲くんは黙ってナッキーの自転車についていく。

——ナッキー、あきよくん。

とてつもなく自分が、悪いことをしている、そんな気がしてならなかった。ただ南雲くんと友達として「デート」しただけなのに。ナッキーにも時也にも正直に、話したつもりなのに。

時也がそばで、じっと声の向こうを見据えている。気づかれていない。

——あんな暑苦しい格好して、やあよねえ。

——似合う子でないとあのブランド、無理よ無理。はっきり言って、社会の迷惑よ。

ぎゅっと、バックの柄を握り締めて立ち尽くす彰子に、時也はしっかり背中に寄り添ってくれた。きっと時也だって悪口の対象になっているだろうに。そっと守るように、カーブを切るたびにくっついてくれた。だんだん、自分の目がゆるゆるしてきたようだった。理由がわからない。彰子はそっと手の甲で目をこすった。

「時也、いいよ、私から離れてた方がいいよ」

「いやだ」

十五分間ずっと、時也は彰子のそばから離れなかった。

母は夜勤で父はかなり遅く帰って来た。どうせ食事も終わっているのだろうし、彰子の顔を見て無理やり笑顔をこしらえるのがやっとの様子。おとなしく部屋にこもることにした。

窓辺につるしたままの真っ赤なワンピースには百合の花が映えていた。百合は大好きな花だ。きれいなだけでなく、花びらがきっちりしていて落ち着いているから。でも、花粉で部屋が汚くなりがちなのでなかなか飾れない。

——見ているだけだったら、可愛い服だと思うんだ。でも。

明日が日曜なのがまだ救いだった。

ちゃんと南雲くんはうちに帰っているだろうか。おばあちゃんに今日のこと、どういう風に報告しているだろう。彰子のことを大変気に入ってくれたみたいだ。でも、ナッキーと話をしたことによって、気持ちが変わったなんてことないだろうか。友だちでいるのもいやだなんて言わないだろうか。

いや、ナッキーが彰子の悪口を言うわけがない。

ナッキーはきっと、彰子のことを心配して追いかけてきてくれたんだろう。一部の女子たちが彰子を中心に、不細工とばかにしていたという噂を真に受けて。みんなはきっと、彰子のことを軽く揶揄する程度だったのかもしれないけれど、ナッキーは親友だと思ってくれているから激怒したに違いない。同じことは時也にも言える。時也は真面目だから、言われたことをそのまんま信じて、親分のナッキーに報告してしまう。彰子のことを嫌っていないからなおさら、なんとかしなくちゃと一人で決めてしまう。そういう時也のやさしさを彰子は知っている。ずっとバスの中でくっついたまま、悪口と一緒に受けていたことを、びんびんと感じている。

——でも、南雲くんとは関係ないよ。

——みんな、いい人ばかりなのに。

みんな笑顔で居てくれればいい。そう思ったことなのに、すべてがいいことじゃなくなってしまふ。

——どうすればいいんだろう。

小学校時代の友だちに電話をして相談するのはためらわれた。南雲くんのことを「パール・シティー」のボーカル似二枚目だということしか知らない人たちにはわかってもらえないだろう。おばあちゃんのことを大切に、一生懸命彰子を楽しませようと気を遣ってくれた人だと説明しても、きっと。

——私、どうすればいいんだろう。

眠れない。月の光がちらちらする。父のことにも心配だし、ナッキーの自宅謹慎期間も気になる。楽しかったはずなのに、たっぷり遊んで疲れているはずなのに、一睡もできなかった。

日曜日。母が当直先から帰ってくるのは昼過ぎだろう。

父が食器を流し場に置いたまま出て行ったらしい。

休みでも部活の顧問としての仕事はたくさんかかえている。クラスのこと、ナッキー、時也、考えることがたくさんあるのだろう。家族明るいはずなのに、どうしてみな、こうも暗いのだ

ろう。彰子はひとりでパンを食べた。一枚食べ終えた後、電話が鳴った。

「彰子ちゃーん、もっしもーし。古川で一す」

朝まだ七時半なのに。こずえちゃんからだった。

「朝早くごめんね。ええっと、さっそくなんだけどさ、今日、美里と遊びに行っていていい？」 いきなりびっくりだが、彰子に断る理由はない。友だちが遊びにきてくれるのは大賛成だ。父の生徒たちがこなくなったから淋しかったし、それに話もしたいし。

「もちろんオッケーよ。じゃあ、部屋掃除して待ってるね。何時くらい？」

「朝十時って早すぎる？」

父も母も午前中はいないし、別にいてもまた盛り上がってケーキとか焼いてくれる程度だ。

「わあい、よかったよかった。じゃあ美里と待ち合わせていくね！」

短く切れた。いい子は女子にもたくさんいる。確認できたような気がして、彰子は少しだけ食欲が出た。あまりもののクッキーを十枚おかずにかじった。

呼び鈴が鳴ったのは九時半だった。早い。

「ごめんね彰子ちゃん。こずえ！ だからあんたそんなに急ぐなって言ったでしょ。人のうちで失礼だって」

「なに神経細かいこと言ってるのよ、美里、もしかして奴の超神経質っぽいところに移ったんじゃないの？ もしかしてこっそり、移るようなことしてるんじゃないの？」

「エッチ！ もう、知らない！」

どうやら美里ちゃんがこずえちゃんにひっぱられるような格好で呼び出されたいらしい。二人が遊びに来てくれるのは大歓迎だった。彰子は首を振って、すぐに二人を部屋に上げた。「いいよ。うちはちっちゃい頃から人の出入りが激しいうちだったんだ。ほら、美里ちゃんは紅茶がいい？ ジュース？」

「ええっと、紅茶、お願いしちゃおうかな？」

こずえちゃんがまぜっかえす。膝上のオレンジストライプキュロットが可愛い。お尻が小さいから良く似合う。

「なによ。気取っちゃって。いつかだれかさんとデートすること夢見てるんでしょ。あいつだったらまあ、ねえ。あ、私はジュースでいいよ」

「うるさい！ もう」

美里ちゃんハリボンが肩に結ばれているジャンパースカートに、ボーダーのオレンジTシャツを着込んでいた。何気なく袖のところが膨らんでいて、ほっそりした腕の美里ちゃんがちょっと大人っぽく見えた。

ふたりをベッドの上に座らせ、サイドテーブルを用意し飲み物を置いた。もちろん手作りクッキーは欠かさない。あとで昼のご飯もこしらえるつもりだった。チャーハンあたりでどうだろう。ふたりはしばらくクッキーの味を絶賛しまくり、例のワンピースを指差しては互いに鏡であてがい、試着しまくったり、大騒ぎしていた。美里ちゃん、こずえちゃんを見ていると全く飽

きない。少し心がなごんだ。

「ところで、彰子ちゃん、本題なんだけど」

美里ちゃんに「やめなよ」と言われつつも、こずえちゃんがにやっとしながら彰子に向かった。

目的はすぐにぴんときた。

「昨日の、こと？」

「ご名答。彰子ちゃん、結局こんな可愛い服あるなら美里のファッションチェックいらなかったねえ」

「違う違う、母上の許可がでなかったの。私だってこんな派手な服」

激しく首を振って、美里ちゃんはまだ服の袖を撫でていた。

「ううん、すごく可愛い。いいなあ私もほしい」

「で、南雲の奴は、どう言ってたの？」

——どこまで話したら、いいのかな。

彰子は迷っていた。本当のことを話すのには何も迷いが無い。

ただ南雲さんとナッキーとのことまでばらすのは、状況がわからない以上だめなような気がした。

「うん、最初はぎょっとしたみたいだけど、でも、よくしてくれたよ」

「南雲はデート慣れ絶対してるよね」

膝を叩きつつこずえちゃんは大笑いした。隣りで、割り込むのを待っているのは美里ちゃん。身をかがめて、小さな声で口をつぼめた。

「一緒に、コーヒーカップとか、ジェットコースターとか乗ったの？」

「うん、一通り、案内してもらったよ。私が乗ったら壊れるんじゃないかなってそちらの方が心配だったけどね」

とりあえずはさしあたりのないことだけに絞った。ふたり、まだデートっぽいことは未体験らしい。もっとも、男子たちと仲のいいふたりのことだ。友だちとしての「おでかけ」は経験しているだろう。

「いいなあ。私も、そういうのしてみたいなあ」

「だから、あんたがこなかけりゃいいじゃない！」

「そんなのあんたに言われたくないよ、もう」

またこずえちゃんのつつこみが始まった。すでに美里ちゃんのひそかな恋のお相手が立村くんであることを彰子は知っている。違和感ありありでも、ここまで真っ赤になりながら話すところみると、本気だろう。

——立村くんだったら、美里ちゃんに告白されて断るなんてこと、絶対ないなあ。舞い上がったちゃうと思う。真面目な子だからなおさらね。

ただ、ふたりが評議委員関係以外でデートしているところを想像するのはかなり困難だ。それ以前に立村くんが普段着、いわゆるジーンズとかTシャツとかそういうものを見につけているこ



とがまず、イメージに合わない。立村くんといえばやはり、青大附中の制服でブレザーとワイシャツだろう。学校の中でしか、生息しない人物だ。

「こずえ、あんたの方こそ、なんで貴史の方がいいわけ？ そっちの方が謎」

「だって、面白いし、カッコいいし、性格あったかいし、いいよね、彰子ちゃん」

気づいているのかわからないが、彰子はうなづいた。どうせ女子だけなのだから、安心して話せる。

「好みはあると思うけど、羽飛くんは、確かに、カッコいいタイプだよ。美里ちゃんとは幼なじみなんだよね。みんながうらやましがるのも当然だと思うなあ」

「彰子ちゃんまでそんなこと言うわけ！」

まあまあと、手で押さえるしぐさをし、彰子はもう一度繰り返した。

「でも、幼なじみだからこそ、気づかないところもあるんじゃないかなあ。友だちとしてはいいけれど、それ以上はいいかなっていうところ」

迷ったけれど続けた。

「ここだけの話だけど、私は立村くんがどうして評議委員としてあそこまで、男子に評価されているのかがよくわからないんだよね」

大きく頷くこずえちゃん。おそらく美里ちゃんは、彰子が気づいていることを知らないのだろう。それなら知らないふりするしかない。思った通り、美里ちゃんは少しだけほおを赤らめてうつむいた。平気な顔をしようしようとして、うまくいかない。やはりそんなところが男子たちからは可愛いと思われているんだろう。彰子も女子ながら、いい子だなと思う。「ううん、立村くんはすごくいい子だと思うよ。この前もね、具合が悪くなって保健室に行って寝てたら、立村くんが来てくれてね。私のことを心配してくれたらしいんだ。クラスの雰囲気がおかしいかもしれないけれどなんとかするから大丈夫だよ、って言ってくれたんだ。その時は、何この人言うてるんだろうと思ったけど。きっと、気を遣うのが得意なんだろうなあ。でも、教室戻ったらそれほどでもなかったし、まあ私の顔がこの有様だからみんな呆然とするのはあたりまえだし。あきよくんもかなり誤解を解くのに苦労したみたいだし。要するに友だち同士で仲良くしようって、話だけだったんだから。たいしたことじゃないけど、気になってしまうから、声かけてくれたんだって私は思うんだ。ただね」

美里ちゃんがだんだん唇を尖らせてきた。

「どうしてそんなことまで考えるのかなあとも思う。ほら、この前、遠足についてのホームルームでも、手つなぎ鬼しようってもちかけたら『手を握るのがいやな人もいるんじゃないか』とか言ってたでしょ。それはないよ。だってみんな、二年D組の男子も女子もいい子ばかりだもんね。みんなをもっと信頼してもいいのになあって、私なんかは思っちゃうんだ」

どんどん美里ちゃんの目がきつく変わっていく。まずいかも。でも隣りでこずえちゃんが、「そうそう、もっと言って言って」

と促す。

「こういう時に、もし羽飛くんだったらどうするかなあ、と考えると、もっと楽しく盛り上げられるんじゃないかなと思うの。もちろんあきよくんでもいいけれど、やはりなあ。みんなへ訴える

力があって、男子も女子も関係なくまとめられるとしたら、やはり羽飛くんが一番だと思うんだ」

頷きまくるこずえちゃん。やはり自分の大好きな相手を誉めてもらえるのは嬉しいことなんだろう。彰子も頷きかえした。共感大。

「確かに、貴史はお調子ものだから、そういうところあるし、わかるよ。けど」

そっと紅茶のカップを両手で抱え、すすり、美里ちゃんは目を伏せたままだった。めずらしい。言い返すのも難しそうだった。

「でも、あいつが評議やったとこなんて想像できる？ できないよ」

「そうかなあ？ 美里ちゃんは仲が良すぎるから気づかないだけなんじゃないかなって気がするんだ。私からすると、立村くんのように人の顔色ばかり伺っておどおどしているように見える、あくまでも私にはそう見えるだけなんだけど。もっとはっきりしゃきしゃきした人の方が向いているんじゃないかなあ。これは適材適所ってことよ。もし立村くんが保健委員だったら、まあね、こちら二年連続相棒やっている東堂くんよりは『らしい』かなって気はするよ」

両手を握り締めて、まず美里ちゃんに頷き二回。三回彰子にするのはこずえちゃんだ。

「でしょでしょ、前から私が言ってる通りだよ。美里。羽飛の方がずっと上だって言うのが女子たち一同の意見だって。美里の方がよくわかっているんじゃないの？」

美里ちゃんは答えなかった。

——もしかして私、美里ちゃんをいじめちゃったかな。

そっと心に焦りが昇ってくる。ポットからもう一杯、注ぎ足してあげた。ティーカップは母の好みの薔薇模様。ソーサーの真ん中にも一輪、くるくるっと茎がまるまった格好で描かれている。つぼみと一緒だった。

突然、美里ちゃんが深くうなだれ、ティーカップを膝に下ろした。

「貴史はいい奴だよ。だから仲良しでいるんだよ。でも違うの。私」

こずえちゃんが顔を覗き込む、はっとした表情で彰子に向い、小さく首を振った。まずい、泣きそう、合図だ。

「ごめん、美里ちゃん私」

「いいの。彰子ちゃんは立村くんの悪口を言ったわけじゃないんだってわかってるもん。でも、私が立村くんを評議として認めるっていうのは、そういうところじゃないの」

柄を持つ指が震えていた。完全に泣かせてしまった。美里ちゃんはあまり泣かない子だと思っていたけれど、まさか、こんなことで。

——ごめん、なんで私、美里ちゃんを傷つけちゃったんだろう！

彰子の方が混乱してきた。手元のクッキーを押しやったり、こずえちゃんと二人で顔を見合わせたりしたけれど、美里ちゃんは全くうつむいたままつぶやいただけだった。小さい声。つまり声。鼻をすすり出す様子。ティッシュを近づけておいたら、すぐにむしって鼻の下を押さえた。はあっと呼吸ひとつ、その後咽がつまったように数回、咳払いのようなことをした。涙をこらえているらしい。

「美里、彰子ちゃんが困ってるよ」

「泣いてなんかない。私、そんなことで泣かない。ただ、違うの」

言葉とは裏腹に美里ちゃんは片手で目を何度かこすり、肩を振るわせた。

しょうがないね、とばかりにこずえちゃんは小さくため息をして見せた。

「彰子ちゃん、あの日のこと覚える？ ほら、保健室で立村くんに会って、何か言われた日のこと」

忘れるわけがなかった。天井でちらついた光の玉が今でも目に浮かぶ。うんと頷き、彰子は美里ちゃんにぐっと近づいた。

「立村くんが、変なこと言ったって、言ってたよね」

わけのわからないことを、たぶん思いやりから口にしていたはずだ。

「本当に立村くんそう実行してくれたって、聞いてないよね」

——実行？

美里ちゃんはいきなり顔を上げて目元を完全にゆがませたまま、一気にしゃべり始めた。せきとめられていたものが、溢れていた。何度か目を拭き、口でしゃくりあげ、鼻水をすすりながら、それでも止めることはしなかった。こずえちゃんが最初あきれたように聞いていたが、だんだん戸惑いに変わっていった。彰子も、同じだった。

初めて聞くことだらけだった。

「彰子ちゃんがいなくて、男子たちが南雲くんの告白について盛り上がっていたの。想像なんて私もしてなかったし。たまたまC組の女子も理科準備室の前で聞きつけたらしくって、あつという間に広まっていたの。みんな、意見はいろいろだった。水口くんはショック受けて泣いちゃうし、貴史は彰子ちゃんを馬鹿にしているんだと思い込んで南雲くんにくってかかっていたし。それに、やはりC組の人たちは南雲くんの元彼女と仲いいから、みんなかわいそうがってたしね。すごい騒ぎだったんだ」

知っている。聞いたことだった。目の前にまた、光の玉が揺れたような気がした。

「立村くん実験の途中でいきなり貧血起こして倒れたの。私、立村くんと話すること多いからわかるんだけど、すごく相手が何を考えているかを想像しなくていいとこまで想像して苦しくなっちゃうみたいなんだ。先回りして考えすぎるっていうのかな。南雲くんが落ち込んでいるのを見ていて、いろいろ考えてしまったらしいの。掃除の前に戻ってきたでしょ。彰子ちゃんが帰った後、男子たちが二派に分かれてすごい罵りあいし始めたの。貴史が南雲くんにも……あいつ馬鹿よ、『気がない相手に、よろこばせようとしてちょっかいだすのは男としてというか、人間として最低だ！』なんて言い出したの。貴史単細胞だから、彰子ちゃんと南雲くんがくっつくなんて想像できなかつたみたいなんだ」

——そりゃそうだろうなあ。羽飛くん面食いだもん。鈴蘭優だものね。

わかっていることを再確認する。食って掛かってくれた、それがちょこっとだけ嬉しかった。

「私、その時貴史と立村くん待ってたからいたんだけど、南雲くんがね。『そうだ、俺は奈良岡のことが本気で好きだ！』って断言しちゃったのよ」

こずえちゃんが叫ぶ。

「それ聞いてないよお、美里、それほんとにほんと？ あの南雲が？」

きつと言い返す美里ちゃん。

「ほんとだよ！ みんなそれで黙っちゃって、きまづくなっちゃってたら、立村くんが戻ってきたの。『ここまでだ、これから先はお互い、個人の問題だ。羽飛も、他の奴も、このクラス内で南雲たちのことに口出しするのはやめろ』って、びしっと、そう、叱り付けた感じで」

——叱りつける？ あの立村くんが？

口籠もりつつも彰子はつぶやいた。

「あの、立村くんが？」

「いつもそうだよ。何かクラスのことと問題が起きると、立村くんが全部男子たちに指示を出すんだよ。ほら、一年の時の宿泊研修だって、国枝くんが食中毒で病院に運ばれた時、面倒みているいろいろ片付けたの、立村くんなんだよ。他にも一杯あるけど、たぶん女子はみな気づいてないだけなんだ。女子は立村くんのことばかにしてるから、絶対返事してくれないってわかってるんだろうなあ。私の指示って形で出すようにって、良く頼まれるもの。立村くん、自分はぼーっとした昼行灯の顔してるけど、いつもクラスのこととか、みんなのこととか真剣に考えてるんだよ。嫌いなのは菱本先生くらいじゃない。彰子ちゃんの時だって、ちゃんと言ってくれたんでしょ。なんとかするからって。立村くんきつと、彰子ちゃんが苦しんでるんじゃないかって、心配してくれてたんだよ。なんとか、彰子ちゃんが二年D組の教室で居心地いいようにって、男子たちを押さえてくれたんだよ。南雲くんがデートのお誘いしても誰もからかわなかったでしょ。みんな、黙ってみてくれたでしょ。あれ、立村くんがみな、仕切ったからなんだよ」

激しくすすり上げ、鼻をかみ、ごみ箱に捨てた。「ごめんね」と続けた。

「へえ、男子たちみな紳士じゃんと思ってたんだけど、あの昼行灯がねえ。美里、さすが見てるねえ。ダーリンのこと」

「そんなんじゃないってば！ 男子って三グループに分かれてるでしょ。貴史、南雲くん、水口くん、って感じで。でも、私の知ってる限り、一度も大喧嘩になったことないでしょ。女子はしょっちゅう仲間割れしてるけどね。あれも全部、水面下で立村くんが片付けてくれてるんだよ。貴史とも、南雲くんとも仲良しだから、誤解のないようにってお互いのいいことを教えあったりしてるんだよ。貴史は立村くんが南雲くんと仲いいの面白くないみたいだけど。そう、それにね」

もう一度、息を吸い込み、今度はこずえちゃんの膝を叩いた。

「こずえ、一年の時、立村くんが杉浦さんに告白したなんていうがせねた回ったことあったでしょ」

「あったよね。でも立村にそんな度胸あるわけじゃないってことで、終りでしょ」

「あの時、立村くん、一度も言い訳しなかったんだよ。嘘ばかり杉浦さんに言われてて、悔しかったと思うんだ。だから私も、女子に話したの。立村くんの噂は根も葉もないことだって」

——思い出した。

一年の終わりに、杉浦加奈子ちゃんという女子に立村くんが告白し、しつこく追いまわしたという噂が立ったことがあった。C組経由だったと思う。加奈子ちゃんも特別に表立ったことは言わ

なかったけれども、女子たちは立村くんを軽蔑のまなこで見たのは確かだった。もっとも彰子は、「好きな子に告白して振られたことは恥ずかしくない。立村くん、辛いだろうなあ」くらいだった。すぐに噂は収まった。

「私、思ったの。どうして立村くん一度も言い訳しなかったんだらうって。菱本先生に呼び出されて怒られても何も言わなかったって。そしたら貴史が後で教えてくれたの。男子たち、みんな立村くんが一生懸命にクラスのこととかひとりひとりのこととかを面倒みてくれたこと知ってたから、あえてその噂をガセネタだってことにしてあげようって決めてたんだって」

「じゃあ、嘘だったんだ。あのことは」

「そうよ。立村くんがそんな、女子を追い掛け回すようなことする人じゃないって、男子はみんな信じてくれてたの。もっと自分で、そんなことしてないよとか言えばいいのになって私は思う。でも、言ったら大変なことになるってわかってるみたいだから、がまんしてるんだらうな。そんなことないのに。みんな、立村くんのこと、認めてあげてるのに。でも気づいてないの。言ってるよ、評議委員会の時。『俺は計算が全然できない馬鹿だから、ふつうの人の十倍はやらないと、ふつうになれないんだ』って。馬鹿じゃないよ。立村くん、英語もドイツ語も、他の言葉もべらべらだし、この前の数学の授業だって」

はっと思い出した。狩野先生がいきなりドイツ語で話し掛けた時のことだ。美里ちゃんは大きく頷き、もう一度目をこすった。

「立村くんが言ってた。なんで狩野先生がいきなりドイツ語で質問したのかって。きっとあまりにも基本的な計算式がわからなくて、他の人たちにばかにされるのを可哀想がって、あえて誰もわからないように質問できるようにしてくれたんだって。そんなこと、想像つかないよ。狩野先生ってわけのわかんない人だって私は思うけど、でも立村くんはそういう人の心が異常なほど感じ取れる人なの。私、全然想像つかないことを、気を遣ってくれる人なの。だから、人の悪口とかきかされてると倒れちゃったりするし、熱出したりするし。でも、必死なんだよきっと。みんなと仲良くやっていきたいって、必死にやってるんだよ。二年の評議を選ぶ時、確かに女子から貴史の方がいいって意見が出たけど、男子がみな立村くんを推したでしょ。貴史だったら南雲くんグループの人とうまくいかないかもしれないけど、立村くんだったらどちらのグループの人でも味方につけられるし、一生懸命やってくれるって分かってるから。だから。なの。立村くん、あんなにやらなくたって男子も、私も、認めてるのに、わかってくんなくて……」

とうとう顔を覆った。しゃくりあげたのが止まらない。彰子は美里ちゃんの隣りに座り、そっと肩を抱いた。泣いてしまった時にはこうしてもらおうと自分は楽なのだ。きっと美里ちゃんもそうだろう。思わずいじめてしまったことをあやまらなくちゃ、そう思った。

「美里ちゃん、ごめん、ごめんね」

暖かい温もりが伝わってきた。震える背中をさすった。

「本当に美里ちゃんは、立村くんのが好きなんだね」

こずえちゃんと少しだけ関係ない話をした後、ふたりは、

「じゃあ、またあしたね」

と帰っていった。もっと長居してもらったってよかったのに。残念だけど、やはり親友同士で話したいこともあるのだろう。美里ちゃんはすっかり元気をなくしてしまい、涙をぬぐった後もしょんぼりしていた。

——あそこまで好きな人のこと、思えるなんてすごいよなあ。

——あの、立村くんのことをそんなにまで。

台所に茶碗を一通り持っていき、洗物をした後、彰子はあらためて、学級文集を取り出し、ぱらぱらとめくってみた。羽飛くん、立村くん、美里ちゃん、南雲くん。それぞれの文章をさらってみた。当時行っていたクラスの班ノートをまとめて一冊にしたようなものだった。評議委員同士が同じ班で一年過ごしたはず。羽飛くんも一緒だった。

美里ちゃんが言う通り、いくつか思い当たることはある。

立村くんが人見知りしやすく無口なのは、小学校時代ひどいいじめにあってきたらしいということに影響があるらしいし、ご両親が離婚してお父さんと一緒に暮らしていること、やたらと文学書の感想が書かれていること、愛読書はフィッシュジェラルドの「グレート・ギャツビー」ということ。一通り読み通せば立村くんがどういうキャラクターを持っているかがよくわかる。

また、美里ちゃんと羽飛くんがそういう立村くんのことを好きで、仲良くしてあげてたことも、伝わってくる。どこがというわけではないけれども、

——俺はりっちゃんのことをすごく好きだなんて思う。

——立村くんはすごくクラスのことを考えているんだなって思います。

ところどころに出てくる思いやりの言葉。彰子はそちらの方がすごいと思っていた。同情を乞うような風に見えなくもない立村くんの文章にくらべ、ずっとふたりの方が大人だと思えた。

——でも、美里ちゃんは違ったみたい。

美里ちゃんが泣きながら訴えた言葉の端々には、彰子の知らない立村くんの姿が見え隠れしていた。もちろん一年時の班ノートには書かれていない、陰で懸命に二年D組のよしなごを片付けようとする姿はどうやったら見えてくるのだろう。彰子が感じることのできなかったことばかりだった。

——もし、美里ちゃんのいう通りだとしたら。

確かに二年D組の穏やかな雰囲気、理科準備室事件後も若干乱れたとはいえ保たれたのは事実だった。彰子も少しだけ変だと思ったけれども、「クラスみんな」がいい人だからそうなんだと思ったに過ぎなかった。まさか立村くんが男子たちに「一切南雲くんと奈良岡さんに口出しするな」と指示を出した……ましてや「叱り付ける」なんて想像もしてなかった。

そうだ。教室を出るやいなや、三年生の女子や他のクラスの人たちから、

「どうして奈良岡さんが？」

「どうしてあんな子に南雲くんが？」

とささやかかれても、全く気にならなかったのはずっと二年D組の教室にこもっていれば何も起こらないと楽観していたからだった。そりゃ最初のうちはクラスの女子だって、

「何か計算してることがあるんだよ、南雲くんも」

とかいろいろ話し掛けてきたけれども、すぐに納まって何事もないかのように時は流れていった。南雲くんが人前で堂々とデートの予定表を渡してくれた時も、男子たちがいる中で彰子がお付き合いの返事をした時も、誰もからかわなかった。それどころか、

「あいついい奴だよ」

とまで、一声かけてくれた。きっと南雲くんの人望が厚いのね、それしか思わなかった。まさか、立村くんの指揮とは思わなかった。

羽飛くんが南雲くんに食ってかかり、南雲くんが堂々と彰子への想いを断言したこと。これも初耳だった。

今の今までずっと、「あきよくんは自分のことを友だちの延長上として仲良くしたいだけだ」と思い込んでいた。絶対に恋愛の対象として見られていることなんてない、そう思っていた。羽飛くんが彰子を「もてる男がからかっただけなんだ」と思い込んだのも当然だと認識していた。

でも、南雲くんはクラスの男子たちの前で、堂々と、「そうだ、俺は奈良岡のことが好きだ！」

と言い切ったという。

——私みたいなおかちめんこのことを、そんな意味で好きだなんて、からかうつもりだったら絶対に言えないよ。

あわてて南雲くんの書いた班ノート部分をめくった。

あまり興味がなかったからじっくり目を通したことがなかった。

音楽のことや、毎日のこと、そんな感じだろうと思っていた。

——僕は将来、父のような会計士になって、家族全員で暮らしたいと思っている。今、事情があって妹はうちにいないけれども、いつかは家族で仲良くくらししていけたらいいなと思っています。

——みんなから僕のことを軽い軽いといわれますが、そんなことはありません。僕はそれなりに、真面目なつもりです。

——うちのおばあちゃんは小さい頃から僕の面倒を見てくれました。最近は大い声で話さない気づいてくれないので、早く補聴器のいいのを買ってあげられるくらいお金を稼ぎたいです。だから、バイトは許可してほしいです。

もちろん班ノートに書いてあることが全て本当だとは限らない。

けれど、南雲くんのうちがただ、「軽い」だけではないことも、読み取れた。妹さんが事情あってべつの方に住んでいることも、たぶん何かの時に聞いたのかもしれない。だからデート中は話に出さなかった。やたらと話の中で「俺軽いと思われているかもしれないけど」と出てきたのは、もともと気にしていたのだろう。時也が南雲くんに話し掛けられたのが「山乃耳鼻科」だったのも、おばあちゃんのために毎回薬を取りに出かけていて、それでと考えるなら話は通る。

ちゃんと、彰子の前に南雲くんについての情報は並べられていたはずだった。テスト前に消しゴムをほしがったりして、それを大切に握り締めながら問題を解いていた段階で、南雲くんの本心が本物だと気づいていたら。

ナッキーや時也と一緒に学校で待ち合わせて出かけた時、南雲くんの様子がふつうじゃないと気づけなかったのはどうしてだったのだろう。きっと心の目を閉ざしてしまったのだろう。もし好きな相手が、他の男子たちと馬鹿騒ぎしながら帰っていったとしたら、面白くないのは当然だろう。

南雲くんが理科実験室で告白してくれた時も、彰子は真っ正面から答えられなかった。好きだと言われたことがぴんどこなかったのもあったし、友だちでいたいとだけ思っていたからだった。付き合ったら友だちでも居られなくなる、でも好きな相手は羽飛くんだとも意識していた。だから、答えられず保健室に避難してしまった。彰子が逃げ出した間、クラスの中で南雲くんはどんなに苦しかっただろう。恥ずかしい思いをしたのだろう。立村くんが回りの「気」に毒されて倒れたくらいだから相当ひどい状態だったのだろう。

——私、何にも気づいてなかった。

目の前が暗い。文字がだぶって見えた。目が疲れたわけじゃない。光りを見つめすぎてぼーとしたような感じだ。ナッキー、時也の姿が浮かんできた瞬間、もう彰子は耐え切れなくなっていた。

——時也も、ナッキーもみんな私のことが大好きだって言ってくれたよね。わかるよ。すごく嬉しいって思った。なのに、正直なのがいいことだって思って平気な顔して、私、あきよくと「デート」するとか、「友だち」としていい子だとか、さんざん言ってたわけなんだ。

——もし、ふたりが私のことを本当に「好き」だったなら。

ナッキーの、大人びた瞳が思い起こされる。

時也の、ずっと背中に張り付いていた姿が見える。

——私、顔とか体型とかで悪口言われるのは、当然だと思ってる。でも嫌いじゃないからいいと思ってたよ。けど。

ひとりごと、「ごめんなさい」とつぶやいていた。

彰子は文集を開いたまま、涙を流れるままにしていた。部屋の中のものみなぼやけ、輪郭が崩れていったのを感じた。

——私、ちゃんと目の前にころがっていること、何にも見てなかったんだ。それでさんざん人を傷つけてきたんだ。こんな性格の悪い子を、あきよくんも、ナッキーも、時也も、周りのみんなも好きだって言ってくれてたんだよね。違うよ、みんな、私が本当は何にも気づかないおばかだってこと。ただのほのんとしてたこと。人を傷つけて平気でいたってこと。こんな奴、嫌いだよね。ごめんなさい。

かつて彰子のことを思ってくれていたであろう、そして気づいてあげられなかった相手たち、



全ての人に謝りたかった。そして。

——やっぱり、私は、つきあえない。ごめんなさい。

ナッキーにも、南雲くんにも、電話しなかった。本当だったら南雲くんにも、デートのお礼を言いたかったけれども、今の彰子だと何を口走るかわからなかった。またナッキーにも、また親切なつもりで傷つけてしまうかもしれない。どうしたらいいかがわからなくなっていた。

部屋が暗くなってに灯をつけずにいたら、ノックが聞こえた。

あわてて机のライトだけひっぱってつけた。赤いかさで覆われた柔らかい光りだけが、ゆらいでいた。

「彰子さん、今いいかい」

父は小さい頃から娘のことをさん付けで呼んでいた。顔に、涙の跡がついていたことに気づかれたのだろうか。少し口籠もりながらも、目は優しかった。父に怒られたことはほとんどない。気が弱いけれども優しいお父さん。彰子にとっては大好きな人だった。担任した子ども達にも、小さい頃は慕われていた記憶しかないのだけれども、どうしてこうなってしまったのだろう。

「そろそろ夕食、作なくちゃね。今降りるから」

「昨日のスープの残りがあるだろう。暖めるだけでいいさ」

——お父さんみたいな先生ばかりならいいのに。

——どうしてみんな、お父さんのこと嫌うんだろう。

机から椅子をひっぱりだし、ぺたんと座った。父はベットに腰掛けると、大きくあくびをした。昨夜は遅かった。何時くらいに帰って来たのかわからなかった。彰子も自分のことで精一杯だったから、覚えていない。

「お父さん昨日、遅かったね」

「お前の親衛隊長のところに行ったよ」

ナッキーのうちらしい。びくりとした。

「だってナッキー、あの」

「朝からうちを飛び出していったって聞いたんだよ。お母さんはそれほど心配していなかったよだし、明日香ちゃんのこともあったからなあ。ただ、宗くんの方は」

彰子を笑顔で見つめた。

「彰子さんのことになると、本当に向きになると、お母さんが笑っていた」

取り分けて何事もなかったようだった。彰子は少しだけ気が楽になった。もしやナッキーが南雲くんを相手に再び怪我をさせたんじゃないかと恐ろしい想像までしていたのだ、安堵のため息くらい吐かせてほしい。

「じゃあ、何もなかったのね。ナッキー、悪いことなにもしてないのね」

「してないわけじゃない。実際、お前も時也から聞いているだろうからわかるだろうが、他の子を怪我させるくらい殴ったのは、やはりよくないことだよ。たとえ自分の大切な人を罵られたか

らといって、許してはいけないことだからな。宗くんが一週間の自宅謹慎処分を受けたのは仕方ないことだ」

あの、学ラン姿で腕を組んでいるお父さんのことを、馬鹿にされたからだろうか。ナッキーもお父さんのことが大好きなはずだ。悔しくてならなかったんだろ。

「でも、ナッキーはちゃんと謝りに行ったでしょ。その子のところに」

「ああ、行ったよ。でも、頭を下げてすむものとすまないものがあるのも、また事実なんだ。宗くんはきちんと、自分を押さえてあやまった。間違いを認めた。だが、簡単には終わらない問題がたくさんあるんだよ。彰子さん」

「簡単に終わらない問題、ってなに？」

だって、ナッキーが帰って来た時、すっきりした顔でもどってきたことを覚えている。もし、あそこでいざこざが起こったとしたら、もっと暴れていても変じゃない。ナッキーは冷静に時也の訴えおよび彰子の相手について問いただし、純粹に燃え上がっていた。

父は肩を落としている。言い出しにくいのだろう。彰子には全く想像のつかない出来事がからんでいるらしかった。言いかけたのならば、聞きたかった。聞かなくてはならない内容なのかもしれなかった。

「お父さん、言ってよ。私、もう覚悟できてるから」

「今すぐどうという問題ではないよ。まだお母さんにも話してないけれどな」

背中影が大きく写る。父の細い指が何度か組み合わされる。

「ただ、これからいやなことがたくさん起こるかもしれないよ」

「だから具体的に言ってよ、お父さん」

とうとう父は口を切った。

「PTAとか、学校側や、いろいろなところから嫌がらせを受けるかもしれないよ。彰子さん。それだけは覚悟してくれるかな」

言葉が出なかった。

——嫌がらせって、いったい、何？

「私、わかんないよ。ナッキーと、学校側からの嫌がらせとか、謝りに行っても許されなかったことってなんなの？ お父さん、もっと分かりやすく教えてよ。お願い」

さっき涙を出し切ったと思ったら、また沸いてきた。嫌われるなんて、今まで一度も経験したことがないのに、どうしていきなり、この一週間でそんなことになるんだろう。彰子のことを敵視する「南雲くんの元彼女関係」とかそういう人はいるかもしれないけれど、奈良岡家を丸ごと嫌う存在っていったいなんなんだろう。わからなかった。

「彰子さん、大丈夫だよ。お父さんはね、彰子さんやお母さんに手を出す人がいたら、学校を辞めてでもきちんと守るよ。その辺は安心していい。でも、言葉の矢だけは自分で防ぐしかないんだ。彰子さんはもしかしたら、他の人とか、今まで友だちだと思っていた人たちから、冷たい言葉をたくさんぶつけられるかもしれない」

「たとえば？」

そうだな、と父はつぶやきつつ、

「右とか左とか、いろいろあるだろう。そういう思想関係に被れているのではないとか、無言の電話がかかってくるとか、そういう類の嫌がらせだよ」

「もしかして、ナッキーのお父さんと関係が」

「いや、それはないよ。宗くんのご両親は思想的にそぐわないものがあるかもしれないが、おふたりとも立派な人だよ。それは彰子も良く知っているだろう」

紅白まんじゅうを持ってきてくれて、彰子の頭をなでなでしてくれたおじさんのことが思い出された。頷いた。

「宗くんにしてもそうだ。ちゃんと自分の非を認めて、堂々と頭を下げるのはとっても勇気のいることだ。だが、受け入れられない人にはどうしても受け入れてもらえないものがあるのも、わかるだろう？」

「それが、思想ってこと？ ナッキーのお父さんの、『君が代』みたいなもの？」

どんなに時也が性格のやさしい真面目な子でも、鼻水が治らない限り不潔感を拭い去ることはできない。それと一緒に悪口を言われているにも関わらず、彰子から離れなかった時也のことを思い出した。

「そうだな。これから宗くんも学校に戻るわけだが、きっと辛いことが待っていると思う。彼はそんなに弱い奴ではないし、お母さんもその辺はなんとかなると笑っていたよ。宗くんについては、お父さんは心配してないよ。ただ」

奥歯をかみ締めるように、こくこくと頷き、もう一度彰子に真剣なまなざしを向けた父。「彰子さん、宗くんと友だちだということで、これから近所の人たちからいろいろ言われると思う。でも、お父さんは彰子さんが彼のいいところを忘れてしまうくらい冷たい子だとは思っていないよ。彰子さんは、お父さんにとって、もちろんお母さんにとって、自慢の娘なんだよ。花散里の君って、知っているだろう？」

「知らない、なに？」

本当に知らない。彰子は古典文学については疎い方だ。膝を軽く叩いてお父さんは笑った。「そうか、彰子さんは理数系だったなあ」

「なんかそういう風に私のこと、言ってるんでしょ」

「時也から聞いたのか？ それとも宗くんか」

言葉が和んだ。

「『源氏物語』の中に出てくるお姫様の一人で、主人公光源氏が大切にしていた女性のことなんだよ。光源氏くらいは知っているだろう？」

「うん、女つたらしの代名詞ね」

「身もふたもないなあ。とにかく、光源氏はたくさんのお姫さまで心根のやさしい、容貌はまあいまいちの花散里という女性を大切にしていたんだ。ひまな時にあらずじくくらいは読んでおきなさい。光源氏も不遇な生活を送っていたけれども、たまに花散里のところに行くと、心が和んだそうだ。心の暖かい人だったそうだ。『源氏物語』には、いろいろな性格の女性が出てくるけれども、お父さんはその中で、この花散里の君が一番好きだし、こういう人になってほしい、いつも思っているんだ。彰子さんにはね」

——私、そんな性格よくないよ。

首を振る彰子に、父は額を軽く撫でてくれた。

「もし、宗くんの周りでいろいろなことがおこり、彰子さんの方にもとばかりがきたとしても、どうか、それで友だちをやめるようなことだけは、してほしくない。お父さんの言いたいのは、それだけだよ。まあ、そんなこと言う必要なんてないかな」

さっき、美里ちゃんが泣きじゃくりながら立村くんのことをかばっていた。あの時と同じ泣き方かもしれない。彰子は止められなかった。もう、声を出して涙を流しつづけるしかなかった。父に泣き顔をさらしてもよかった。顔を覆うこともできなかった。ただ、父の前で、ひたすら声を上げてつぶやいていた。

「私、そんな性格いい子じゃないよ。でも、ナッキーのことは大切にするよ。お父さん、お父さんも、政治とか思想とかそんなの関係なく、仲良しは仲良しでいるのが大切だって、そう言いたいだけだよ。私、そうだよ。絶対にそうだよ。お父さん」

ティッシュを引き抜いて、彰子の手を渡すと、父は出て行った。

「じゃあ、スープを温めておくから。ゆっくり、降りてきなさい」

食事後両親は、居間で真剣に話し合いをしていた様子だ。盗み聞きはしなかったけれども、何度か「夏木さんところの」「ナッキーがねえ」と相槌を打つ母の様子からして、たぶん、彰子と同じことを聞かされたのだろう。

もう夜の十時近くだった。泣くだけ泣いた。食べるだけ食べた。そっと部屋の中で彰子は、母から借りた「週刊メディカル・イン」を開き、女医さんのインタビュー記事などを読みふけていた。写真映りのいい美人さんが多い。お医者さんになるためには、別にルックスは関係ないと思うけれども、やはり昨日の今日だけに辛いものがある。

真っ赤なワンピースをしまいこみ、彰子は父の言葉とナッキーの瞳、南雲くんの笑顔、時也の表情を思い出した。みんな仲良く笑顔でいられたらそれでいい。そう思って彰子が選んできたことが、もしかしたら間違いだったのかもしれない。

——どうしたら、みんなが楽しくいられるんだろう？

——父さんの言うとおりに、あしたからいやがらせが始まるの？

——そんなことはないよね、お父さんの考えすぎだよ。

でも、思い当たる節がないわけではない。ナッキーが怪我をさせてしまった女子のところに行ったらいいが、許してもらえないどころか彰子の父にまで失礼なことを言い返されたらいい。きっと、ナッキーをかばうような言葉を父は口にしたのである。それが仇となって。

P T Aとか学校側、も敵に回すようなことを言ってしまったのだろうか。

もともと父は政治に無頓着な人だった。ナッキーのお父さんとはうまが合って家族ぐるみの付き合いをしていたけれども、特別に思想の右左というのはなかったようだ。たとえ日常的に日の丸が掲げられ、たまに軍歌の音楽が部屋に流れていたとしても、その人とは関係ないことだと考えていたようだ。

——でも、ナッキーと仲良くするってことは、お父さんも同じ思想の持ち主だって思われるこ

とになる。だから、なのかな。いやがらせが始まるかもしれないというのは。ナッキーも小さい頃から、一部の大人に「右翼の子ども」とか言われていたって聞いたし。無言電話とか、日本刀持った人とかがうろついて大変だったって聞くし。

——辛いのはお父さんもそうだけど、ナッキーのうちだよ。

——ナッキーに今、私、何してあげられるんだろう。

してもらってばかりだ。彰子を守ろうとしてくれるナッキーに、何も恩返ししていないことに、今気づいた。

——やっぱり、「友だちでいる」ことしか、ないよね。

——でもそれだと、かえって傷つけることになるのかな。

何度か無言電話がかかってきた。とうとう始まったのだろうか。

最初は機嫌よく出ていた母も、五回目には、

「もう、困ったわねえ。電話代もったいないのに、暇な人たちよねえ」

と、留守電に切り替えてしまった。

「彰子も留守電でいれてくれた人に、こちらからかけなおすようにしなさいね。まあ、しょうがないけどね。困った人にはこちらも頭使うしかないしね」

真っ白いネグリジェ、当然どふりふり。聖歌隊の人みたいな格好。母は彰子ににっこり笑いかけた。

「大丈夫よ、お父さんは悪いことなんもしてないんだからね。ナッキーのことは心配しなくても大丈夫だって。あ、別の意味での心配は、彰子もしなくちゃいけないか。あの、かっこいい彼。ナッキーにもちゃんと説明してあげなさいよ」

母は南雲くんのが気に入ったらしい。彰子は良く知っている。母が若い少年たちのアイドルグループを非常におきに召しているということ。彰子のクラス集合写真を見ては、「この子美少年よねえ」とつぶやいていることを。いやがらせとか無言電話がこれからたくさん襲ってくる前夜だというのに、おめでたい人だ。

——心配するなって、言ってくれてるのかな。お母さん。

「早く寝なさいよ」

母が出て行った後、また電話が鳴った。五回鳴った後、留守電に切り替わった。案内のメッセージが流れた後、録音される言葉を待った。無言のまま切れた。やはり始まった。

心配だったので戸口も確かめた。爆弾なんて置かれていることなんてないとは思っただけ、念のために。

やはり、何か紙くずが押し込まれていた。郵便物は多いほうだと思うが、夜十一時過ぎにこれだけつめこまれるのは異常だった。一枚ずつ広げてみると、手書きで、

「危険思想の家庭を擁護しようとする最低教師よ、辞職しろ」

わざわざすみからすみまで丁寧に縁取りしているチラシだった。

なんで父がここまで悪口を振りまかれなくてはならないのだろう。よっぽどナッキーとのから

みでごたごたしていたのだろう。見せる必要もない。彰子のごみ箱に捨てたのち、もう一通、きちんと折りたたまれた封筒を手にした。切手は貼ってない。封筒には小花模様が散らされたかわいらしい絵柄。母の趣味たるとふりふりブランドのもののはずである。しかし上に書かれた文字は四角張っていて、どうみても男手だ。しかも、下にはしみがついている。

——時也だ。

立ったまますぐに封を切った。入っているのはおそろいの便箋で一枚だけだった。

——明日の朝六時半、夏木とあの男が、決闘する。

——六時に迎えに行く。

用件だけだ。決闘、とはただごとではない。

電話ではなくあえて封筒で呼び出したのは、何かの理由があるのかもしれない。しかも、このどふりふり封筒を使ったというのにも、わけがあるのだろうか。

彰子は袖の下に隠して大急ぎ部屋に戻った。もう一度二行を読んだ。

——やはり土曜日、あの後、何かあったんだ。南雲くんとナッキー、私のことでまた言い合いになったんだろうか。どうしよう。ナッキーはただでさえ苦しい立場に追い込まれてる。南雲くんは私みたいな性格の悪い人間に、あれだけ一生懸命してくれたんだもの。みんな、私のことをいい子だと思い込んでるから、こんなにしてくれるんだ。本当は、誰とでも仲良くしたいだけの、いいかげんな人間なのに。人のことを思いやれない、最低の人間なのに。

時也が知らせてくれたのは、たぶんナッキーに気づかれないように阻止しようということだろう。父にばれたらまた別の意味で大変なことになる。まだ自宅謹慎期間中だ。その間に何かやらかしたら、もっと重い罰を受けるはめになる。しかもきっかけが、担任の娘だとしたら。父の立場ももっと悪くなってしまう。教師の世界には、思想的なからみもあつてごたごたがあると聞く。父は話さないけれども、同じ教師の娘やっている子が「組合が大変でうちの父さん、倒れそう」とぼやいているから。

あの穏やかな父が彰子に釘をさすぐらいなのだ。身の危険すら感じているに違いない。

——これ以上、私のことでみんなに迷惑かけられないよ。

——ナッキーも、時也も、それと、南雲くんも。

原因はすべて自分だ。自分の手ですべて片付けたい。

もう二度と、みんなから好かれなくなったとしても。

朝五時半に目を覚ました。母が起きだして食事の準備をしている。

「あれ、どうしたの彰子、あんた珍しいねえ」

「お母さんの方こそ、どうしたの」

スクランブルエッグとトーストを出してくれた後、燃えるごみ、燃えないごみをより分けていた。

「なんかまた変な手紙とかがきててね、ほら外の鉢植えが盗まれちゃった。捨てておいたから平気だけど。まったくねえ」

朝のもやがまだ外に満ちている。風が冷たい。ふうっと立ち上る冷氣。

「学校の委員会？」

「ううん、ちょっと出かけるところあるんだ」

「ははん、あの彼と、朝のデート？」

ちょこんと額をつつかれた。

「違うってば」

そんなこと言ったらまた、どふりふりの洋服を着るように言われてしまう。だから制服に着換えたのだ。まだまだブレザーを羽織ってもおかしくない外の風。彰子は時計を覗き込みながらまず、腹ごしらえをした。ごくんと野菜ジュースを飲み干した。

玄関でばさばさと気配がした。行こうとした彰子を、母が止めた。

「あんたはここで待ってなさい。お母さんが見てくるから」

用心だろうか。時也のお迎えだと彰子にはわかっていたから何も言わなかった。脳天気な声に変換されて、母が呼んでくれた。

「彰子ちゃん、時也くんよ。いつもありがとうね。しかし早いねえ。薬効いてる？ もしあれだったら遠慮なく言ってね。あら、でもだいぶ鼻の調子よくなったみたいねえ」

ここで薬の効果を確認するのが母の医師たるところだ。だ。

彰子の目からするとあまり芳しくないのだが。良くはなっているのだろう。

時也も学生服姿だった。何度もこっくり頷きながら、彰子に目配せをする。言いたいことは伝わっている。指で答えた。

「でもどうしたの？ 朝早いねえ」

「ラジオ体操に」

思いっきり吹き出したのは彰子と母、同時だった。時也だけ真面目だった。

「夏休みならともかくなんで今の時期に？」

母に聞かれると彰子もでまかせを言わなくてはならない。時也と目を合わせて、「どうする？ どうする」と合図をする。時也が続けた。

「鼻を直すために、朝早く起きて運動するようになって言われてるから。それで誘いにきた、んです」

一度言葉をとぎらせたのは嘘を言ったからではない。鼻が苦しくなったのだろう。ティッシュ

で鼻をかんだ。即座に彰子と母が手を差し出し、燃えるごみ入れに捨てた。

「そうなんだあ。時也くん、偉いねえ。彰子、それはあんたもこれから行かなくちゃだめよ。で、どこでやってるの？」

「念上寺の境内で、熟年クラブの人たちが毎日やってるところあるからそこで」  
知らなかった。ずいぶん遠くである。

「じゃあそこまで彰子をジョギングさせなくちゃね。あんたも少し運動して贅肉落とさなくちゃ。これからも時也くん、迎えに来てくれるの？」

時也は大きく頷いた。思わぬことになってしまった。明日以降、時也は真面目に彰子を迎えに来るだろう。母のお墨付きでちゃんと、ラジオ体操に通わなくてはならなくなるだろう。運動は苦手だ。

でもしかたない。自然な顔して家を抜け出し、ナッキーと南雲くんの「決闘」現場に向かわなくてはならないのだから。

「じゃあ彰子ちゃん、ジャージで行った方がいいんじゃないの」

「ううん、まっすぐ学校に行くからいいよ。行ってきます」

これ以上嘘に嘘を重ねるのはごめんだ。かばんと体育着が入った手提げを持って、彰子は急いだ。

時也と並んで歩き、小さな声でささやいた。

「決闘って、時也、何があったの？ ナッキー、まさかまた殴ったりしたんじゃ」

「それはない」

時也が断言した。

「ただ、奈良岡のことを決着つけたい、そう言ってた」

「誰と？ 南雲くんと？」

「そうだ」

まさか刃物を持ち出すなんてことはないと思うけれど、でも、もし、ばれたら大変なことになる。

「時也、もうひとつ教えてください。土曜日に、うちの父さんが、私を迎えに行くようになって言ったのはどういうこと？ 父さんも、私が南雲くんと会う約束してたのは知ってるんだよ。洋服買ってくれるって言ってたし」

「どふりふりでいいなら、俺が今度持ってくる」

「お願い、それだけはやめようよ！」

時也は大真面目だった。時也のお母さんが着古した洋服をこっそり持ち出すに違いない。彰子の趣味じゃないとわかっていても。

歩きがてら、時也が話したのは以下の事情だった。

ナッキーがクラスの女子を殴りつけ、その母親に罵られて止められなくなったのは知っている。自宅謹慎となり、非を認めないナッキーは部屋にこもりっぱなしだったのも父から聞いた。

そこで原因の発端だった時也が、「自分から」夏木家に向かうことを言い出したという。父



が連れて行ったのではなかった。

「時也が、言ったの？」

「俺の鼻が悪いのが、夏木を怒らせた原因だってわかってるから」

——気にしてるんだ。

「それに」

何度か立ち止まり目をこすると、時也が例のどふりふりブランドハンカチを取り出して手に押し付けてきた。新品のままだ。使うのになんとなくためらいがあったけれども。握り締めることで感謝を伝えた。

「なら先生のことを悪口言ってたこと、前から知ってたし、奈良岡のことをばかにする奴がたくさんいるって言ってたのを、伝えないと、夏木が怒る」

塾から電話をかけてくれたのはその時のことだろう。

小学校時代の友だちを集めて、留守電に応援メッセージを入れてくれた時のことを、彰子は忘れない。

奈良岡彰子危機一髪の話を超えしに聞かされ、ナッキーはぶちっと切れた。奈良岡先生……彰子の父である……も絶句するほどに、ナッキーは彰子の立場の辛さおよび気づいていない親に対してまくし立てたという。時也もその内容は「長すぎて」ほとんど覚えていないと言うから、相当なものだったのだろう。

しばらくナッキーの言い分を聞いていた彰子の父は、

「わかった。彰子さんに直接、お前の言いたいことを伝えてほしい。ただな、人に暴力をふるってしまったということは、どういう事情があっても言い訳はできないんだよ。宗くん、お前が先にすることは、傷つけてしまった人のところに出かけて、あやまることだ。許してもらえとは思うなよ。それが人間として最初にしなくてはならないことなんだよ。お前のお父さんは立派な人だけど、すべての人がそう思うわけではない。そう思うのも自由だ。だからその分、お前がお父さんを大事に思っていればいい」

「殴ったことだけは重罪だ」ということを伝えたいらしい。

ナッキーもその辺りで納得したらしく「彰子を呼んで説教する」ことを条件に、その女子のところへ頭を下げることを決心した。彰子の家に電話をよこし、ハイテンションなままに呼びつけたのは、この時だろう。

当然、時也は彰子を自宅まで迎えに行くことを「自分から」申し出た。

昨日父から聞いたところによると、あやまったナッキーに対して相手の両親は一切聞く耳をもつどころか、さらに屈辱的な言葉を浴びせたらしい。

「犯罪者の子ども、とか、寄ると怖いとか」

時也は正直に、おそらくナッキーからの口伝えをつぶやいた。

「失礼だね。反省している人にぶつける台詞じゃないよ」

「それで、なら先生がかばったらしい。なら先生が、夏木のことをあまりひどく言わないでくれと頼んだらしい」

——それで。まさか、そういうことで。

初めて納得した。

「でも、相手はさらに怒って、追い出したらしい。夏木、ぜんぜん、言い訳しないで手も出さな  
いで、うちに帰ったらしい」

「その後で、私に、説教したわけね」

ナッキーはすごい。強い。偉い。

ずっとなごやかにことを片付けたとあの時は思っていた。父も笑顔だったし、ナッキーも真面  
目にことを論じてくれていたし、想像なんてしてなかった。

——まさか、お父さんとナッキーに、そんな屈辱的なことが起こっていたなんて。

「奈良岡、泣くな。はやくハンカチつかえ」

「だめだよこれ。時也、これお母さんのもの、こっそり持ってきたんでしょう」

泣き笑いしながら、彰子は丁寧にたたみ直して返した。

「きっと、ものすごく高い、プレミアムものだよ。時也、気持ちだけ、いっぱいもらったから、  
もう私泣かないからね」

石のかたいのを踏んづけてしまい、転びそうになる。

「土曜日、教室すごかった。なら先生が来たとたん、女子たちが教室を出て行った。その後、校  
長室になら先生が呼び出されて、ほとんどあの日、自習だった」

つま先の小石がごろごろした。もう動けなかった。時也はじっと彰子の横顔を見詰めながら続  
けて、淡々と事実をつなげていった。

「なら先生、女子たちの親につるし上げられてた。ずっと、授業終わった後昼間でずっと、親た  
ちに文句言われてた。だから終わってから、俺が」

「時也、あんたから？」

口籠もるように、もう一度鼻をかみ直し。今度は自分のポケットにたたんでしまった。平べっ  
たくなっていた。

「このままだったら奈良岡も帰り道、あの女子たちの親になにかされるかもしれないから、迎え  
に行くって言った。なら先生、頼む、って言ってくれた」

——あの、いつもおとなしくてなかなか言い出せなくて、みんなから「鼻垂れ小僧」だとか言  
われていた時也が、私のために自分から、迎えにきてくれたんだ。ナッキーの命令でもなんでも  
なかったんだ。

——ただ、南雲くんのが気に入らないからじゃなかったんだ。私って本当にうぬぼれやの  
性格悪い、魔女みたいな奴。こんな子を、どうしてみんな好きになってくれるんだろう。時也ご  
めんね。

時也もきっと、ナッキーと組になって南雲くんに文句を言いたかっただけなのだと思い込んで  
いた。心のどこかで、「私ってもてるかも」といううぬぼれがあったのも否定できない。意識  
していなくても、そんなことないと思っても、でも彰子の態度にそういうところが見え隠れ

していたからこそ、女子たちが不快に思ったのだろう。見えてなければ誰も誤解なんてしない。

時也は彰子が危険な目にあうでないかと心配して、自分の判断で、自分の意志で、十五分以上かけて彰子を迎えに来てくれた。簡単にできることじゃない。

「時也、ごめんなさい」

「俺、したいこと、してるだけだ」

立ち尽くしたまま時也は待っていてくれた。

連れて行かれた原っぱには誰も、ラジオ体操している奴なんていなかった。音楽だけがかすかに裏のお寺から聞こえてきた。時也の言ったお寺さんは裏の方なのだろう。公園を作りかけの原っぱには、丸のまま切り倒された木が横たわっていた。ありあわせにこしらえたいらしいベンチが幾つか並んでいた。真後ろの陰には大量の廃材が重ねられていた。だいたい、彰子の背丈ぶんよりはるかに高く積み重なっていた。

時也は彰子を案内すると、その辺で拾った板を持ってきて座るように指差した。色が濃い。朝露で湿っていた。

「ここにいるの？ ナッキーたちが来るの？」

「たぶん」

短く答えると、時也は黙るよう口を覆って合図した。

「ナッキーたちは、私がいること知ってるの？」

「絶対、知らない」

なら、絶対に口を利いてはいけない。彰子はおとなしく従った。

一分、二分、三分。長かった。朝霧が木々の端から落ちて、小さな音を立てている。背中に落ちた。もう泣かないようにしよう。決意した。

時也が振り返り、もう一度、両手で口を押さえるしぐさをした。自転車の音がかすかにする。二重に聞こえる。木の陰に隠れて彰子は耳を済ませた。きいっと、ブレーキが響く。あれはナッキーの金銀まだらの自転車だ。もう一台、聞き覚えのない響き。たぶん、南雲くんだ。

「待たせたな」

「こちらこそ、どうも」

腰の低い返事は南雲くんだった。

彰子は時也に目で合図され、立ち上がった。木々の隙間に目をくつつけた。細く見えるのは、南雲くんとナッキーがふたり立ったままにらみ合っている姿だ。想像以上に近い。ふつうの話し合いに見える。

「事情は大体理解したんですが、夏木くん」

軽く、へらへらした風に見せている南雲くん。しかし、声が少し作りっぽい。

「俺も、一日考えた」

ナッキーはやはり学生服姿だった。が、バンダナも離さない。

あと一日謹慎期間があるはずなので、学校には行かないはずだ。

「だが、お互い、共通した目的は一緒だっつうことは理解した」

「御意」

含み笑いを交わすふたり。背中が寒くなる。時也の方を見ると、じっと真剣な顔をして、目をくっつけている。鼻水の音が聞こえないよう、必死にティッシュで鼻を押さえているのが痛々しい。

「要するにだ。南雲、自分のやらかしたことへの責任をとりたい、そういうことなんだな」

「そういうことっす」

南雲くんの表情を伺うと、そこには真剣な中にも勝ちを意識したような落ち着きすら感じられた。制服姿で、ネクタイもゆるめだ。しかし、髪がちょこっとてかてかしているのはポマードか何か塗っているからか。南雲くんは、軽くうつむいて息を整えるようなしぐさをした後、笑みを浮かべつつ続けた。

「俺が奈良岡さんにベタ惚れだっついうのは、まあこの前の話を聞いてもらったらわかるでしょうな。俺はみなさまが思うほどに女たらしでもないし、軽くもないつもりだが、世の中人が判断することだから、その辺の言い訳はしませんぜ。ただ、俺が軽い過去を清算しないでこういうことをしたために、奈良岡さんに迷惑をかけていることは確かなんですよ。夏木くん」

「自覚してるじゃねえか」

「たぶんこのままだと、奈良岡さんは俺の軽い行動のためにさんざんひどい仕打ちされるでしょう。今だって大変ですよ。俺が元の彼女にきちんと話をして、断ったつもりでいたのに、周りへの配慮が足りなかったゆえに、奈良岡さんにはいろいろな辛い思いをさせている。そういう風に見せないのが、彼女のいいところだし、俺が死ぬほど惚れぬいているところですが、夏木くん、君も嫌でしょう。好きな子が苦しんでるのを見るのは。だから、徹底してこれからは」

指先で魔法をかけようとするかのように、くるくるっと回して指差した。

「青大附中においては、奈良岡彰子さんを守ろう、そう決めたわけです」

隣りの時也は息を止めている。口で呼吸したくなるのがわかる。彰子の口も開いたままだった。

——あきよくん、そんな。

一言一句、南雲くんの言葉を頷きながら聞いていたナッキー。ポケットに手を突っ込みながら、ぐるぐると南雲くんのそばを一周した。見たことのない、計算高そうな瞳が見え隠れした。

「まあな、南雲、お前が彰子に惚れぬく気持ちは、よおくわかる。それ以前によく青大附中の野郎どもは、彰子に熱を上げなかったんだ。そっちの方が俺には腑に落ちねえ」

——ナッキー、それは違う。勘違いだよ。

「俺の知っている限りでも、たくさん彰子に惚れぬいていた奴がいるし、女つきでありながら彰子の親衛隊だと名乗る連中も倍はいる。お互いの目的はひとつ、彰子を守るためだ」「御意。おおせの通りでございます」

「南雲、今の話で、青大附中においても彰子がかかなり厳しい立場にあることはよおくわかった。責任をとりたいたいという気持ちに嘘はない、とは信じてやろう」

「ありがたいことでございます」

いやに腰が低い。

「だがな、南雲。土曜にも話したとおり、現在俺のやらかしたことが原因で、彰子、彰子の父ちゃん母ちゃんがとんでもないことに巻き込まれる可能性がないとも言えない」

——ナッキー、まさか。

さっき時也から聞かされた話が蘇り、耳を覆った。聞こえてしまう。

「俺は生まれ持って右翼の息子だ。日の丸だか君が代だか、そんなのはどうでもいいが、俺の父ちゃんのことを馬鹿にされるのだけは許せねえ。怪我を相手にさせたのはまずかったと思うし、その辺は反省している。だがな、これは俺の問題であって、彰子やなら先生たちにまで火の粉が掛かるのは許しちゃおけねえ！」

小さく、「そうだ」とつぶやく時也の声。

「学校の中でだったら俺は、徹底してなら先生、彰子の悪口を言う奴を肅正してやるんだが、青大附中ともなったら手が届かねえ。わかった。南雲。これから、契約を結ぼう」

——契約？

時也と顔を合わせて、もう一度目を近づける。驚いているのは南雲くんの方だ。口をあがあがさせて、小さく「契約？」とつぶやいている。ナッキーは落ち着いている。

「俺たちの目的はひとつだ。奈良岡彰子を、日夜守りたい、その一点だろう」

「ごもっとも、でも」

「だからだ。俺も本当だったら青大附中に侵入して、彰子のことをブタブス扱いする女どもをしばいてやりたいところだが。仕方ない。俺はこの町で彰子のことを守るべく命を賭ける。だから南雲、お前は青大附中の近辺において、彰子に手を出す奴をしばいたれ。いいな。同じ女に惚れた男の、約束だ。ただし」

「ただし？」

注意深く言葉を継ぐ南雲くん。なにか、まずそうな感じらしい。

「決して、お前に彰子を渡したわけじゃねえからな。彰子がお前を選んだという確証はまだないわけなんだからな。あいつは南雲、お前のことをまだ『友だち』としか思っていないみたいだし、もし付き合うなんてことになったら、なら先生本当に怒るだろうなあ。俺、なら先生には一目置かれてるから、もしなにかすけべなことやらかそうとしたら、すぐに報告するからな」

「あの、夏木くん、ちょっとまった」

「待たねえよ。今は緊急事態なんだ。俺だって、お前みたいな『パール・シティー』もどきの優男に彰子を任せたくねえよ。きっと、色気のある女が出てきたらふらふらっとそっちになびいちゃうんだろうな。けっ、どこまで本気だか、じっくり見せてもらおうじゃねえか」

時也が顔を木から離し、するっと前にまわってナッキーの背中にたった。驚いているのは南雲くん。まさかこいつまで来るなんて言いたげだ。ナッキーも振り返るや、

「時也、なぜこんなところ来てるんだ！」

「俺もその契約結びたい」

ぼそとつぶやく時也。

「今の話、お前聞いてたのかよ！」

「俺は、親の方を受け持つ」

南雲くんがそっと顔を覗き込んで、

「親？」

とつぶやく。

「もう奈良岡のうち、鉢植え盗まれたり、いやがらせのチラシ入れられてる」

「どうしてそんなこと知ってる？」

「さっき奈良岡のうちの前に、クラスの女子たちの親がチラシ書いていた。悪口ばかりだ。そういうことされているかどうかの情報は、うちの親つかって聞き出す」

彰子はもう動けなかった。

——ナッキー、時也、南雲くん、私、そんな守る価値のある子じゃないよ。

見ると辛くなる。顔を離してひざを抱えた。かばんに顔を押し付け、声を押し付けた。

どのくらい時間が経ったのだろうか。水を弾くかばんの上に、小さな涙の染みがついていた。

顔を上げると、いつのまにかナッキー、時也、そして南雲くんがしゃがみこんでいた。

「おい、彰子、泣くなよ」

ナッキーがほおの触れそうな側に一緒にいた。顔を上げた。顔が百倍二百倍、不細工に見えてるだろう。いつも笑顔でいたかったのに。声がつまってしまう。時也がもう一度、花柄のハンカチをかばんに載せてくれた。

「今の話、全部聞いてたのかよ」

「うん、盗み聞きなんて、ごめんね」

「どっちにせよ、俺も話すつもりだった。なら先生にも」

南雲くんだけが立ち上がって、じっと見下ろしていた。何も言わなかった。

「俺も、父ちゃんのこと、こんなひでえことになるなんて思ってなかったんだ。彰子、ごめんな。なら先生にも、おばさんにも、あやまらないとって思ってる。けど、俺ができることったら、このくらいだ」

すうっと、南雲くん視線を向け、ナッキーは力をこめてつぶやいた。

「青大附中に用心棒をつけてやることくらいしか、思いつかなかったんだ。彰子」

「私、そんなこそしてもらえような性格いい子じゃないよ。ナッキー」

こらえきれず涙ぐみ、彰子は三人の顔を見回した。みな、穏やかに、心配そうに彰子のそばにいる。

「私、みんなと仲良くしたかったなんて言ってて、結局、いいとこばかり持っていこうとしてただけなんだもん、私、二股かけようとしてたってことだよ。汚いよね。失礼すぎるよね」

「そうしてほしいって、俺が思ってるんだ」

後ろで手を挙げてるのが、ささやかな存在感を主張する時也。

「俺は、彰子がいつもげらげら笑っていれば、それでいいんだ。とにかく、青大附中で何かいやがらせされちゃったら、こいつをとことんこき使え。別の女に走るようなことになったら俺に連

絡しろ。もちろん、締め上げる。俺の目が届くところは俺がやる。母ちゃん関係は時也が担当する」

ナッキーは笑みを浮かべて彰子を一秒射た後、時也に振り返った。

「時也、さっきなら先生のうちにいやがらせのチラシ撒いた奴がいたって言ってたよな」

「たぶんそろそろ入っているころだ」

「謹慎が終わってねえから動けねえけれど、なら先生にすぐ報告してくれ。チラシの場合は大抵、誰が作るか見破ることができるってうちの父ちゃん言ってた。捨ててねえかどうか聞いてくれ」

「わかった、すぐうちに帰る」

「俺は、ちょっと彰子のうちの周り見てくる。なあに、花泥棒かよ。簡単だぜ、俺が捕まえてやる」

かばんを叩いて、ナッキーは時也に耳打ちをした。

「じゃあ、帰ったらまた報告するからな。彰子、負けるなよ。それと」

南雲くんにもう一度指を指した。一緒に時也も真似をした。

「いいな、契約は成立したぞ。破ったら、ただじゃ置かねえからな！」

時也の頭をぶんなぐり、ナッキーは去った。

向こう側からはゲートボールの稽古をするらしい、六十代以上の男女が準備をしていた。でも彰子たちには気づいていないらしい。ちょうど陰だからだろう。ナッキーたちを見送りながら、目にたまっている目やにをティッシュでふいた。泣き過ぎだった。

南雲くんはしばらく身動きしないでナッキーたちを眺めていた。横顔は、クラスの女子たちが「きゃーかっこいい」と騒ぐ、まさに「パール・シティー」そのものの表情だった。冷たくも見え、きざっぽくも見えた。ずっとナッキーがいる間は仮面を被っていたようだった。ポーズを崩して、ふっと彰子を見下ろし、見慣れたすかつとした笑顔に切り替えた。

「あきよくん」

「ああ、俺もほっとした」

ナッキーがいた反対側、左側にそっとしゃがみこんだ。

「あいつこええなあ。彰子さん、やっぱり、俺が思ったたとおりもてもてじゃん」

「そんな、私」

「もっと早く、言えばよかったなあ」

彰子の側にべったりくっついた。お尻がぶつかり合う。

「用心棒でよければ、しばらく使ってもらえませんか、彰子さん」

「そんな、あきよくんに私、失礼なことばかりしてるよ。ナッキーは二股でいいとか言ってたけど、そんな私」

「二股なんかじゃないって」

言われた言葉が耳に残り、まだすとんと頭の貯蔵庫に納まっていない。

「私、最初、あきよくんが私に、付き合っって言ってくれた時、クラスの子が思ってる通り何か裏があると思ってたもん。おばあちゃんの病気で病院紹介してほしいんだなって思って、お母さんから循環器系の病院教えてもらったもの。それに、私、人を見る目なんてないもん」

昨日、美里ちゃんがつぶやいていた言葉を思い起こしながら、

「理科準備室のこと、あった後、あきよくんが羽飛くんとけんかしてたって聞いたよ。きっとクラスでは嫌な思いするんだらうなあって思ってたら、みな、D組では暖かく迎えてくれたし、そういうもんだなって思ってたんだ。でも、それって、立村くんが全部そうするように言ってくれたんだってね。知らなかったよ。私、立村くんって何考えてるかわかんない人だと思ってたし、なんであきよくんと仲がいいんだらうって不思議でならなかったの。保健室で、私に『南雲は本気だよ、クラスのこととはなんとかするから』って言ってくれたのに、全然この人、何考えてるんだか、って不気味に思ったの。人のこと外見でしか見てなかったんだって、やっとわかったの。あきよくんにだって同じこと思ってたよ。本当はおばあちゃん思いの優しい子なんだって、土曜日、やっとわかったの。みんな、私、見ていることに気づかないで、勝手に決め付けてばかりいた、最低な人間だって、分かったの」

言葉がとりとめなく続いた。

戸惑った風に、となりの南雲くんは首をかしげていた。

「立村が、やはり、そうか」

ひとりごとつぶやき、

「ありがたいよなあ。やっぱりいい友だち、持つもんだ」

肩に手が廻った。身を堅くする。もちろん何もしなかった。

「五分だけ、こうしてていい？ それで、俺への罪滅ぼしはおしまい」

ぎゅっと、二の腕のところに顔をつけて、抱き寄せるようにしてくれた。

「学校なんだけど、これから俺の自転車に二人乗りしない？」

「だめだよ。規律委員がそんなことしたら。それ以前に自転車が壊れるよ」

「大丈夫だよ。俺、そんなにちやちなもの、持ってないもん。途中で降ろして、あとは歩けばいいもん。一緒に歩いて、教室に入ろうよ。もし、立村のことが気になるんだったら、あとで俺がうまく言っとく。なあに、最大のライバルからお墨付きをいただいたんだ。俺は負けないよ」

身体を抱き寄せてどこが楽しいのか彰子にはわからなかった。でも、五分間南雲くんは大満足だったらしい。身体を離れた後、名残惜しそうに立ち上がった。彰子に片手を差し伸べた。

「では、参りましょうか、花散里の君」

——本当の、「花散里の君」に近づけますように。

ナッキー、時也、南雲くんの心に届くように。

彰子は一息ついて南雲くんの瞳を見つめ返した。朝の光が滴り落ちる手のひらに、自分の手を重ねた。心こめて、握り返した。



— 終 —

## 花散里の手帳

<http://p.booklog.jp/book/77982>

著者：舞夜じょんぬ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/maiyouaogata/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/77982>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/77982>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ